

大津市歴史博物館調査報告書 13

大津の彫刻 2 石山寺 1

令和八年（二〇二六）三月 大津市歴史博物館

## 刊行にあたって

平成二年（一九九〇）に開館した大津市歴史博物館は、市内に所在する寺社の調査を行い、文化財に関する情報を蓄積するとともに、その成果を展示や刊行物を通して発信しています。一方で、従来の当館による調査は、企画展準備を目的としたものが中心であったため、展示構成に関わらない文化財の調査は一部にとどまり、寺社に伝来する文化財の全体像を明らかにすることはいまだ困難な状況にあります。そこで、市内のすべての寺社に所蔵される文化財を悉皆調査によって総合的に把握し、その後の保存活用基礎とすることを目的とした「大津市内寺社所在未指定文化財調査事業」を、令和四年度（二〇二二）より開始しました。さらに、令和五年度（二〇二三）からは、様々な寺社所在文化財のうち、彫刻を中心とした調査報告書を順次発行し、当館開館以来の調査も含めて、その成果を公開しています。

今年度は、東寺真言宗の大本山石山寺の彫刻に関する調査報告書を刊行します。石山寺は、瀬田川の西岸、小高い伽藍山の東麓に位置し、寺伝では聖武天皇の勅願によって東大寺初代別当の良弁僧正が建立したという、奈良時代以来の伝統を持つ近江屈指の古刹です。本書では、石山寺に伝わる彫刻のうち、平安時代以前の作例を掲載しています。石山寺の彫刻に関する基礎資料として、本書を活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の発行にあたり、調査・画像掲載に多大なるご理解、ご協力を賜りました石山寺様に厚く御礼申し上げます。

令和八年三月

大津市歴史博物館

## 〔目次〕

刊行にあたって……………	1
目次・凡例……………	2
解題 石山寺の歴史と彫塑―草創から平安時代まで―……………	3
一 ◎如来立像（石山寺本尊像内納入品のうち）……………	8
二 ◎観音菩薩立像（石山寺本尊像内納入品のうち）……………	18
三 ◎菩薩立像（石山寺本尊像内納入品のうち）……………	26
四 ◎観音菩薩立像（石山寺本尊像内納入品のうち）……………	33
五 ◎菩薩立像……………	41
六 ◎釈迦如来坐像……………	48
七 ◎金剛蔵王立像心木……………	54
八 ◎維摩居士坐像……………	64
九 ◎兜跋毘沙門天立像……………	71
一〇 ◎大日如来坐像……………	82
一一 ◎不動明王坐像……………	89
一二 ◎如意輪観音坐像……………	96
一三 吉祥天立像……………	102
一四 如意輪観音坐像……………	108
一五 地藏菩薩立像……………	114
一六 □阿弥陀如来坐像……………	120
一七 ◎二天立像……………	126
一八 大日如来坐像……………	138
一九 獅子・狛犬……………	144

## 〔凡例〕

- 一、本書は、大津市歴史博物館が調査を行った石山寺の彫刻のうち、平安時代以前の作例を取り上げ、図版・解説を掲載するものである。
  - 一、本書の編集は柘植健生（当館学芸員）が担当した。解説のうち一〜六については藤岡穰氏（大阪大学教授）、中田愛乃氏（大阪大学文学研究科博士後期課程）よりご寄稿いただき、七〜一九については赤津將之、柘植、森瑞穂（いずれも当館学芸員）が分担して執筆した。執筆者は各解説の末尾に記した。
  - 一、掲載の順序は、当館で推定した制作年代が古いものからとした。
  - 一、掲載作例のうち、指定文化財については次の記号を用いて示した。
    - ◎重要文化財、□県指定文化財
  - 一、各作例の図版の冒頭に名称を記し、所在堂宇を付記した。
  - 一、各作例の解説における記述項目及び順序は左記の通りとする。
    - 1 名称には品質・員数を付記する。
    - 2 法量はセンチメートルによって記す。
    - 3 保存状態の項には、破損・欠失・補修の状況及び過去の修理内容の概要等を記述する。後補の光背・台座・装身具については、この項で扱い、他の記述を省略する。
    - 4 銘文等の配字については、原則として実際の体裁により、体裁によらない場合は、原文の改行を／によって示した。
    - 5 銘文については、判読不可能の文字は□で示した。
    - 6 考察の項には、各作例の制作環境や制作者周辺についての特記すべき事項を記した。
- 一、本書掲載の写真は大津市歴史博物館撮影のほか、提供を受けたものについては次の通り。
- 45頁 古写真（石山寺）

## 解題 石山寺の歴史と彫塑―草創から平安時代まで―

### 一 石山寺の草創と天平宝字期の増改築

#### はじめに

石山寺は、寺伝では聖武天皇（七〇一～五六〇）の勅願によって東大寺初代別当の良弁（六八九～七七三）が創建したといひ、平安時代以降には真言密教の修学拠点となった古刹である。また、本尊の如意輪観音菩薩像が、貴賤を問わず広く信仰を集めた観音霊場としての側面も有する。こうした点から、その学術上の重要性は広く認知されており、寺宝の調査研究が継続的に実施されてきた。

なかでも、石山寺総合調査団による調査成果は特筆され、「淳祐内供筆聖教（薫聖教）」「校倉聖教」「石山寺一切経」「深密蔵聖教」の四つの聖教群からなる膨大な石山寺聖教の目録・奥書などが公刊されている<sup>①</sup>。さらに、石山寺伝来の絵画についても、調査団が継続的な調査を行っており、これまでの石山寺研究はこれらの成果に負うところが大きい。一方で、彫塑に関しては、伝来の遺品が聖教・絵画に比して少なく、書籍や展覧会図録などでその概要が示されることはあっても、網羅的な調査報告が行われる機会は多くなかった。

こうした状況を踏まえ、当館では「大津市内寺社所在未指定文化財調査事業」の一環として、石山寺に伝わる彫塑のうち、購入品や近代以降に所蔵となったものを除いた作例を総覧する詳細調査報告書を今後数年にわたり順次刊行することを予定し、今年度は平安時代以前の作品を収録する「石山寺1」を発刊する。石山寺の悉皆調査は令和四年度（二〇二二）から実施しており、その成果の一部は令和六年度の企画展「石山寺―密教と観音の聖地―」において公開した。また、本展会期中には、藤岡穰氏（大阪大学教授）のご協力のもと、石山寺伝来の金銅仏の金属成分分析調査を実施し、本報告書にその調査成果を藤岡氏よりご寄稿いただいた。さらに、本展終了後も石山寺の寺宝調査を継続的に実施しているところであり、こちらは次年度以降に刊行する報告書に掲載予定である。

本稿では、各作例の解説と重なるところもあるが、草創から平安時代までの石山寺の歴史の記述に重きを置きつつ、寺史と彫塑の関連を述べ、解題としたい。

石山寺の草創を考えるうえで重要な史料が正倉院文書である。正倉院文書は、光明皇后（七〇一～六〇〇）に仕える皇后宮職に付属した写経所の文書を主体とした文書群であり、そのなかには、天平宝字五年（七六一）から翌年にかけて、石山寺の増改築を担った「造石山寺所（のち造石山院所に改称）」関連の文書が含まれている。「造石山寺（院）所」は東大寺の造営に従事した「造東大寺司」の出先機関ともいふべき組織で、この文書群から石山寺の造営事情を知ることができる。

では、正倉院文書によって石山寺の造営過程をみていく。天平宝字五年以前より、石山の地には檜皮葺仏堂一宇、板葺板倉一宇、板屋若干宇を有する寺院があった。そして、天平宝字五年一月一七日に、安都雄足（生没年不詳）を別当とし、本尊である塑造丈六の「観世音菩薩」の制作が始められた。翌年二月上旬には写経所が造られ、三月初め頃には勢多庄から移築のうえ改築された良弁（六八九～七七四）の僧房が成った。同月一〇日頃には古い本堂を壊して新しい仏堂を造り始め、その他の堂宇もそれぞれ造営された。二月から四月にかけては、東大寺の鋳物所において石山寺の鐘や太子像の鋳造が行われた。七月には建築の主だった造作がほぼ終了し、八月には本尊の脇侍である「神王二柱」の彩色も終了した。用材は、甲賀山作所、田上山作所、高島山作所といった近江一円からもたらされたものを使用しており、東大寺造営に用材を供給した柚の材木が充当されている。こうして、小規模な山間寺院に過ぎなかった石山寺は、一年足らずで丈六を誇る塑造観音像と、多くの堂宇を有する寺院へと変貌を遂げたのである<sup>④</sup>。

このように短期間で増改築を行う契機として、天平宝字三年に保良宮の造営が始まったことが挙げられる。保良宮は、淳仁天皇（七三三～六五）によって造営が開始された宮で、現在の天津市国分周辺に所在したと推定されている<sup>⑤</sup>。保良宮造営には、近江国司で淳仁天皇の後見であった藤原仲麻呂（惠美押勝・七〇六～六四）の存在が関係していたようで、天平宝字五年一〇月には孝謙上皇（七一八～七〇）と淳仁天皇が平城宮から保良宮に移り、平城京に対する陪都「北京」として位置づけられることになる。その直後の一一月に開始された石山寺の増改築事業は保良宮と密接に関連し、石山寺は保良宮の付属寺院ともいえよう。

しかし、天平宝字六年五月、淳仁天皇との不和により孝謙上皇が平城宮へと戻ったことから、保良宮の造営が中止されたとみられ、保良宮鎮護の寺としての石山寺の重要性も低下した。これ以降、平安時代中期（一〇世紀）に入るまでは、史料に登場することもほぼなくなり、わずかに石山寺蔵「石山寺縁起絵巻」（重要文化財・鎌倉（江戸時代）に、延暦二三年（八〇四）に近江国の租税を充てて常楽会が行われたとの記録を残すばかりとなる。伝来の彫塑の中では、平安時代（九世紀中頃）の制作とみられる維摩居士坐像（八）が東大寺弥勒仏坐像（通称「試みの大仏」）と類似する作風を示し、石山寺と東大寺の密接な関係を示唆しているものの、本像の伝来は詳らかではなく、江戸時代の寺誌類にも見えないため、平安時代の寺史との関係から評価することは慎重にならざるを得ない。

石山寺に残るこの時期の彫塑としてまず挙げるべきは、本尊三尊像の塑造断片と右脇侍金剛蔵王立像心木（七）であろう。<sup>6</sup>これらは、正倉院文書に記される天平宝字五（六年）にかけて造像された「観世音菩薩」と「神王」に相当し、造石山寺（院）所の造像技法とその水準を今に伝えている。しかし、三尊像は度重なる修理を受けており、塑像から木像へ変更されるなど、複雑な経緯を経ているため、以下では三尊像と伝来する塑像断片の来歴を整理しておきたい。

まず、天平宝字期制作の三尊像は、承暦二年（一〇七八）の火災で罹災する。本尊の損傷の程度については文献によつて諸説あるが、永長元年（一〇九六）の本堂再建供養までに三尊そろつてなんらかの修復を受けたことは確かであろう。その後、建暦元年（一一二一）に中尊が崩壊し、寛元三年（一一四五）に再度修復されている。現在の木造如意輪観音坐像は、（一）の「伝来」にて述べられる通り、承暦二年から寛元三年までの間に本堂に安置されたものと考えられることができる。続いて、江戸時代の石山寺僧尊賢（一七四九〜一八二九）が編纂した『石山要記』や『石山寺年代記録』によると、中尊は弘安八年（一一八五）に西大寺叡尊（一一〇一〜九〇）により再興され、慶長八年（一六〇三）にも修復を受けたとされる。同書には、元禄三年（一六九〇）に「古塑像」を本堂の「後山」に埋めたともある。両脇侍は文政一三年（一八三〇）にも修復を受け、この時期まで塑像として存続していたことからすれば、元禄三年に埋められたのは中尊の断片が中心であったと捉えられる。なお、文政修理の際には、右脇侍の金剛蔵王立像は塑像のまま存続したものの、左脇侍の執金剛神立像は木彫で造り替えられた。

以上より、本尊三尊像は、天平宝字年間、承暦（永長年間、弘安年間、慶長年間、元禄年間、文政年間と、幾度となく修復を受けており、塑像断片には各時代のものが含まれていることが理解できよう。

現在まで残る塑像断片は、①石山寺伝世分（約九〇個）、②平成一四年金剛蔵王立像保存修復時発見分（挿図）、③平成一四年石山寺本堂発掘調査時発見分（コテナ約四五箱分）の三つに分けられる。

②は東大寺の奈良時代塑像などと類似することから同じ時期のものと同判断される。そのなかには口部の上層と下層が含まれ、上層は閉口するのに対し、下層は上歯で下唇を噛む姿で、何らかの宗教的意味を有することも考えられる。後述する心木の右足を大きく蹴り上げた姿態との関連についても興味を持たれる。

①、③は奈良（江戸時代）までの幅広い年代の断片を含んでいるとみられる。年代ごとの断片の特色の詳細は、発掘報告書や展覧会図録もあわせて参照いただきたいが、②とよく似た雲母混じりの軽量の彫塑土を使用した断片は奈良時代のものである可能性が高く、それ以外の黄土色や明灰色、乳白灰色の断片は承暦年間以降のものと考えられる。

しかし、承暦年間以降の断片がいつの修理によるもののかを確定するのは、検討材料が不足しており困難を伴う。叡尊の弟子・忍性（一一二七〜一三〇三）が拠点とした神奈川・極楽寺の仁王像とみられる塑像断片（鎌倉時代）といった中世塑像の調査を継続し、年代ごとの特色を明らかにする必要がある。<sup>11</sup>

一方の心木（七）については、おおむね天平宝字期当初のものが残っている



挿図 金剛蔵王立像塑像断片  
奈良時代（8世紀）

が、保存状態と当初の像容をめぐって議論がある。特に焦点となつているのは大きく蹴り上げた右足の保存状態で、本書の個別解説では、井桁状の台座とそこに渡された横架材の形状に着目し、この姿態を当初の造形として評価している。ただ、こうした造形が、石山寺の造営を主導した良弁やその周辺の信仰と

どのようなつながり、中尊とどのように関連しているのか、さらなる検討が必要であろう。

このほか、石山寺には天平宝字期を遡る金銅仏が計六軀（一〜六）伝来している。これらのうち四軀は本尊の如意輪観音菩薩坐像の胎内仏で、納められている厨子の墨書銘から伝来が知られる。それによると、四軀の金銅仏は、承暦二年正月二日の火災のち、座主権律師覚任（一〇八八〜一一五二）が修復した丈六像の胎内に籠められていたものと判明し、四軀の金銅仏は遅くとも承暦二年頃には石山寺に伝わっていたことになる。その美術史的位置付けについては、藤岡氏による作品解説に尽くされているが、朝鮮三国時代（百濟）、飛鳥時代、奈良時代と、制作地・年代が異なる古代金銅仏が本尊に納入されることになった契機に興味を持たれる。石山寺伝来の金銅仏が、天平宝字五年以前から石山の地に所在した寺院と関係していたことも想像されよう。

## 二 密教修学寺院としてのあゆみと造像

石山寺は、遅くとも平安時代中期（一〇世紀）には、地理的に近い関係にある醍醐寺などの真言系寺院の影響を受けることとなる。寺伝には、醍醐寺開山聖宝（八三二〜九〇九）・初代座主観賢（八五四〜九二五）が、それぞれ石山寺初代・二代座主を務めたといひ、醍醐寺との強い関係性を示唆している。三代座主となった淳祐（八九〇〜九五三）からは、石山寺における具体的な活動が判明する。

淳祐は、菅原淳茂（八七八〜九二六）の子息で道真（八四五〜九〇三）の孫にあたり、悉曇学や両界曼荼羅の諸尊についての研究で知られる学僧である。観賢のもとで学んだが、生来多病のため石山寺に隠棲し、普賢院に住した。このため普賢院と称されるほか、天曆二年（九四八）に内供奉に任じられたことから、淳祐内供、石山内供などとも呼ばれる。淳祐の石山寺における足跡を示す宝物として、「薫聖教」があり、石山寺座主以外には容易に披見が許されない最重要の寺宝として継承されてきた。<sup>(12)</sup>「薫聖教」の呼称は、延喜年間（九〇一〜二三）に師の観賢が高野山にある弘法大師の御廟に参った際、淳祐も随伴して大師の衣に触れ、その薫香が手に移り、淳祐が記した聖教にも染み入った、という説話から来ている。<sup>(13)</sup>薫聖教の中で最も古い奥書は延喜二二年（九二二）のもので、書写地が

記されていないが、この頃から淳祐が石山寺において活動していた可能性がある。石山寺に残る聖教からは、一〇世紀を通して淳祐と弟子筋の僧侶たちが活動したことが知られ、優れた学僧淳祐の入寺によって、石山寺は密教を中心とした修学の寺としての側面を有することとなったのである。

そして、こうした密教化と軌を一にして本尊が如意輪観音、金剛蔵王、執金剛神からなる三尊像として認識されるようになる。この間の経緯については吉川聡氏の論考に詳しいが、<sup>(14)</sup>氏によれば、石山寺の三尊が如意輪観音、金剛蔵王、執金剛神と認識されていた可能性を示す最古の史料は、「石山寺一切経」の「求聞持法」<sup>(15)</sup>（第五函二二八号）の紙背文書「御祈願所卷数」である。これは、応和二年（九六二）に石山寺僧長敦（生没年不詳）が源高明（九一四〜九八三）の息災延命を祈った際の巻数であり、文中に「如意輪真言」「金剛蔵王宝号」「執金剛神宝号」とあることから、一〇世紀中頃にはすでに、三尊が如意輪観音、金剛蔵王、執金剛神と認識されていた可能性が高いという。

ではこの変化はなぜ生じたのか。石山寺初代座主とされる聖宝が、奈良・金峯山に如意輪観音を本尊、多聞天と金剛蔵王を脇侍とする三尊を造立している。また、聖宝の弟子で延長八年（九三〇）より醍醐寺座主を務めた貞崇（八六六〜九四四）は金剛蔵王を金峯山の主尊として位置付けている。一〇世紀の石山寺においては醍醐寺の影響力が強いことからすれば、聖宝、貞崇ら醍醐寺系の祖師による情報が石山寺まで及んでいた可能性は高い。また、『扶桑略記』天慶四年（九四二）三月条に引用される『道賢上人冥途記』で、金剛蔵王が太政威徳天となった菅原道真と関わる尊格として語られるなど、天神と金剛蔵王は密接なつながりを有していたことが知られるが、前述の通り淳祐は道真の孫であった。こうした要因を背景に、石山寺の三尊への認識が変化していったと吉川氏は指摘している。<sup>(16)</sup>

つまり、平安時代中期の石山寺には、醍醐寺系の真言密教の影響が強いと考えられ、この時期の作例もそれを反映した様相を示している。九世紀後半の毘沙門天立像（九）の造像に、聖宝が関与したとの見方があるほか、<sup>(17)</sup>一〇世紀末から一一世紀初めの如意輪観音坐像（一四）は、淳祐の思想が反映された如意輪観音像に倣って制作された可能性が示されている。<sup>(18)</sup>

このほか、一〇世紀の大日如来坐像（二〇）、旧護摩堂本尊であった不動明王

坐像(一一)のような優れた作域を示す等身大の密教尊の作例が残り、いずれも平安時代以来の伝来が判明するわけではないが、淳祐あるいはその弟子筋の僧侶たちが造像に関わった可能性も想像される。このように一〇世紀までの石山寺では、聖宝、淳祐といった醍醐寺系の祖師たちの関与が想定される作例が一定数残り、密教寺院としての性格を実際の造像からはつきりと窺うことができよう。

ところが、一一世紀に入ると淳祐に連なる法脈の石山寺における活動が文献資料から確認できなくなり、実際の造像にもこうした僧侶たちとの関係を指摘し得る作例が見られなくなる。次節で述べる観音信仰の隆盛とは裏腹に、一一世紀以降の石山寺における密教修学は下火となり、一一世紀には、石山寺を拠点に修学に励む僧侶はほぼ存在しなかったように思われるほどである。石山寺が再び密教修学寺院としての面目を回復するには一二世紀も中頃まで待たなくてはならない。久安四年(一一四八)に念西(生没年不詳)が一切経の収集・書写を発願したほか、一二世紀後半には観祐(一一一〇〜七五頃)、朗澄(一一二二〜一二〇九)、経雅(生没年不詳)らの盛んな聖教書写の様子が校倉聖教の奥書などから知られる。朗澄らの活動時期は一二世紀まで及ぶことから、彼らと石山寺の造像との関わりについては、今後の報告書にて触れることとしたい。

### 三 観音霊場としての発展と造像

石山寺は、真言密教化とほぼ時を同じくして、奈良・長谷寺などと並ぶ観音霊場として都の貴顕の信仰を集めていく。天曆五年(九五二)頃までに執筆されたとされる『大和物語』では、宇多天皇(八六七〜九三二)が石山寺へ再三行幸したことが記されており、一〇世紀前半から皇族の参詣があったことが知られる。また、女流文学者の日記や物語に石山寺参詣への言及が多いことが注目され、長保三年(一〇〇一)頃の『枕草子』に「寺は石山」と記されることはよく知られている。このほか、『蜻蛉日記』天禄元年(九七〇)七月条、『和泉式部日記』長保五年(一〇〇三)条、『更級日記』寛徳二年(一〇四五)条などに石山寺参籠のことが見出される。

一二世紀に入ると石山寺本尊への信仰はますます広まり、『寺門高僧記』卷四・行尊(一〇五五〜一一三五)伝に載る西国三十三所巡礼のうちに石山寺が挙げら

れる。また『寺門高僧記』卷六所収の覚忠(一一一八〜七七)伝の三十三所巡礼記録にも石山寺が収録され、石山寺の観音が貴顕に広く認知されていたことが理解できよう。

以上のように、一〇世紀以降の石山寺は、観音信仰を核にした貴顕の厚い帰依を受けていたことが理解される。この点においてまず取り上げるべきは、一〇世紀末頃の制作にかかり、旧御前立であった如意輪観音坐像(一一二)である。本像は、左足を踏み下げて岩座に坐す点、二臂である点から本尊の模刻と考えられ、一〇世紀以来の石山寺本尊への信仰の隆盛を受けた造像である可能性がある。(一一二)、(二四)という、ほぼ同時期に制作された二臂と六臂の如意輪観音が石山寺に伝来していることは、密教修学の寺院であるとともに、観音信仰の寺院でもあった石山寺の性格を如実に映し出しているといえよう。

続いて注目されるのは、もと三十八所権現社に安置され、現在は本堂に移安されている獅子・狛犬(一九)である。三十八所権現は、近津尾、龍蔵とならぶ石山寺の鎮守であり、史料上ではいずれも一二世紀には存在していたことが確かめられる。本像は、承暦火災後における三十八所権現社の建立あるいは再建に合わせ、一二世紀前半に制作された可能性がある。三十八所とは、金峯山の尊格の一つであり、藤原道長(九六六〜一〇二八)が寛弘四年(一〇〇七)に金峯山に登った際、山上で三十八所に参詣している。三十八所権現は、金剛蔵王を脇侍とする石山寺本尊に相応しい鎮守社であり、承暦火災後に、石山寺本尊への信仰に基づき、貴顕の寄進などによつて社殿の建立(もしくは再建)と獅子・狛犬の造立が行われたことが想定される。なお、伝来は不明ながら、二天立像(一七)についても、承暦火災後の復興に合わせた造立と考える余地がある。

以上、石山寺の草創から平安時代までの歴史と彫塑について述べてきた。東大寺や保良宮と関わる官寺として出発し、平安時代からは密教修学と観音信仰という複数の側面を以て展開した寺史が、彫塑にも反映されていることが理解される。伝来が未詳なため寺史との関係で位置付けることが難しい作例も多く、課題は尽きないが、本報告書の刊行が今後の研究に資するところがあれば幸いである。

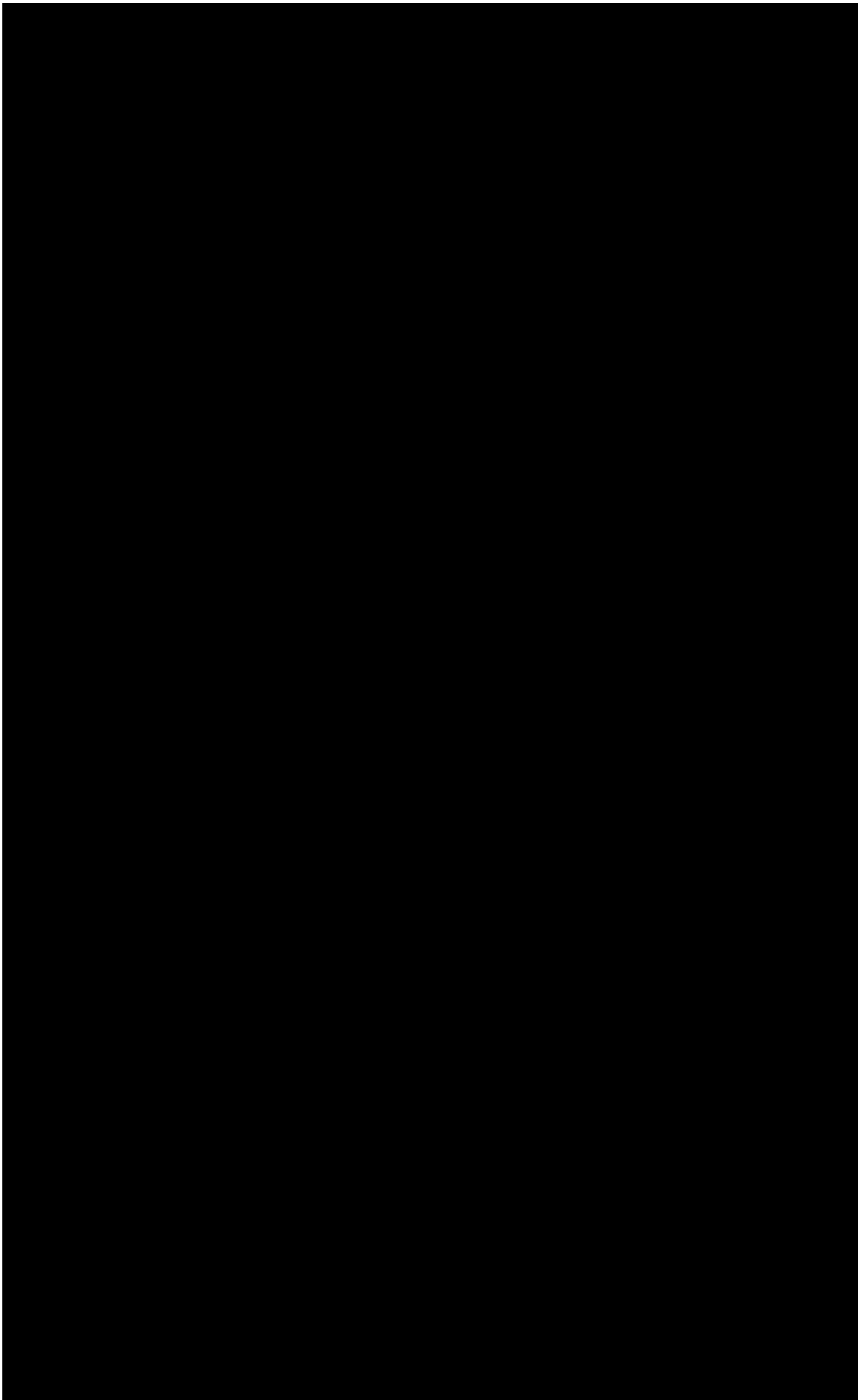
- (1) 石山寺文化財総合調査団編『石山寺古経聚英』(法蔵館、一九八五)、同『図像抄―石山寺所蔵十巻抄』(法蔵館、一九八八)、同『石山寺の研究』全四冊(法蔵館、一九七八、九二)、同『石山寺資料叢書』既刊全一冊(法蔵館、一九九六)。
- (2) 天平宝字期の石山寺増改築については、豊富な先行研究の蓄積があるが、ここでは福山敏男「奈良時代に於ける石山寺の造営」(同『日本建築史の研究』桑名文星堂、一九四三)、同『日本建築史の研究』(綜芸社、一九八〇年)再録)によって造営過程を整理する。
- (3) 高梨純次「湖南市・善水寺金銅誕生釈迦仏立像について」(同『近江の古像』思文閣出版、二〇一四)では、善水寺誕生釈迦仏立像が、東大寺鋳物所において造像された石山寺所用の太子像である可能性を指摘している。また、井上一稔「近江の天平彫刻について」(財団法人滋賀県文化財保護協会『大仏はなぜ紫香楽で造られたのか―聖武天皇とその時代―』サンライズ出版、二〇〇五)では、石山寺所用の太子像の影響が善水寺像にも及んでいたとする。
- (4) 山下有美氏は、良弁が石山寺に滞在したことが確認できる天平宝字六年二月頃より、「石山院」という発行主体が文書に含まれ始め、中には「造東大寺石山院所」とも表現されることを取り上げ、良弁が保良宮との結びつきを背景に、石山寺を一山寺から「東大寺の一院である石山院」へと格上げしたと指摘する。山下有美「石山寺造営機構の性格と展開」(『正倉院文書研究』一六、二〇一九)。
- (5) 大津市教育委員会編『大津市埋蔵文化財調査報告書三三 石山国分遺跡発掘調査報告書 大津市南消防署・晴嵐保育園建設に伴う』(二〇〇二)、同『大津市埋蔵文化財調査報告書六九 石山国分遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(二〇一三)。
- (6) 心木は、平成一四年(二〇〇二)修理時に像内部より発見されたものである。
- (7) 塑造断片については、大津市教育委員会編『大津市埋蔵文化財調査報告書三九 石山寺境内遺跡発掘調査報告書』(二〇〇六)ですでに報告されているため、本書には収録せず、本稿で概要を述べるにとどめる。
- (8) 『扶桑略記』は本尊が焼け尽くしたと記すのに対し、『百練抄』は尊顔は損なわれなかったとする。
- (9) 文政京都地震による損傷を修理したものである。大津市歴史博物館・総合地球環境学研究所編『湖都大津の災害史』(二〇一三)参照。
- (10) 前掲注7、大津市歴史博物館編『石山寺―密教と観音の聖地―』(二〇一四)。
- (11) 寺島典人「西大寺叡尊による石山寺塑像本尊の修復について」(前掲注10大津市歴史博物館

- 館編書所収)において極楽寺塑像断片が紹介されている。
- (12) 昭和三六年(一九六一)国宝指定の六〇巻二帖・附聖教目録一卷、平成一四年追加指定の一三巻に加え、令和七年(二〇二五)に一〇巻が追加指定されたことは記憶に新しい。
- (13) 「薫聖教」縁起の流布については、徳竹由明「石山寺「薫聖教」縁起説の系譜―仏書・『平家物語』から物語草紙類へ―」(徳田和夫編『中世の寺社縁起と参詣』、竹林舎、二〇一三)を参照。
- (14) 築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』(汲古書院、一九九六)、柘植健生「ヲコト点と石山寺の法脈」(前掲注10大津市歴史博物館編書所収)。
- (15) 三尊の尊名変更の経緯については吉川聡「執金剛神から蔵王権現へ―天神信仰に及ぶ―」(采原永遠男・佐藤信・吉川真司編『東大寺の美術と考古』法蔵館、二〇一六)に詳しい。本稿での以下の記述も吉川論文に多くを負う。
- (16) 尊名変更と関わってよく取り上げられるのが、本尊の印相の変化や、金剛蔵王心木の右足を蹴り上げる体勢が制作当初からのものなのか否か、といった問題である。前者については井上一稔「奈良時代の「如意輪」観音信仰とその造像―石山寺像を中心に―」(『美術研究』三五三、一九九二)、同「奈良・平安彫刻の文化史的研究」(法蔵館、二〇一五)再録)があり、後者については金剛蔵王立像心木(六)の「考察」に現時点での見解を記した。
- (17) 近藤謙「石山寺兜跋毘沙門天像に関する一試論」(『仏教大学大学院紀要』三二、二〇〇四)。なお、王珏人「石山寺兜跋毘沙門天像について」(『仏教芸術』一一、二〇一三)では、聖宝の関与に慎重な見解が示されており、毘沙門天立像の造像契機については今後も検討が必要である。
- (18) 井上一稔「新出・石山寺木造如意輪観音坐像をめぐって」(『博物館学年報』三五、二〇〇三)、同「奈良・平安彫刻の文化史的研究」(法蔵館、二〇一五)再録)。

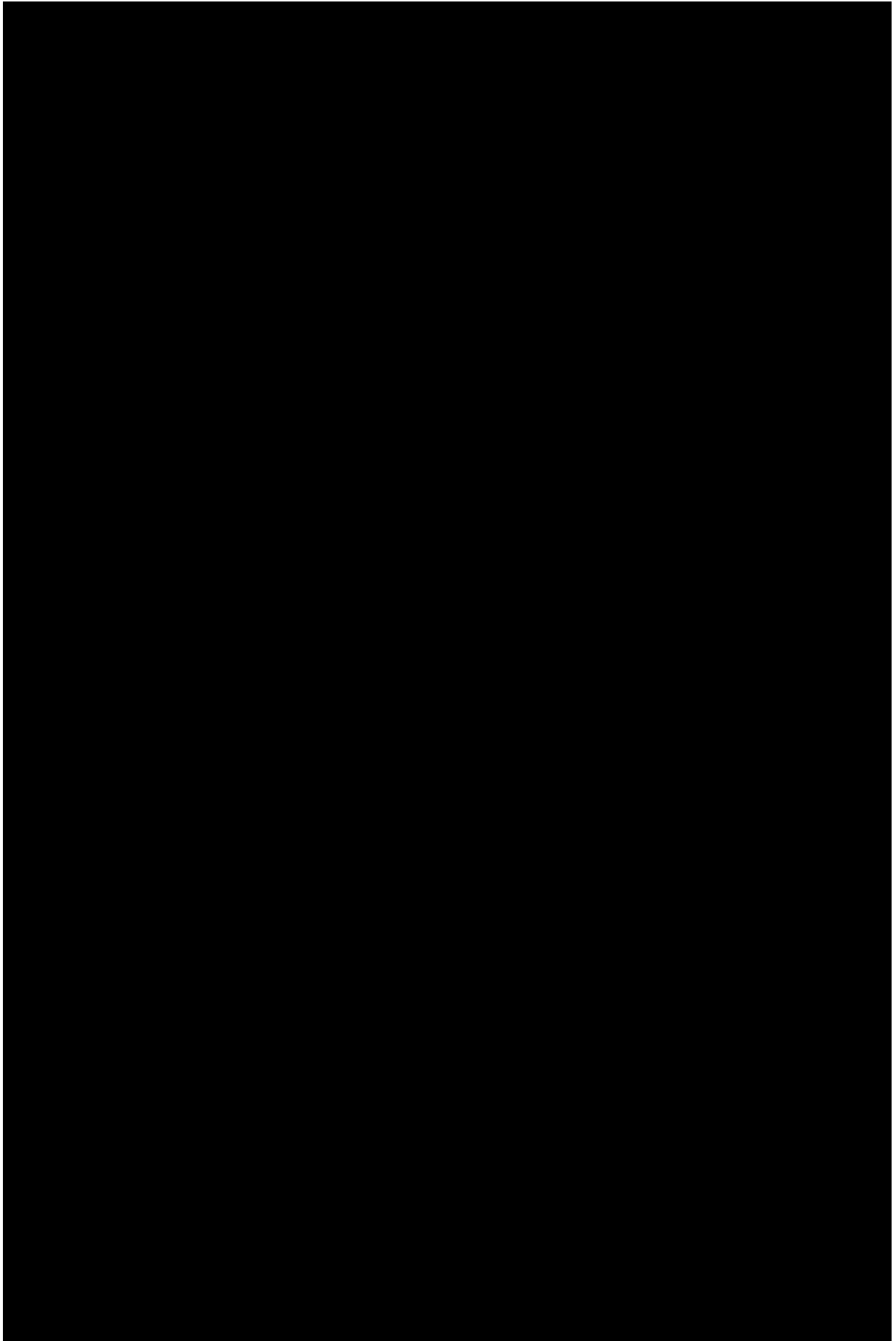
【附記】 本稿は前掲注10大津市歴史博物館編書をもとに加筆修正した部分がある。

(柘植)

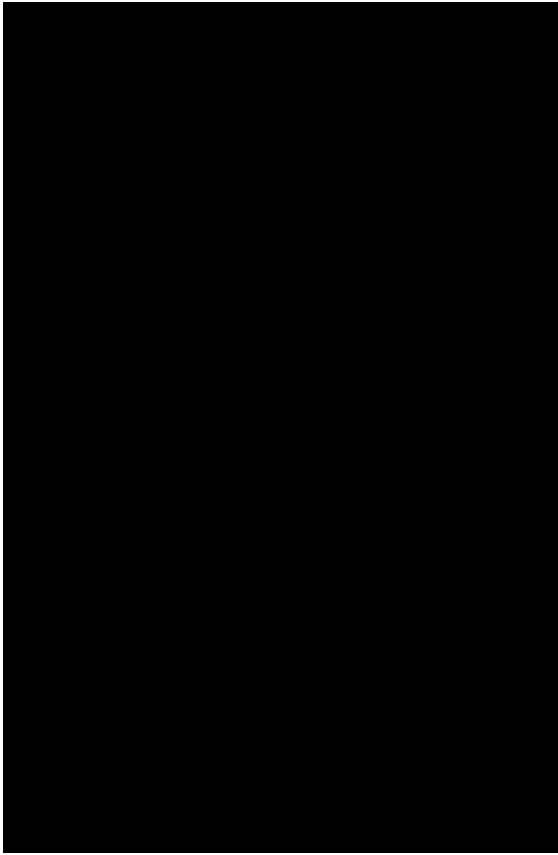
一 ◎如来立像（石山寺本尊像内納入品のうち）（図版） 本堂安置



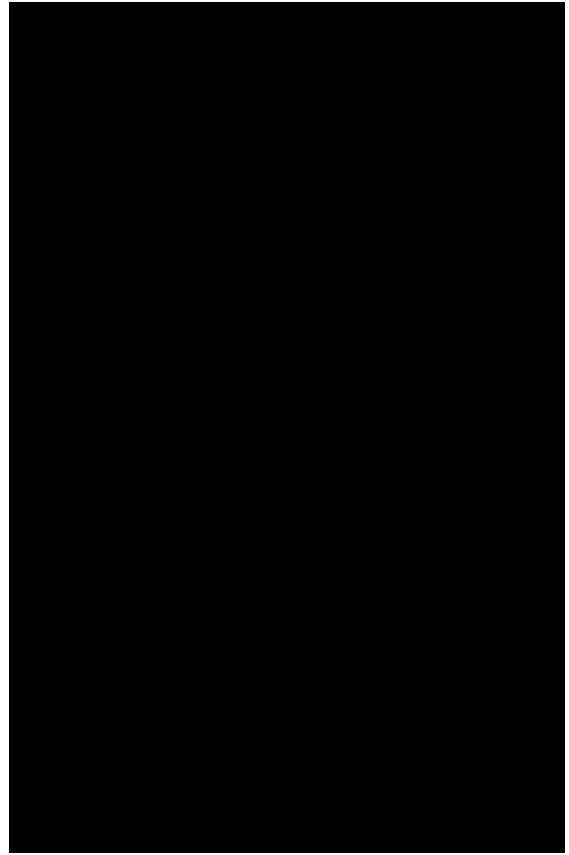
全身正面



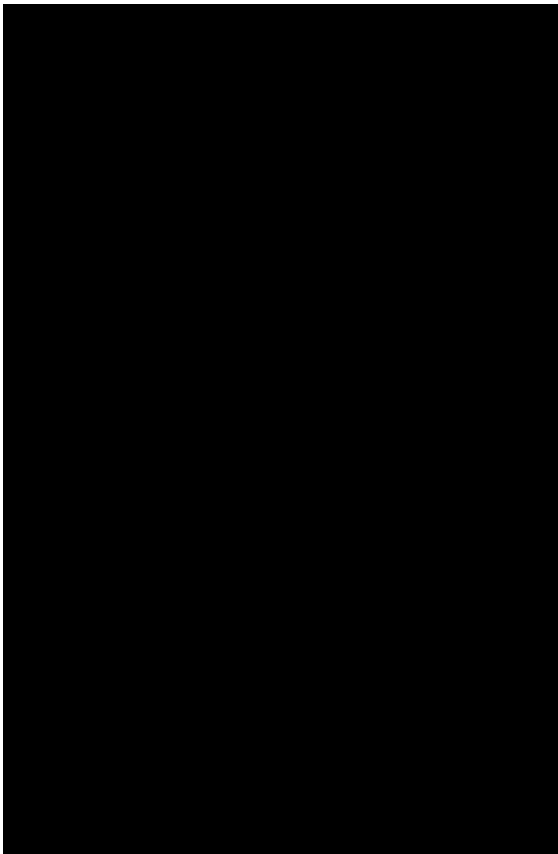
頭部正面



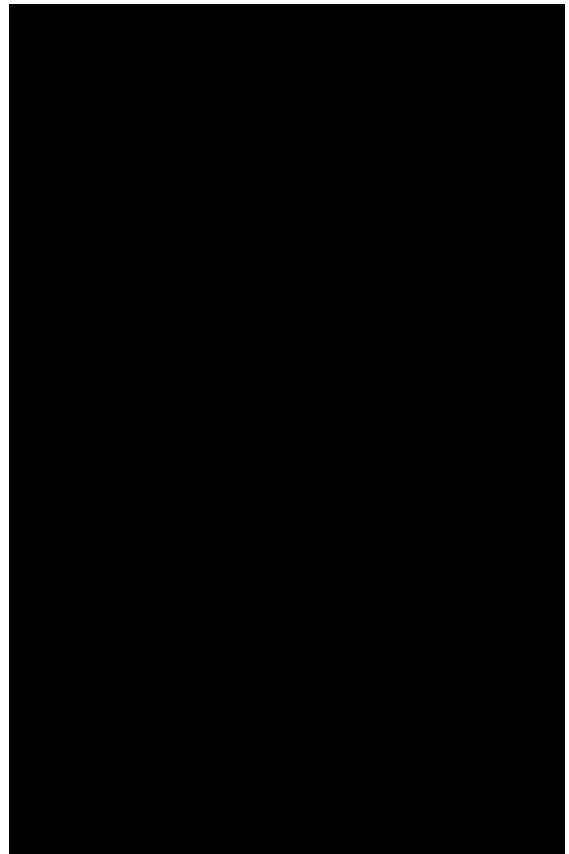
全身右側面



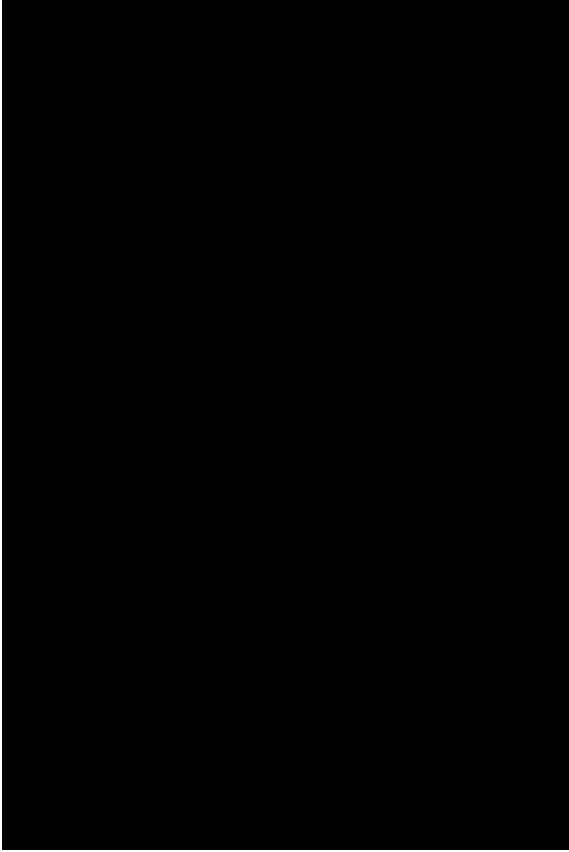
全身左側面



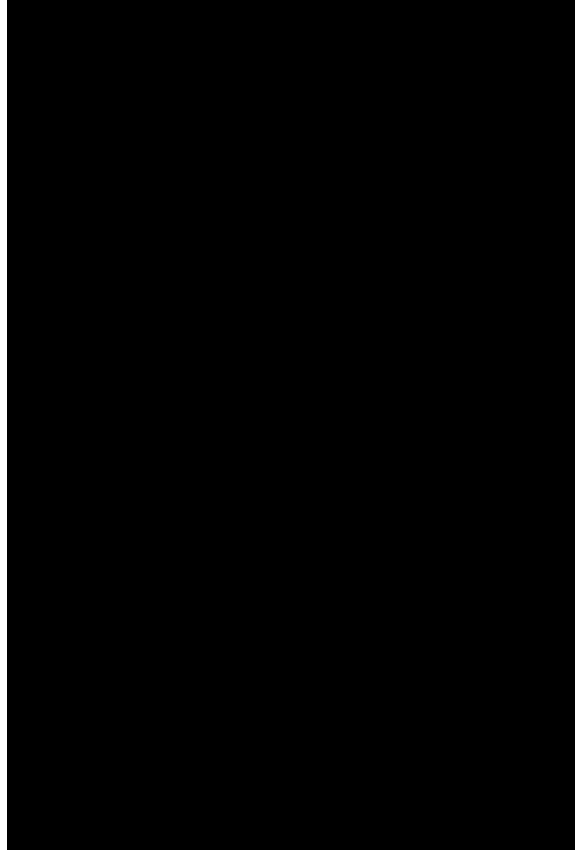
全身背面



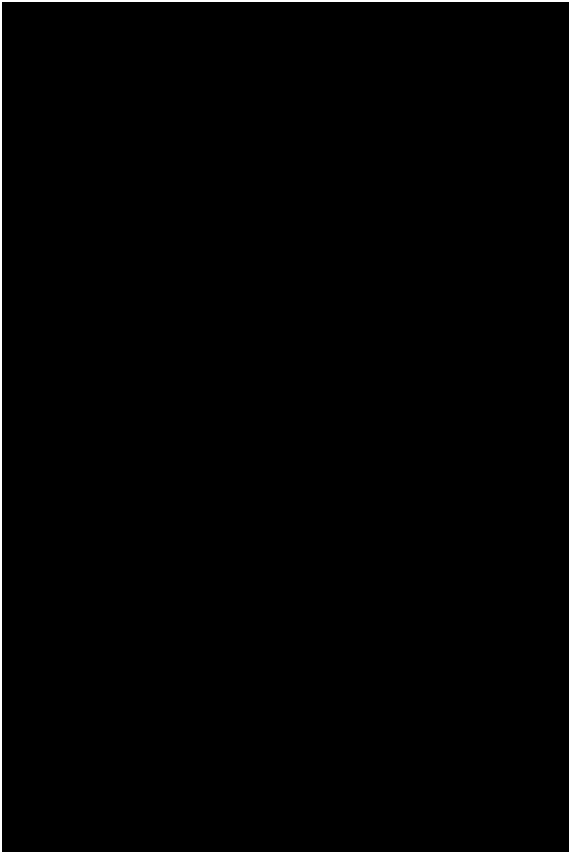
全身左斜め



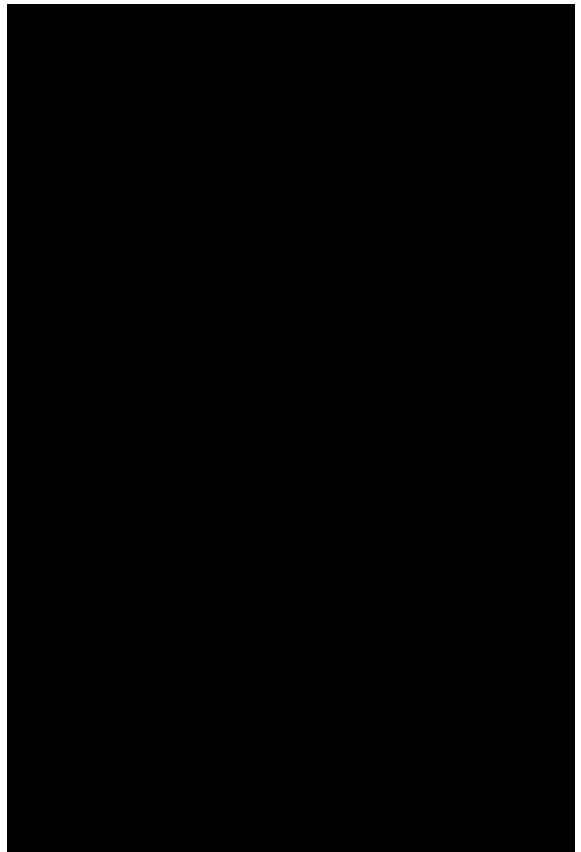
頭部右側面



頭部左側面



頭部右斜め



頭部左斜め

一 ◎如来立像（石山寺本尊像内納入品のうち）（解説）

銅造 鍍金 一軀

〔法量〕

像高	二六・二	髮際高	二四・一	頂—顎	五・〇
面長	二・九	面幅	三・〇	耳張	三・五
面奥	三・九	胸奥(左)	四・〇	胸奥(右)	三・九
腹奥	五・一	肘張	八・〇	袖張	一〇・〇
裙裾張	一〇・一	足先開(内)	二・九	足先開(外)	六・〇

〔形状〕

螺髪を賽の目状に表す。白毫相は表さない。耳朵は平板で不貫。眼は杏仁形で、口角を上げて古拙の笑みを浮かべる。三道を陰刻で表す。左肩から右腹部にかけて上縁をみせる內衣を着け、胸前を広く開けて通肩に大衣を着ける。大衣、裙の裾を左右に張り出す。右手は屈臂して施無畏印を結び、左手は屈臂し、第一指を屈して与願印を結ぶ。頭部を僅かに俯け、両足先を僅かに開いて直立する。現状、両足裏に柄を設けない。

〔品質構造〕

青銅製、鍍金。

頭頂より両足裏までを一鑄とする。頭頂部、後頭部が破裂し、頭を鉤形に曲げた鉄心が見え、裙裾中央にも鉄心の先端が見える。鉄心は首後方を通るとみられることから（磁石反応あり）、頭頂から首後方にいたり、くの字に曲がって裙裾中央に達すると想定される。また、鉄心は中型と外型を固定するものではなく、中型土を保持する支柱の役割を果たしたと考えられる。

重量は三・三二七kgを計り、像高、像容に比して重く（青銅の比重は八・七〜九g/cm<sup>3</sup>）、また頭頂部で見る限り鉄心の周囲の空隙は小さく、中型が小さかったと考えられる。なお、破裂した頭頂部を観察すると、螺髪を刻む表面が皮膜状となり（一・三mm厚程度）、その内側には中型土ではなく銅塊が見え、その内側に空

隙があつて鉄心がある。こうした様相から、頭部については鑄型（外型）に皮膜状に湯が流れた後、内部に湯が十分に廻らなかつたという状況が想定できる。

中型は小さいと考えられるものの、両手は共鑄とみられ、螺髪も鑄造後に鑿で刻んだのではなく、原型段階で表したものとみられることなどから、蠟型による鑄造と推定される。中型と外型の固定方法については、像底中央に鑄懸けがあり、もとは像底をハバキとしていた可能性がある。また、背面大衣下縁の左右に長方形の型持（ないし型持痕を埋めた嵌金）、背面上部の中央にも型持痕を埋めたとみられる嵌金（縦三・〇×横二・五cm）があり、これらが有用であつたと考えられる。

なお、両足裏には鬆が多く、足先を鑄懸けていると思われる。また、裙裾左右端の前面にも嵌金があるが、型持痕を埋めたものではなく、湯回り不足の鑄造欠陥を補つたものと思われる。さらに、両手先の欠損が目立つ点も注意される。こうした点を踏まえると、本像の鑄込みは仰向けの状態で頭部を下に傾けて行い、両足先、裙裾両端、両手などに湯口を設けたと想定できる。

蛍光X線分析の結果、定量値については、金が検出されない地金の平均値で銅九四・〇%、錫四・七%、鉛〇・二%、鉄〇・八%、マンガン〇・一%、亜鉛〇・一%であつた。錫の含有量が5%に迫り、鉛がほとんど検出されないことから朝鮮三国時代の制作である可能性が高いと考えられる。なお、金が検出されない部分でも、特に背面上部の嵌金とみられる部分の平均値は銅九七・三%、錫一・九%、鉛〇・一%、砒素〇・三%、鉄〇・二%、亜鉛〇・二%であつた。錫の含有量が減るとともに、ここでのみ砒素が僅かに検出されることが注目される。② 砒素は朝鮮半島の金銅仏の作例では検出される例が少ないことを踏まえると、砒素が含有されているとすれば、この嵌金は日本で補われた可能性も考えられる。

金が検出された部分のうち、裙裾前面左右端の嵌金については、ここでも錫が少なく（一・二%）、純銅に近いことが伺える。ただし、砒素は検出されておらず、背面上部の嵌金とは組成に違いがある。また、純銅に近いために融点が高く、火中の影響が少ないことが看取される。一方、背面大衣下縁左右の嵌金は、錫四・二%のほか、鉛、鉄、マンガン、亜鉛も微量に検出されており、本体地金、あるいは本体鍍金部の組成に近いことが伺える。だとすれば、これは嵌金というよりむしろ青銅製の型持であつた可能性が考えられるだろう。なお、金が検出された箇所でも水銀は検出されず、水銀アマルガムによる鍍金であることは証されない。③ た

だし、朝鮮三国時代の作例では、鍍金が残っている場合には金の含有量が四〇％程度の値となるのが一般的であるのに対して、本像では一〇％以下であり、火中による影響が大きいことが伺える。だとすればアマルガム鍍金であったものの、火中により水銀が失われた可能性が高いと思われる。

金が検出されていない箇所について改めて検討すると、錫の含有量に多寡のあることがわかる。計測誤差の可能性もあるが、火中して表面がただれた現状では判別できないものの、鬆などの鑄造欠陥を補うための嵌金が各所にあり、錫が少ない箇所についてはそうした嵌金のある部位と仮想することができるかも知れないが、それを証することは難しい。

(1) 定性値(スペクトル)では金が僅かに検出される。

(2) As(砒素)の $K\alpha$ 線(一〇・五三〇keV)とPb(鉛)の $L\alpha$ 線(一〇・五五〇keV)のエネルギー位置が極めて近いため、両元素の含有はAsの $K\beta$ 線(一一・七二三keV)とPbの $L\beta$ 線(一二・六一二keV)で判断するが、Asの $K\alpha$ 線の位置にAuの $\beta$ 線(一一・四四〇keV)が重なるため、本像の定性分析においては、Asの含有は判別ができない。また、Pbの $L\beta$ 線は計測されているが、微量であるため、Asの $K\beta$ 線の有無はやはり判別できない。

(3) Au(金)は $L\alpha$ 線、 $L\beta$ 線ともにエネルギー位置が比較的近く、定性値でもHg(水銀)の含有は明確には確かめられない。

〔伝来〕

平成一四年(二〇〇二)八月一日、石山寺本尊如意輪観音菩薩坐像の勅封の宮殿開扉にあたり実施された奈良国立博物館の調査において、像背面上部の蓋板内部に納められた木製厨子に安置された状態で発見された。

木製厨子(ヒノキ材製、総高四八・八cm)には、本像を含む四軀の金銅仏と水晶製五輪塔が安置されていた。厨子の蓋表、身背面には次の墨書がある。

【厨子蓋表墨書】

金銅像四軀 仏舍利三粒東寺

抑此四軀像者所奉籠古

像之腹内也。就中一軀已

令遇火難。若是往昔之靈

像歟。又奉納佛舍利事粗見舊記。仍所新籠也。

(書き下し)

金銅像四軀、仏舍利三粒東寺より。

抑もこの四軀の像は古像の腹内に籠め奉る所なり。就中一軀は已に火難に遇ふ。かくの如くんば往昔の靈像か。又仏舍利を納め奉る事は粗旧記に見ゆ。仍て新たに籠める所なり。

【厨子身背面墨書】

去建曆元年五月四日巳時、御躰崩裂。

是承曆二年孟陬二日炎上之後、座主權律師所被修復之丈六捏像也。

其後送卅五廻之居諸。今年三月二日、奉請

此像嚴飭修復。今日緯畢所奉安置也。依

茲一寺盛、人法佛法遂繼星宿焉。四海

穩、皇家臣家宜比日月矣。

寛元三年歳次乙巳五月廿一日座主法印權大僧都實位記也

(書き下し)

去んぬる建曆元年五月四日巳の時、御躰崩れ裂く。

是れ承曆二年孟陬二日炎上の後、座主權律師修復せらる所の丈六捏像也。

其の後三十五廻り居諸を送り、今年三月二日、此の像の嚴飭修復を請け奉る。

今日緯畢りて安置し奉る所也。茲に依り一寺盛り、人法佛法遂に星宿を繼ぐ。

四海穩やかにして、皇家臣家宜しく日月を比ぶべし。

寛元三年歳は乙巳に次の五月二十一日座主法印權大僧都実位記す也。

蓋表の墨書によれば、厨子内に納められた四軀の仏像は、「古像」の像内に奉籠されたもので、そのうち一体は火中していたというが、それが本像にあたると思われる。わざわざ火中した像を納めているからには往昔の靈像であろうかと記しているのは興味深い。また、水晶製五輪塔に籠めた仏舍利については、旧記に見えるために新たに東寺より頂戴してあらためて納めたとある。

一方、身背面の墨書は、本尊像について次のような経緯を述べる。本尊は建暦元年（一一二一）五月四日に崩れ裂けてしまった。この像は、承暦二年（一一〇七八）正月二日に火災に遭い、座主権律師が修復した丈六塑像である。崩れ裂けてから三五年を経て、寛元三年（一二四五）三月二日に座主法印権大僧都実位によって修復・莊嚴の作業が開始され、本日、五月二一日によく完成し安置することができた。これによって寺は盛んとなり、寺僧も仏教も年を重ねることができ、四海すなわち天下は穏やかとなり、皇族も人々も毎日を送ることができるとの願いが謳われている。

現在の本尊は、従来、承暦二年の落雷による火災後、永長元年（一一〇九六）の本堂再建時に再興されたものと考えられてきた。しかし、これを字義通りに解釈すると、鎌倉時代前期にもなお奈良時代の創建以来の塑像の本尊が安置されていたと考えざるを得ない。しかし、あえて「丈六捏像」を強調して当初像の靈異の継承を謳っているとの解釈も可能と思われる。承暦二年の火災について、『扶桑略記』は「正月二日丁丑、午刻、近江石山寺焼亡。如意輪観音像已為煨燼了」と、本尊が灰燼に帰したと記すのに対して、『百練抄』には「正月二日、石山寺焼亡。観音尊顔不損、貴賤成随喜」とあり、被害は大きくなかったともとれる。また、蓋表の墨書にみえる「古像」の意味するところも問題となる。「古像」は単に奈良時代以来のという意味なのか、あるいは別に「新像」があることを含意しているのか、両様の解釈が成り立つだろう。無論、現存する木彫の本尊像との関係についても検討を要するところである。

このように、これらの墨書の内容は、本尊像については大きな課題が残るが、厨子に安置される金銅仏については、永長元年の本堂再興供養時には本尊像に奉籠されていたことを示唆すると考えられる。ただし、奉籠が奈良時代の創建期まで溯るのか否かは不明である。

平成一五年五月国追加指定。

#### 〔保存状態〕

火中によって、頭部に破裂がみられるなど大きなダメージがあり、背面から右側面にかけて高熱を受けて煮え立ったかのように表面が荒れる。背面下部が歪んでふくらみ、両手指先も欠損している。

#### 〔時代〕

朝鮮三国時代・百濟（六世紀）

#### 〔考察〕

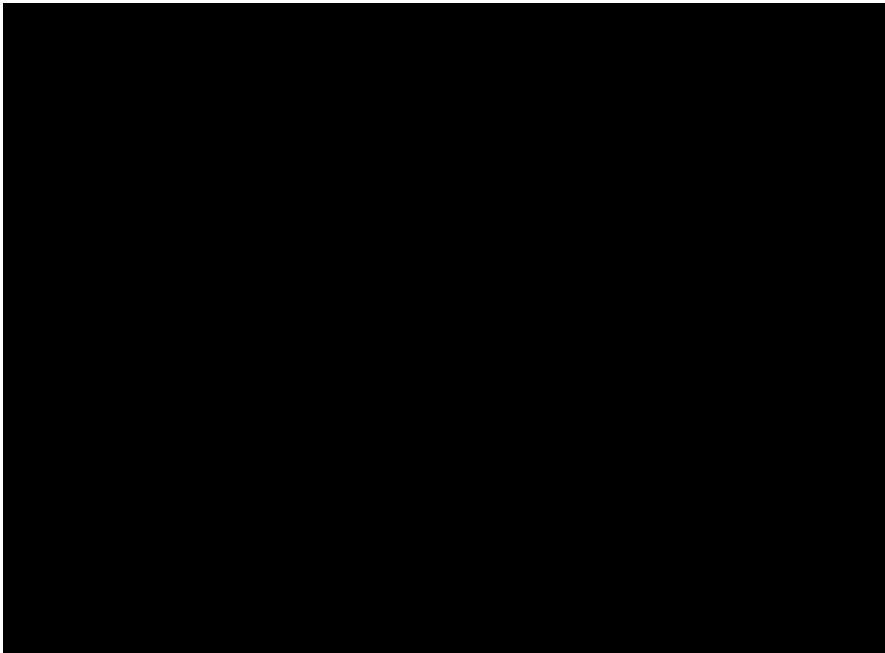
本像の面貌については、特に頬が秀で、鼻筋が通り、顎が尖る顔立ち、上下の眼瞼がふくらみ、眼球のふくらみに鎬を立てる表現が長野・観松院菩薩半跏像に近いことが注目される。

着衣については、胸前を広くあける通肩の着衣で、內衣の上縁がのぞく点が特徴的である。中国では南北朝時代の梁や北魏後期、東・西魏の作例（梁・大同一年〈五四五〉銘釈迦・多宝並坐像〈四川・成都市西安路出土四号像〉、東魏・天平四年〈五三七〉銘仏三尊像〈プリンストン大学美術館蔵〉など）、朝鮮半島では三国時代の作例（金銅仏立像〈江原道横城出土、韓国国立中央博物館蔵〉など）にみられるものである。日本でも飛鳥時代の作例（法隆寺献納宝物一五〇号仏立像など）に類例があるが、面貌表現、上述した金属組成も勘案すると、朝鮮三国時代、とりわけ百濟で制作された可能性が高いと考えられる。

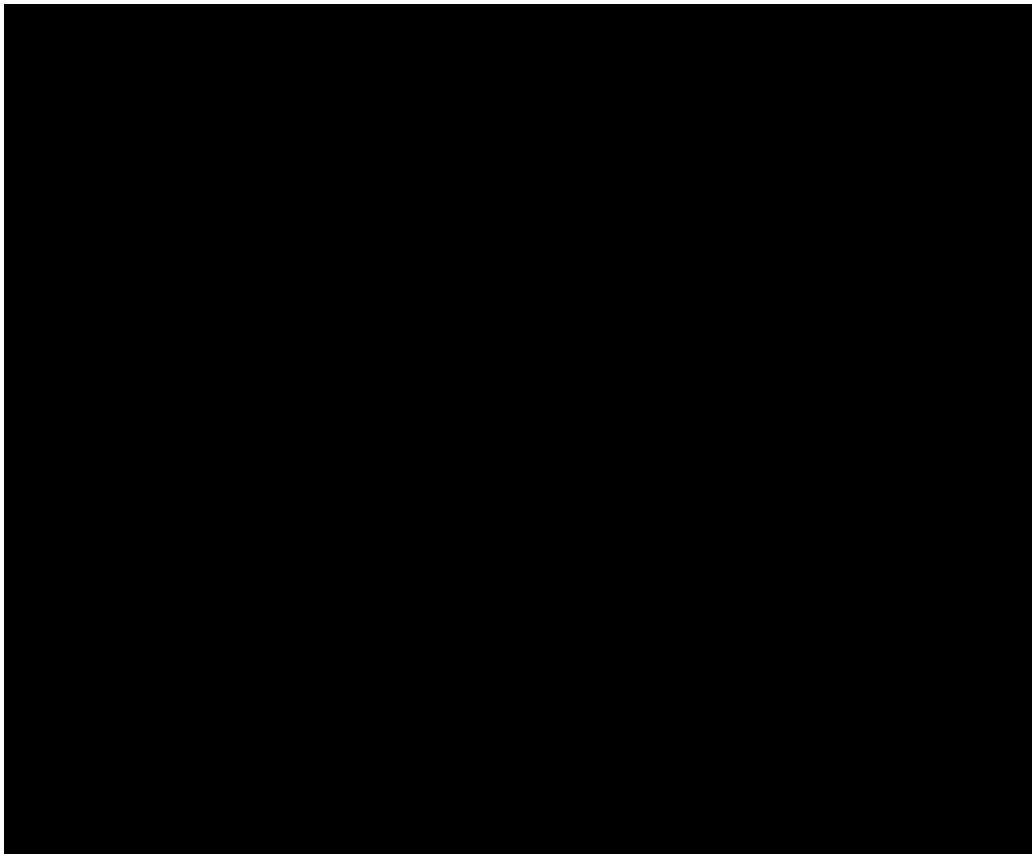
なお、本像と最も着衣が類似するのは、奈良国立博物館蔵の金銅仏立像である。內衣の上縁が左肩から右腹部に急角度で表される点、大衣の脚前の衣文が左腹部から片流れに表される点、左膝前の品字状の襷、裾裾の足首前の折りたたみや左右への張り出し方、背面では大衣の左肩にかかる末端や裾を段差で表すだけで、他には襷を表さない点など、両像の着衣表現は酷似している。しかも、両像は像高もほぼ同じで（奈良国立博物館像は像高二六・〇cm）、地金の組成も近い。奈良国立博物館像は、実は多くの計測箇所が鉛が多く検出されているが、恐らく近代における修補に関わるものとみられる。一方、本来の地金の組成とみられる箇所では、銅九二・四％、錫五・〇％、鉛一・二％、砒素〇・二％、鉄〇・六％、マンガン〇・一％、アンチモン〇・一％、亜鉛〇・二％、銀〇・三％の平均値が得られ、砒素やアンチモンが微量に検出される点は相違するものの、銅・錫・鉛の組成は本像にかなり近い。本像は現状足柄がなく、足柄を削り取った痕跡も明瞭には認められないため、台座への固定方法が不明である。一方、奈良国立博物館像は左足の足柄がなく、右足には柄があるものの、鉛が多く含まれ、必ずしも当初のも

のとは言えない。また、像底を塞いでいる点、背面中央に型持を設けた可能性がある点など、技法についても通じる点が多い。顔立ちについては、奈良国立博物館の方が丸みを帯び、表情も穏やかで、かなり相違しているものの、両像の制作環境はきわめて近いと考えるべきであろう。

(藤岡・中田)

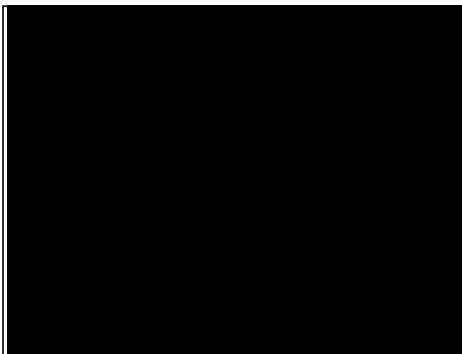
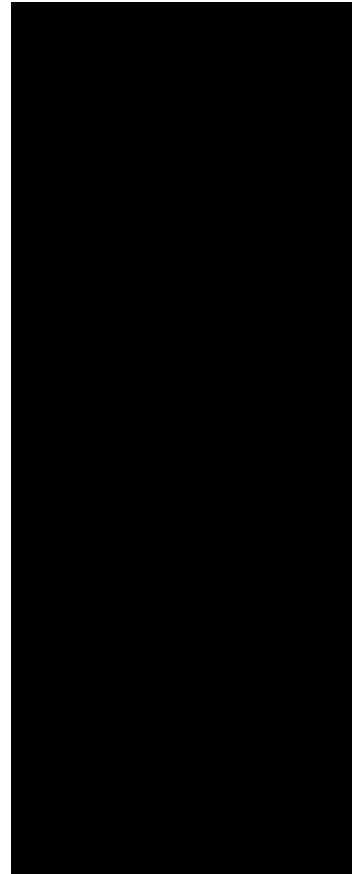
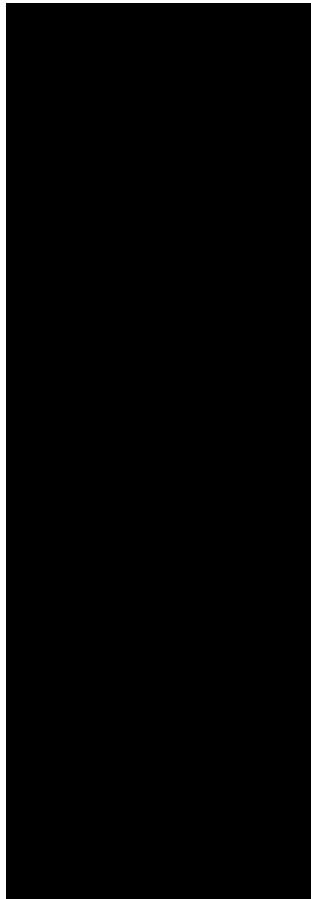
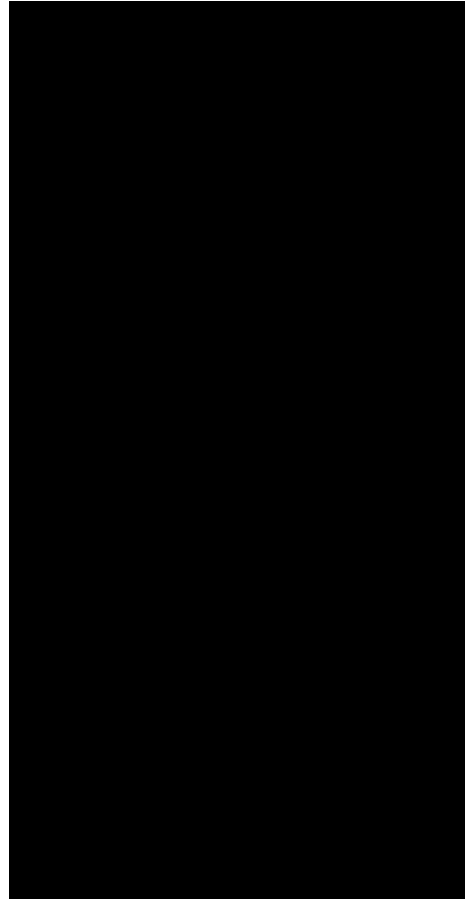
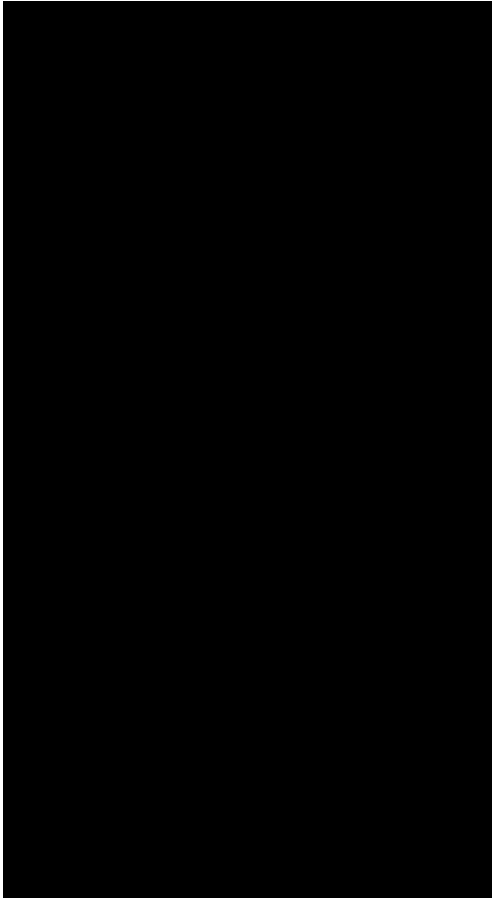


像底



頭頂より

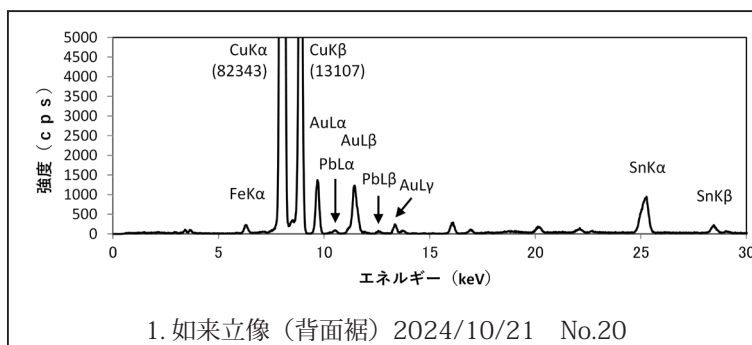
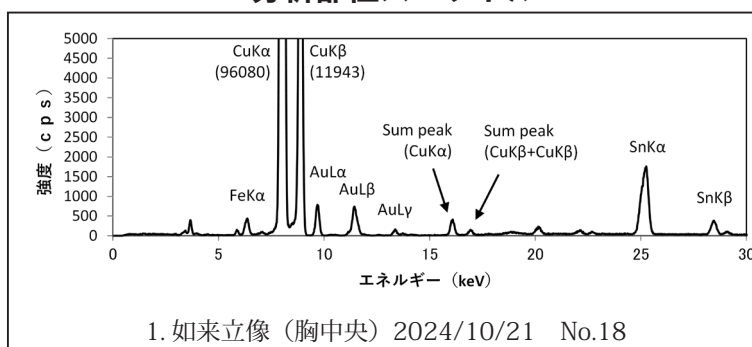
成分分析位置



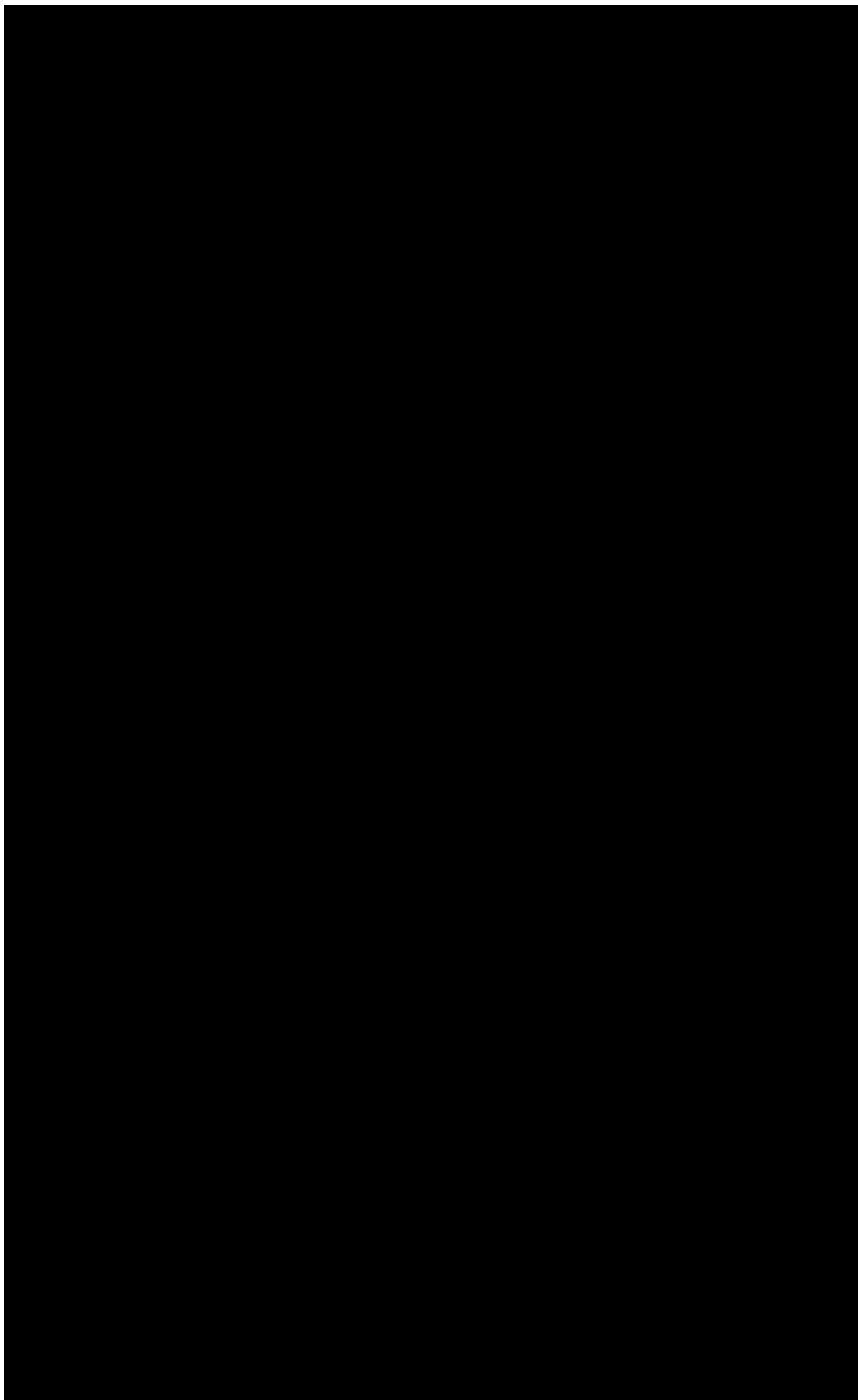
## 成分分析結果

測定日	No.	測定部位	Au	Hg	Cu	Sn	Pb	As	Fe	Mn	Sb	Zn	Ag	Ni
2014/7/11	34	內衣下方	0.00	0.00	93.07	6.10	0.08	0.00	0.34	0.16	0.00	0.27	0.00	0.00
2014/7/11	35	左体側下方	0.00	0.00	92.77	6.70	0.13	0.00	0.18	0.04	0.00	0.20	0.00	0.00
2014/7/11	37	右足裏先	0.00	0.00	95.13	4.48	0.07	0.00	0.11	0.02	0.00	0.17	0.00	0.01
2014/7/11	41	背面上部やや右寄り	0.00	0.00	95.83	3.58	0.10	0.00	0.30	0.04	0.00	0.16	0.00	0.00
2014/7/11	42	背面上部右寄り	0.00	0.00	96.23	3.26	0.10	0.00	0.22	0.04	0.00	0.15	0.00	0.00
2014/7/11	43	背面上部左方	0.00	0.00	96.34	3.09	0.17	0.00	0.21	0.04	0.00	0.12	0.00	0.02
2014/7/11	44	背面下方	0.00	0.00	94.35	5.00	0.13	0.00	0.31	0.03	0.00	0.18	0.00	0.00
2024/10/21	4	左足裏前方	0.00	0.00	93.29	4.50	0.88	0.00	1.23	0.10	0.00	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	5	左足裏前方	0.00	0.00	94.23	5.43	0.06	0.00	0.24	0.05	0.00	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	8	肉髻頂部	0.00	0.00	93.72	6.14	0.15	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	10	肉髻頂部	0.00	0.00	92.88	3.88	0.24	0.00	2.38	0.62	0.00	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	11	肉髻左方	0.00	0.00	92.83	4.47	0.37	0.00	2.00	0.33	0.00	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	12	肉髻右方	0.00	0.00	92.62	3.33	0.28	0.00	3.46	0.31	0.00	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	13	地髪右方	0.00	0.00	93.66	3.12	0.50	0.00	2.39	0.33	0.00	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	14	左掌	0.00	0.00	94.88	3.52	0.25	0.00	1.19	0.17	0.00	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	18	胸中央	0.00	0.00	93.21	6.07	0.07	0.00	0.31	0.15	0.00	0.20	0.00	0.00
2024/10/21	21	背面下方	0.00	0.00	93.02	6.51	0.18	0.00	0.16	0.02	0.00	0.12	0.00	0.00
2024/10/21	24	左体側 (大衣末端)	0.00	0.00	92.71	6.87	0.06	0.00	0.18	0.04	0.00	0.12	0.00	0.02
2024/10/21	25	左頬	0.00	0.00	95.79	2.88	0.29	0.00	0.61	0.18	0.00	0.14	0.00	0.00
【Average】 本体			0.0	0.0	94.0	4.7	0.2	0.0	0.8	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0
2014/7/11	40	背面上部 (嵌金)	0.00	0.00	97.26	1.95	0.07	0.30	0.22	0.04	0.00	0.16	0.00	0.00
2024/10/21	19	背面上部 (嵌金)	0.00	0.00	96.95	2.12	0.08	0.37	0.22	0.05	0.00	0.20	0.00	0.02
2024/10/21	23	背面上部 (嵌金)	0.00	0.00	97.58	1.65	0.06	0.33	0.21	0.03	0.00	0.14	0.00	0.00
【Average】 型持			0.0	0.0	97.3	1.9	0.1	0.3	0.2	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0
2014/7/11	38	裾底面右前方 (嵌金)	8.30	0.00	89.83	1.47	0.04	0.00	0.08	0.02	0.00	0.24	0.00	0.03
2014/7/11	39	裾裾左端 (嵌金)	9.82	0.00	88.48	1.14	0.05	0.00	0.17	0.05	0.00	0.27	0.00	0.03
2024/10/21	15	裾裾左端 (嵌金)	10.32	0.00	88.41	1.04	0.00	0.00	0.18	0.04	0.00	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	16	裾裾右端 (嵌金)	9.24	0.00	89.11	1.10	0.00	0.00	0.14	0.04	0.00	0.33	0.00	0.04
【Average】 Au 検出部 1			9.4	0.0	89.0	1.2	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0
2024/10/21	20	背面大衣下縁左方 (嵌金)	6.63	0.00	89.16	3.67	0.27	0.00	0.09	0.00	0.00	0.18	0.00	0.00
2024/10/21	22	背面大衣下縁右方 (嵌金)	5.38	0.00	89.64	4.69	0.21	0.00	0.06	0.02	0.00	0.00	0.00	0.00
【Average】 Au 検出部 2			6.01	0.00	89.40	4.18	0.24	0.00	0.08	0.01	0.00	0.09	0.00	0.00
2024/10/21	2	左足裏後方	10.35	0.00	84.81	4.37	0.13	0.00	0.10	0.00	0.00	0.25	0.00	0.00
2024/10/21	3	右足裏後方	6.41	0.00	87.94	4.75	0.69	0.00	0.21	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	17	両膝間	9.86	0.00	83.53	6.10	0.05	0.00	0.36	0.10	0.00	0.00	0.00	0.00
【Average】 Au 検出部 3			8.87	0.00	85.43	5.07	0.29	0.00	0.23	0.03	0.00	0.08	0.00	0.00

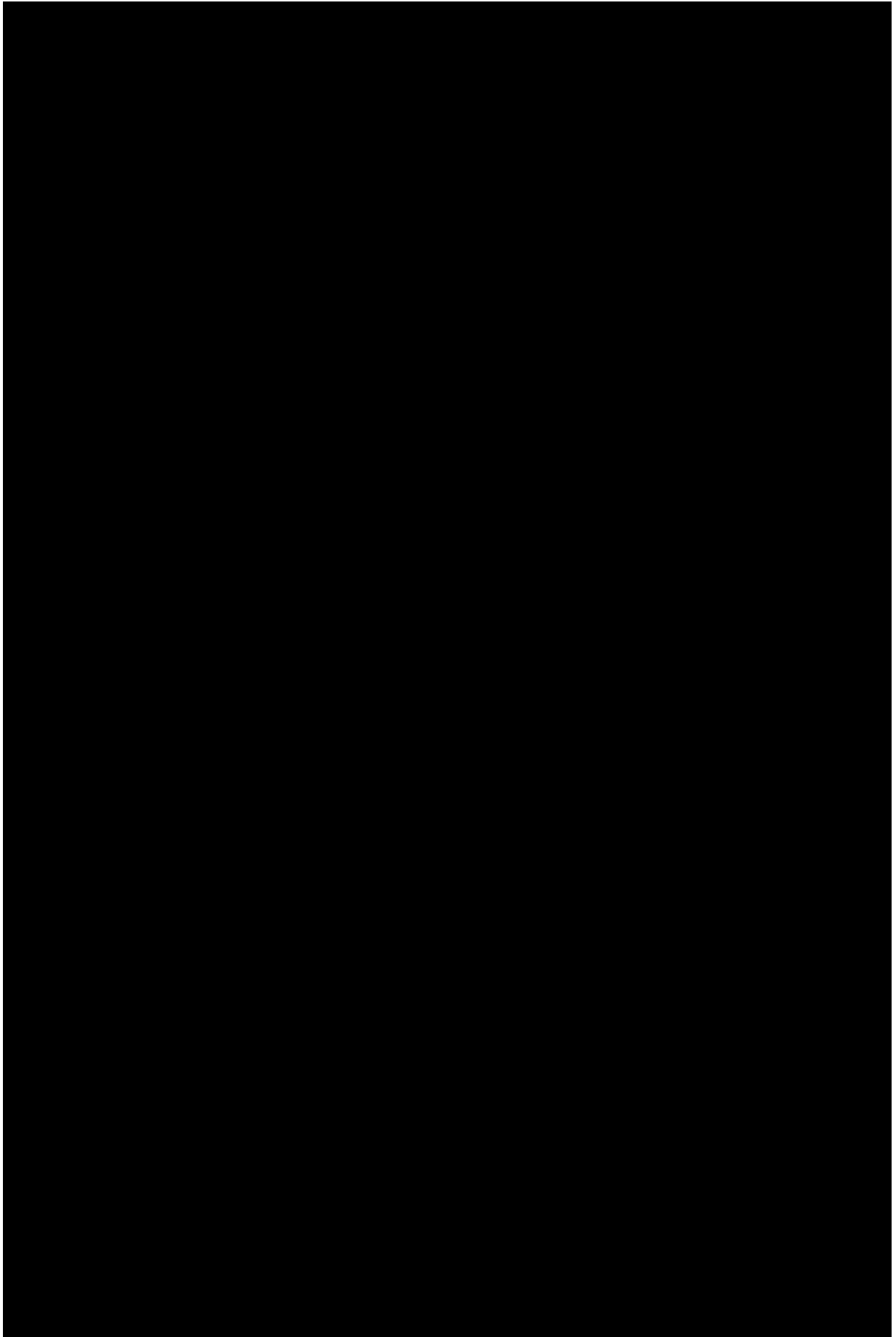
## 分析部位スペクトル



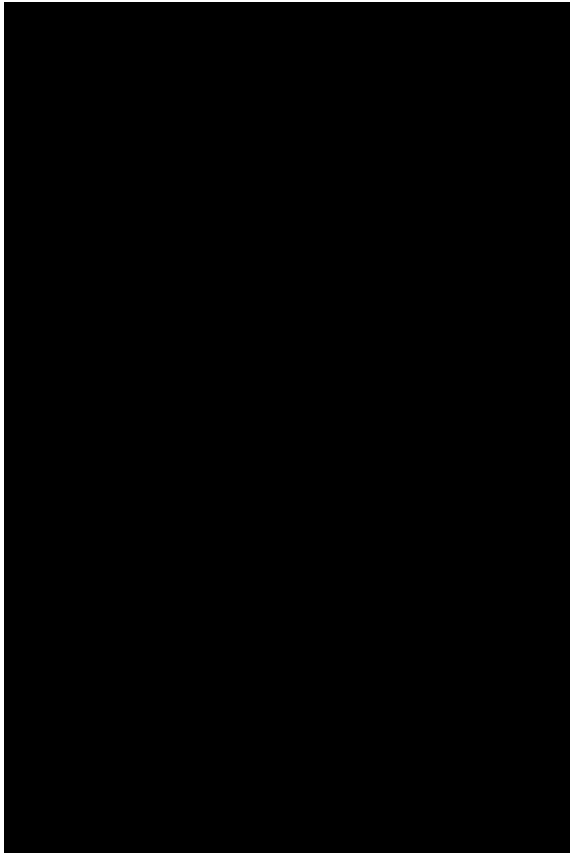
二  
◎観音菩薩立像（石山寺本尊像内納入品のうち）（図版） 本堂安置



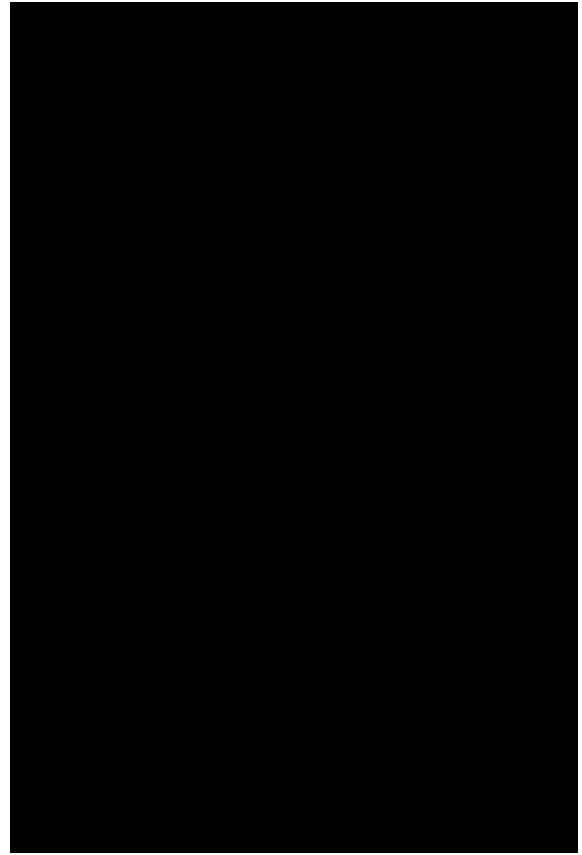
全身正面



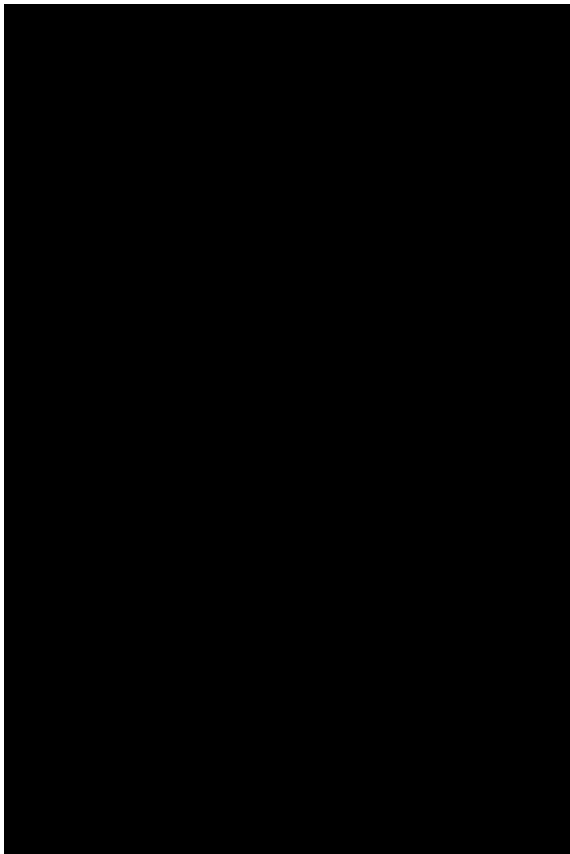
頭部正面



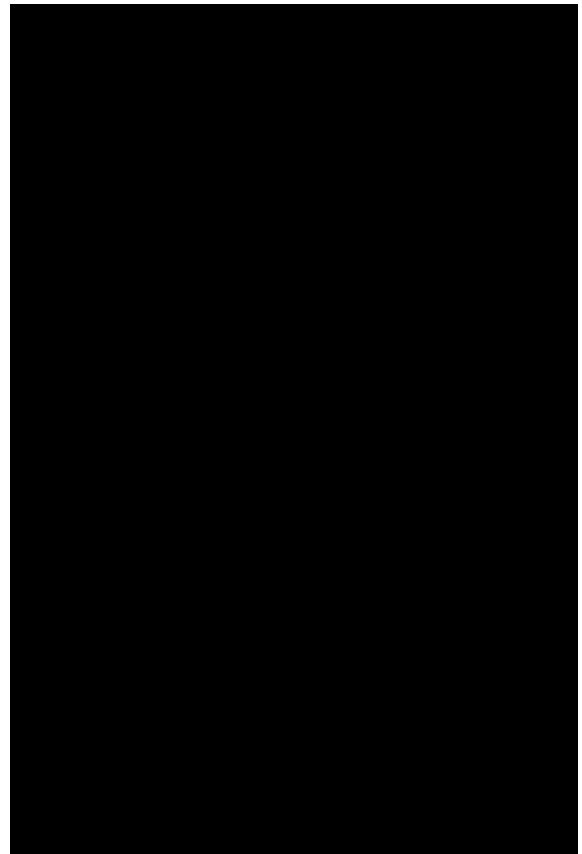
全身右側面



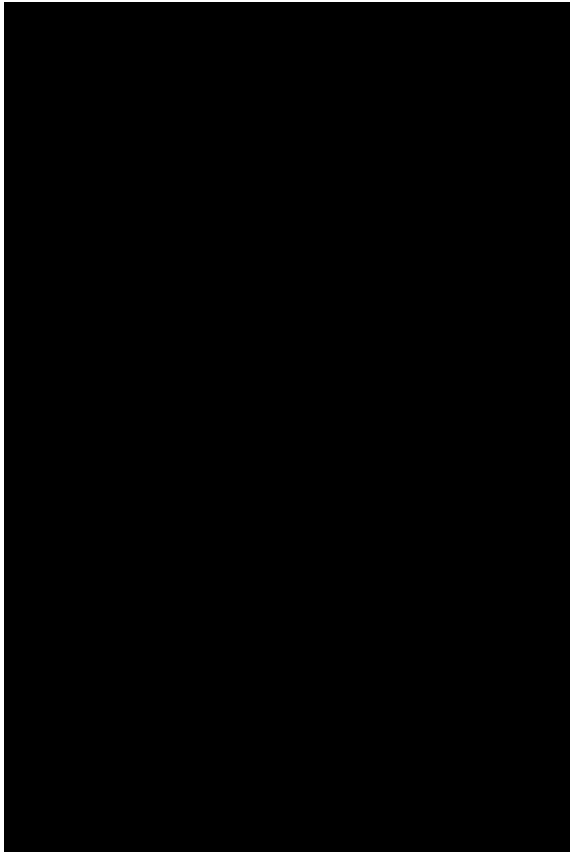
全身左側面



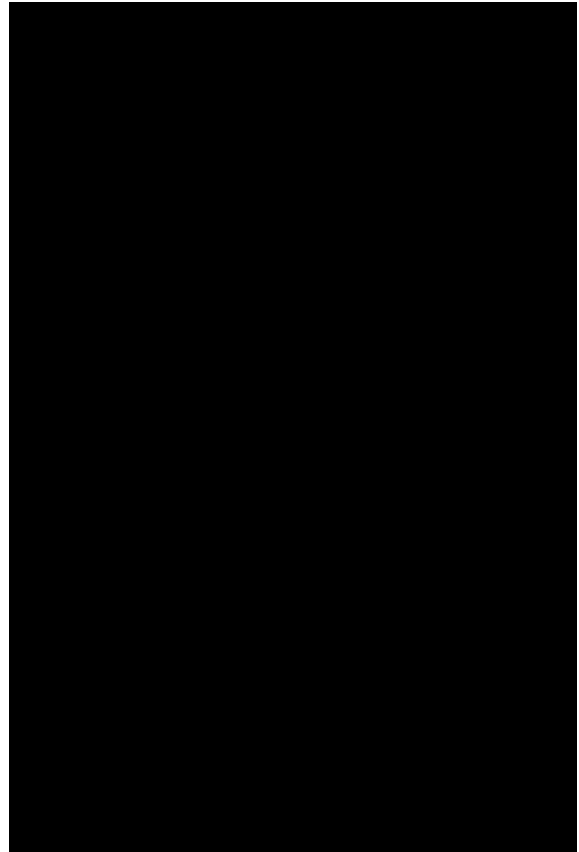
全身背面



全身左斜め



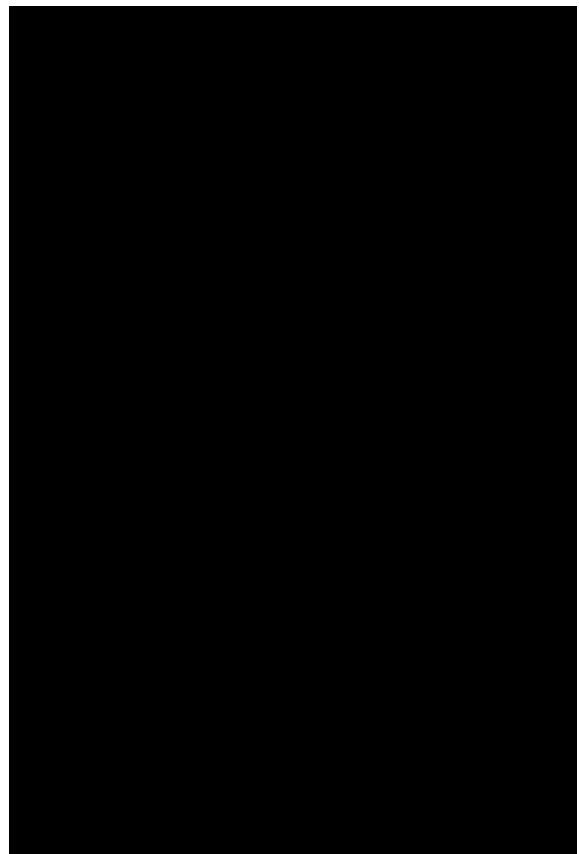
頭部右側面



頭部左側面



頭部右斜め



頭部左斜め

## 二 ◎観音菩薩立像（石山寺本尊像内納入品のうち）（解説）

銅造 鍍金 一軀

### 〔法量〕

総高	三二・三	像高	二九・九	髮際高	二七・五
頂一顎	六・四	面長	四・〇	面幅	三・一
耳張	四・五	面奥	四・七	胸奥（左）	三・五
胸奥（右）	三・七	腹奥	三・九	肘張	八・二
天衣張	七・九	足先開（内）	一・二	足先開（外）	四・九
台座（當初部）	一・九	台座（上面）	五・九		

### 〔形状〕

頭頂に三葉形状（各弁は三重に髪束を刻む）の低平な髻を表す。地髪は、正面冠帯下では中央から左右に向かつて髪束の重なりが立体的に表され、背面では左右に振り分け、左右それぞれにU字形の髪束を陰刻で表す。天冠台（正面のみ）は列弁・紐・列弁で、正面と両側面に蔽手形の放光表現をともなう花形をあしらひ、正面の花形の上部には蓮華座に坐す定印ないし拱手の化仏（頭部欠失）、両側面の花形の上部には放光する宝珠を表す。耳は平板で耳輪の上端が渦巻き、耳朶には紡錘形の凹みを刻む。人中、頤唇溝を深く刻み、やや口角を上げる。三道は刻まない。耳朶の後方から肩、上膊半ばにかけて涙滴形に垂髪を表し、垂髪にはU字形に毛筋を刻む。

胸飾は正背面とも連珠（長円形）・紐・列弁でわずかに下向きに弧を描き、中央には垂飾（正面は連珠・房飾り、背面は連珠・花形）を表す。また、正面では左右には帯飾りが垂れる花形をあしらう。臂釧は列弁・紐・列弁、腕釧は無文帯・紐・無文帯とする。裾は、裾をすばませ、足首辺までたくしあげ、インドのドーティのように着ける。ただし、打合せ目は不明で、正背面、両側面の裾をたくしあげ、正背面上縁を舌状に折り返し、下縁には品字型の折り畳みを表し、正面の両踵間には衣角ないし帯の下端がのぞく。天衣は正面では両肩から腹脇に垂下し、膝辺でX字に交差し、前膊にかかって体側に垂下する。ただし、背面でも腰脇に垂

下し、膝裏辺でX字に交差し、前膊にかかるように表されている。一見不合理に思われるが、天衣が二本あり、それぞれ左右の肩にかかって正面と背面に垂下し、膝および膝裏辺をわたり、それぞれの両端とも反対側の前膊にかかって体側に垂れ、それが三段の鱗状に表されているとみれば合理的な理解が可能である。なお、正背面ともX字に交差する天衣の下端から体側に向かつて垂れる瓔珞（二重の連珠）が表され、体側に垂下する天衣の下層にいたり、各末端に花形をあしらっている。

僅かに両肩を後方に引きつつ、両足をそろえて蓮肉上に直立する。両手とも屈臂し、左手は左腹脇で仰掌し、右手は右腹脇で掌を伏せ、ともに第二〜五指をわずかに曲げ、第一・二指先を相捻じる。なお、蓮肉部の下三分の二には表面を鑿で削ったような痕跡が認められる。本来は反花座があり、それに蓮肉部をはめ込んでいたとみられるが、そのための調整であったかと推察される。

### 〔品質構造〕

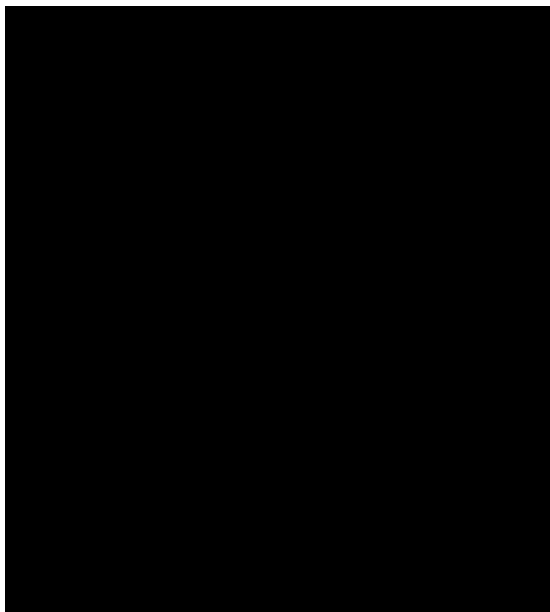
青銅製、鍍金。

髻頂より蓮肉底面までのほぼ全容を一鑄とする。ただし、両前膊の天衣前縁より先は別鑄で、それぞれ柄挿しとみられる。また、後頭部に柄孔（縦七・五×横二・八×深さ七・三mm）があり、もとは頭光をとめる柄を挿していたとみられる。前膊半ばから先の両手や後頭部の頭光用の柄を別鑄とすること、本体には中型がなく無垢とみられることから、原型については土型の可能性も想定すべきであろう。ただし、三面頭飾や正面冠帯下の地髪、臂釧などの造形は捻塑的で、蠟原型であった可能性も否定できない。一方、髻、後頭部の地髪、垂髪の髪束の刻みや耳朶の凹み、脚部の瓔珞の連珠の刻みは鑄造後に鑿で施したものとみられる。蓮肉は中型を設けていたとみられるが、現状、蓮肉の内部に青銅を充填し、底面を鑿で削って整えている。なお、蓮肉部に髻が多く認められることから、蓮肉部に湯口が設けられ、鑄込みは頭部を下にして行われたと想定できる。

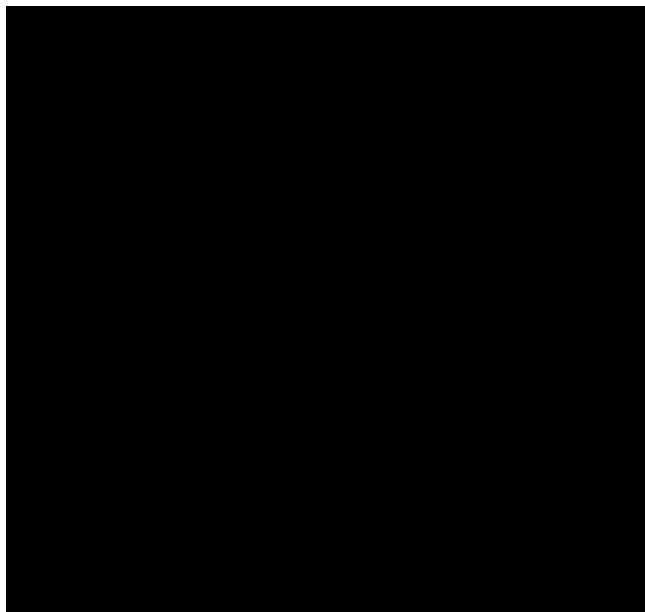
頭髪部、蓮肉側面の下部（本来は反花座の中に隠れていた部分）を除く他の部分からは金が検出されている。ただし、水銀が検出されていないため、アマルガム鍍金か否かは不明である。

蛍光X線分析の結果、金が検出されない蓮肉側面の定量値の平均は、銅



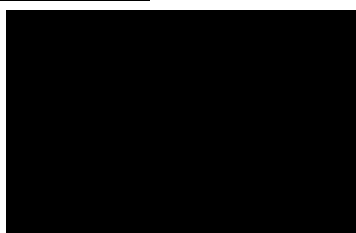
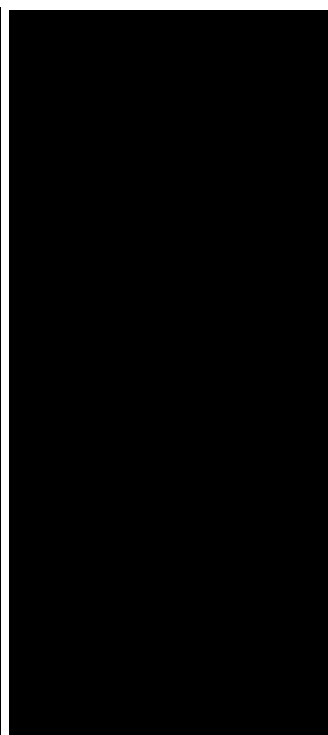
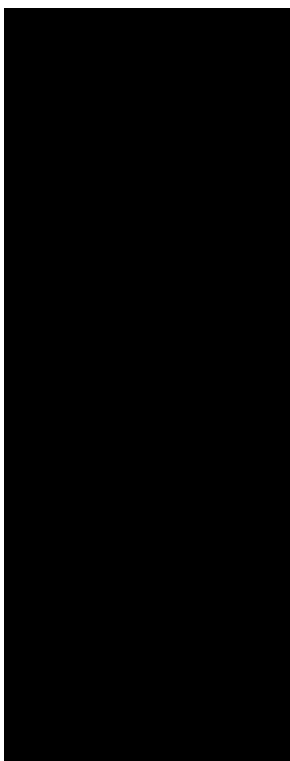
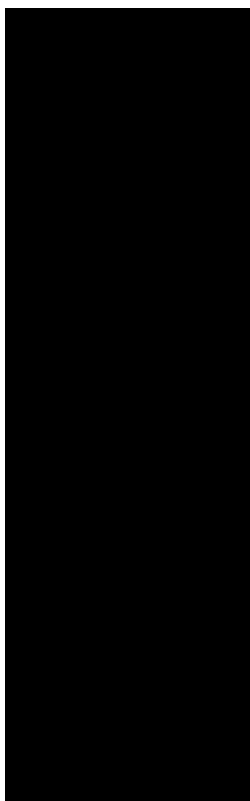


頭頂より



像底

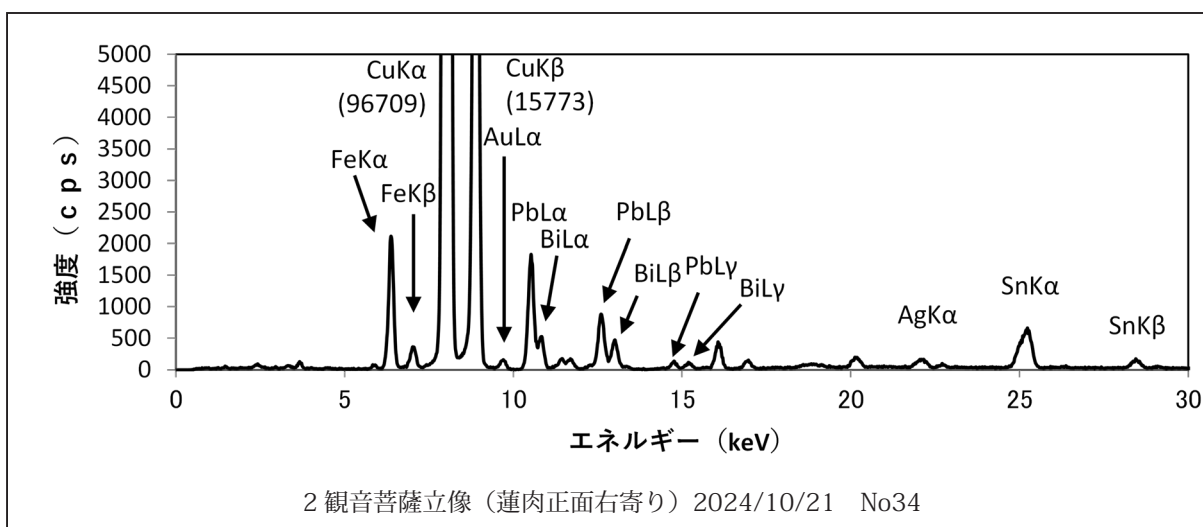
### 成分分析位置



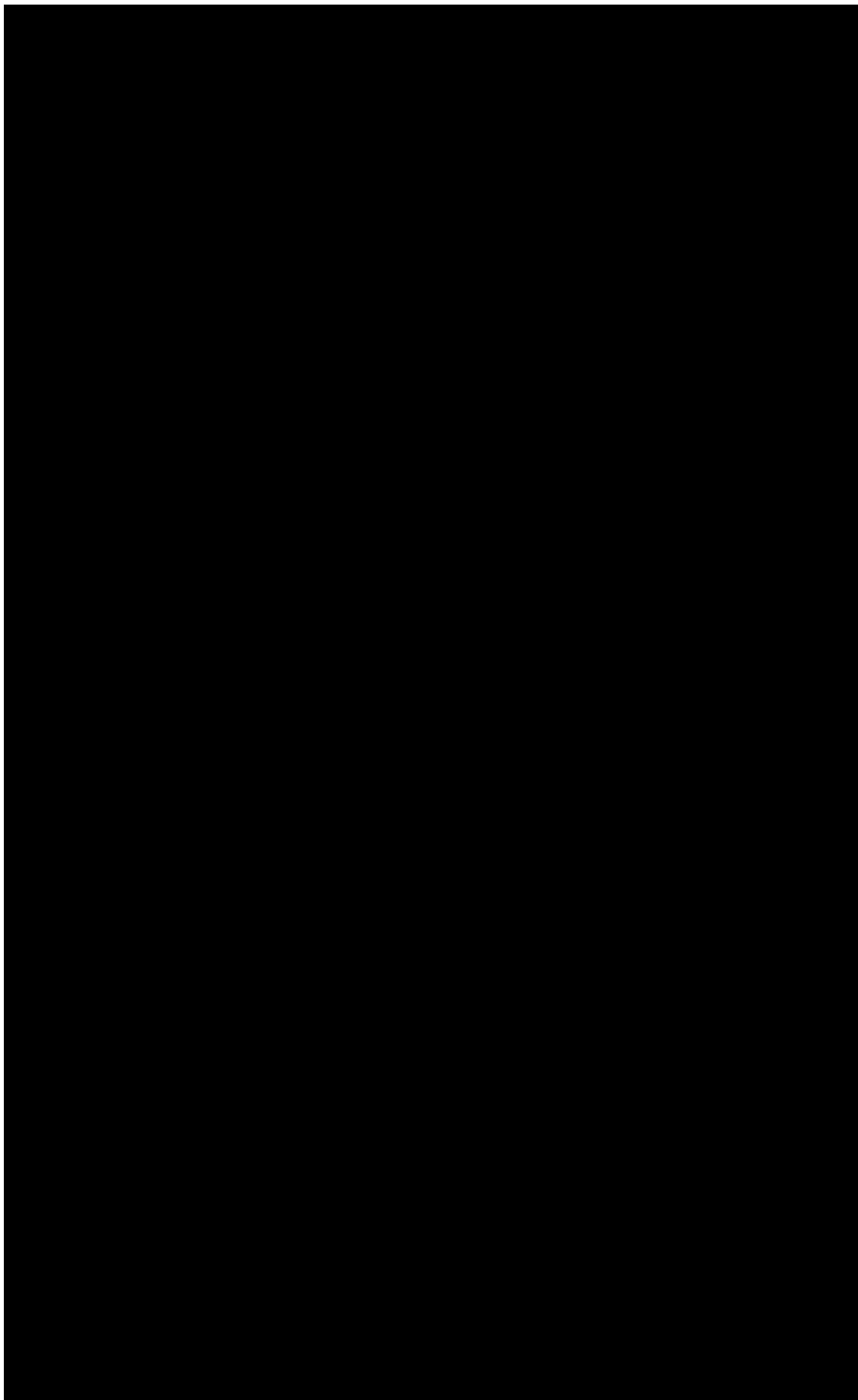
## 成分分析結果

測定日	No.	測定箇所	Au	Hg	Cu	Sn	Pb	As	Fe	Mn	Sb	Zn	Ag	Bi	Ti	Ni	V
2024/10/21	33	蓮肉正面	0.00	0.00	89.51	2.20	3.70	1.44	1.93	0.15	0.00	0.18	0.00	0.88	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	34	蓮肉正面右寄り	0.00	0.00	90.33	2.09	2.91	1.41	1.90	0.07	0.00	0.18	0.00	1.11	0.00	0.00	0.00
【Average】蓮肉側面			0.0	0.0	89.9	2.1	3.3	1.4	1.9	0.1	0.0	0.2	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0
2014/7/11	22	後頭部上方	0.00	0.00	87.74	2.51	2.06	1.19	3.64	0.18	0.62	0.27	0.00	1.01	0.57	0.00	0.20
2024/10/21	35	頭頂部	0.00	0.00	88.89	2.16	1.83	0.78	4.14	0.34	0.25	0.31	0.00	0.81	0.39	0.00	0.09
【Average】頭部			0.0	0.0	88.3	2.3	1.9	1.0	3.9	0.3	0.4	0.3	0.0	0.9	0.5	0.0	0.1
2024/10/21	32	蓮肉底面	0.00	0.00	80.17	3.33	6.35	2.11	5.26	0.06	0.12	0.17	0.36	1.91	0.15	0.00	0.00
2024/10/21	43	蓮肉底面	0.00	0.00	84.32	3.08	4.91	2.02	3.78	0.08	0.07	0.18	0.00	1.55	0.00	0.00	0.00
【Average】蓮肉底面			0.0	0.0	82.2	3.2	5.6	2.1	4.5	0.1	0.1	0.2	0.2	1.7	0.1	0.0	0.0
2014/7/11	23	左肘外	31.89	0.00	57.46	1.91	2.02	0.79	2.94	0.16	0.00	0.69	0.00	1.85	0.24	0.06	0.00
2014/7/11	24	右脹ら脛	54.03	0.00	40.04	1.63	2.10	0.39	0.56	0.02	0.09	0.44	0.00	0.68	0.00	0.00	0.00
2014/7/11	25	股間	49.65	0.00	42.63	1.77	2.58	0.42	1.17	0.22	0.00	0.66	0.00	0.69	0.16	0.05	0.00
2014/7/11	26	左頬	12.74	0.00	77.21	3.09	1.90	1.15	2.53	0.15	0.00	0.57	0.00	0.64	0.00	0.03	0.00
2014/7/11	28	右手甲	13.19	0.00	77.15	3.13	2.56	0.76	1.12	0.22	0.00	0.47	0.38	0.73	0.22	0.04	0.03
2014/7/11	30	右頬	12.41	0.00	78.96	2.22	1.29	1.20	2.71	0.06	0.00	0.43	0.00	0.70	0.00	0.02	0.00
2014/7/11	31	頭頂部	7.66	0.00	82.58	1.42	1.46	0.56	3.57	0.40	0.54	0.50	0.00	0.58	0.52	0.03	0.17
2024/10/21	37	右手右側面	17.32	0.00	75.06	2.70	1.92	0.73	0.80	0.18	0.00	0.57	0.00	0.67	0.00	0.00	0.05
2024/10/21	40	右額	10.71	0.00	78.95	2.42	1.95	0.92	3.55	0.26	0.00	0.56	0.00	0.47	0.17	0.04	0.00
2024/10/21	41	右胸	32.00	0.00	56.71	1.67	1.87	0.68	4.23	0.29	0.00	0.67	0.00	1.50	0.25	0.08	0.06
2024/10/21	42	右天衣垂下部	38.88	0.00	51.75	1.95	3.94	0.59	1.15	0.20	0.00	0.57	0.00	0.94	0.00	0.04	0.00
【Average】本体 Au 検出部			25.5	0.0	65.3	2.2	2.1	0.7	2.2	0.2	0.1	0.6	0.0	0.9	0.1	0.0	0.0
2014/7/11	27	右手指	14.84	0.00	65.57	3.83	8.04	0.78	2.97	0.78	0.00	0.74	0.49	1.37	0.48	0.08	0.00
2014/7/11	29	左手左側面	13.90	0.00	74.78	3.10	3.87	0.87	1.04	0.30	0.00	0.55	0.00	1.54	0.00	0.05	0.00
2024/10/21	36	右手甲	15.07	0.00	67.97	3.66	6.66	0.73	2.79	0.74	0.00	0.68	0.00	1.22	0.37	0.00	0.07
2024/10/21	38	右手甲	14.58	0.00	67.02	3.45	7.73	0.83	3.04	0.83	0.00	0.65	0.00	1.32	0.44	0.07	0.00
2024/10/21	39	左手首外側	11.84	0.00	77.08	3.14	3.31	0.92	0.90	0.26	0.00	0.49	0.38	1.62	0.00	0.00	0.04
【Average】両手 Au 検出部			14.0	0.0	70.5	3.4	5.9	0.8	2.1	0.6	0.0	0.6	0.2	1.4	0.3	0.0	0.0

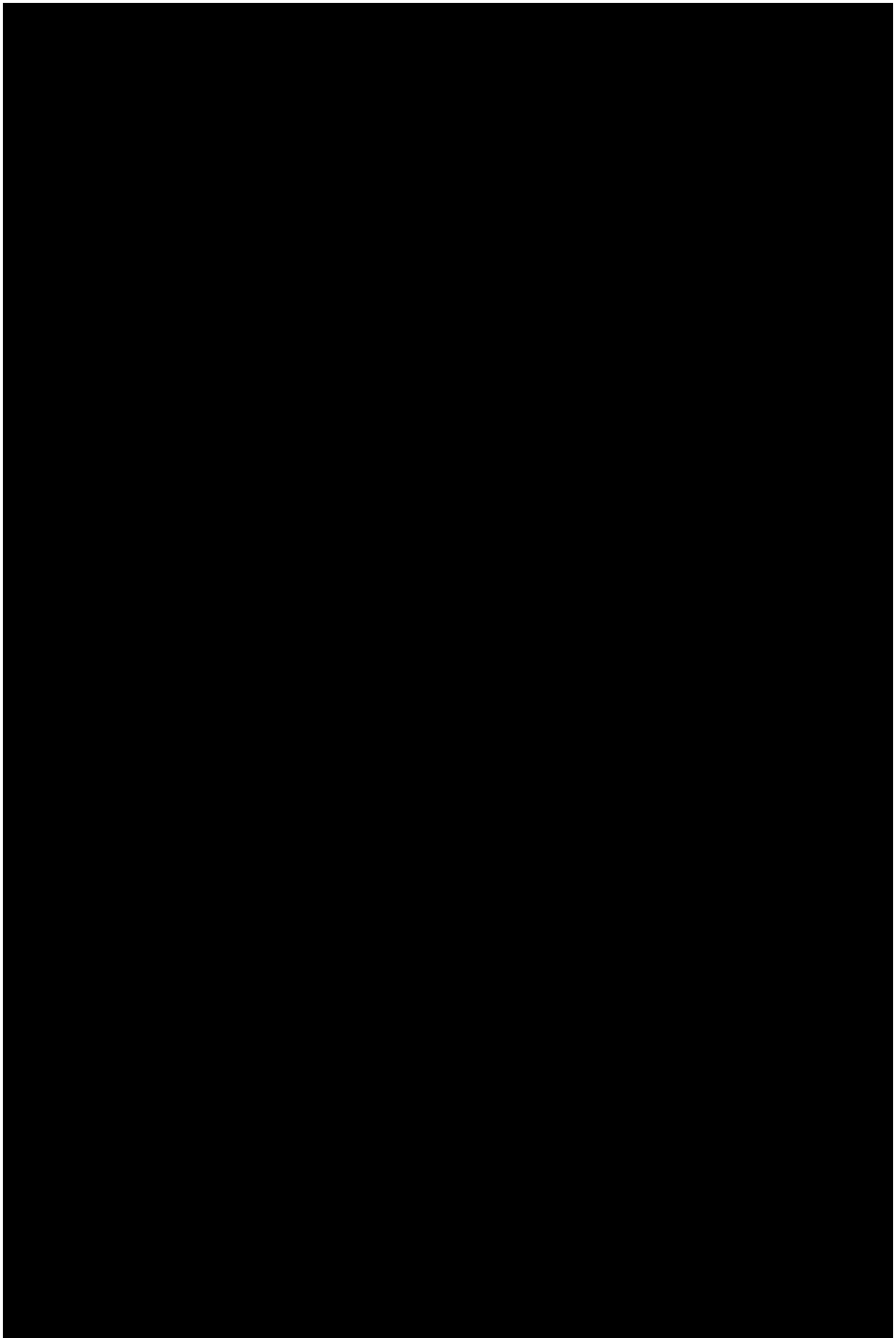
## 分析部位スペクトル



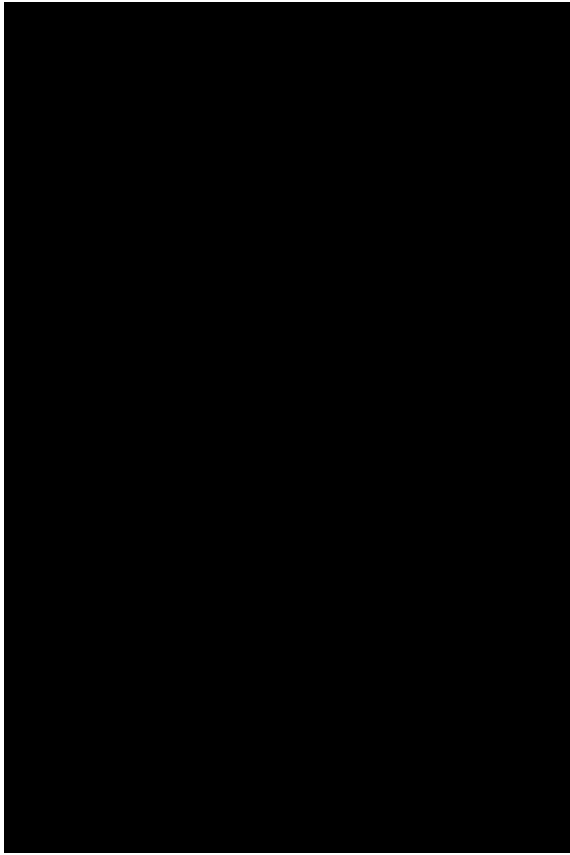
三  
◎菩薩立像（石山寺本尊像内納入品のうち）（図版） 本堂安置



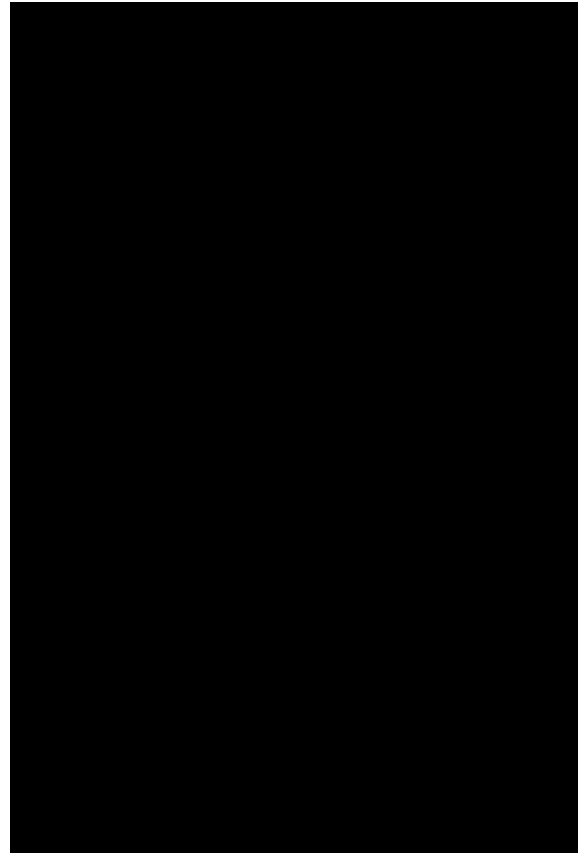
全身正面



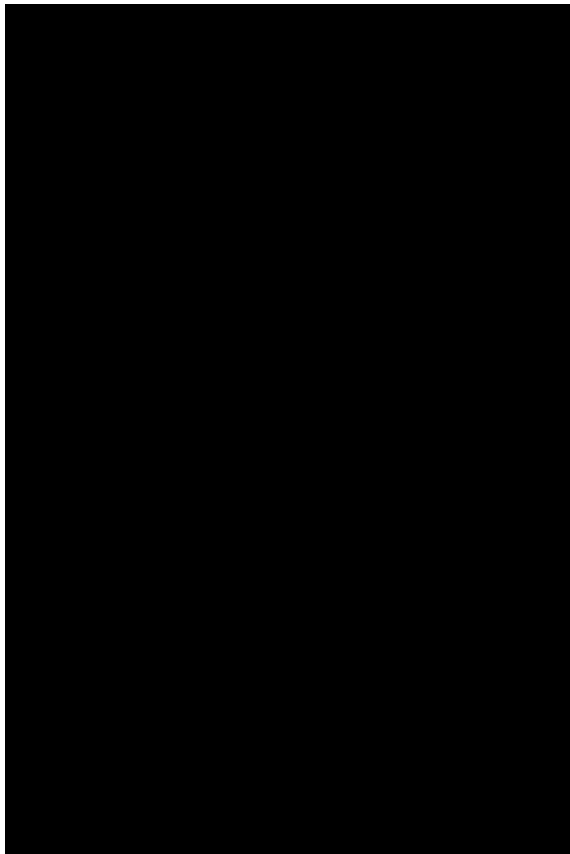
頭部正面



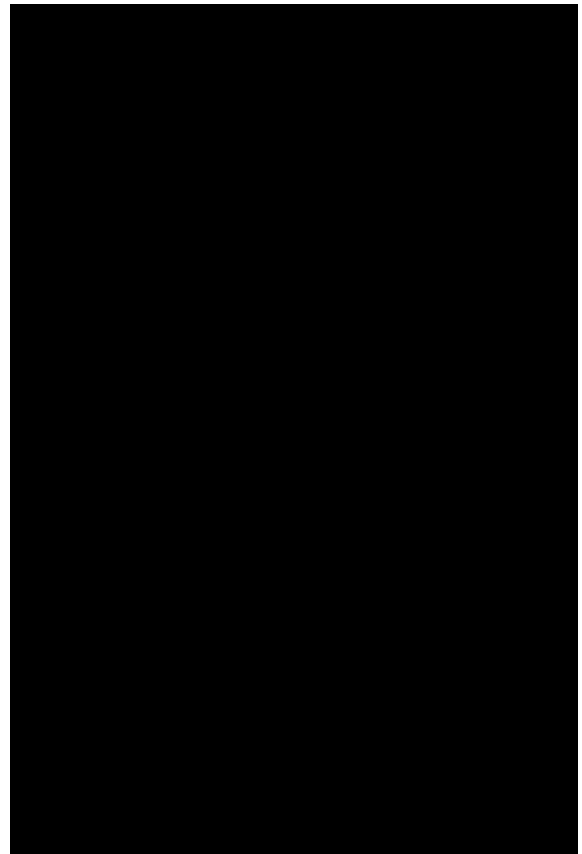
全身右側面



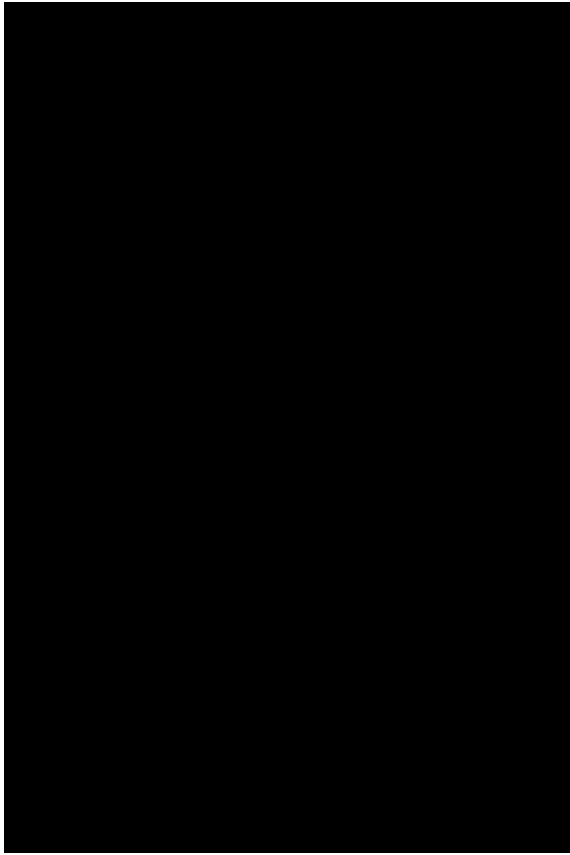
全身左側面



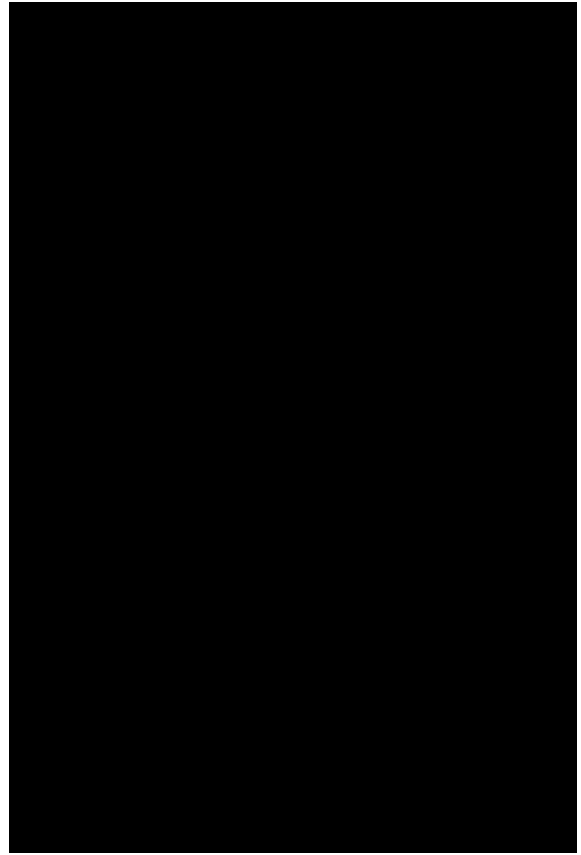
全身背面



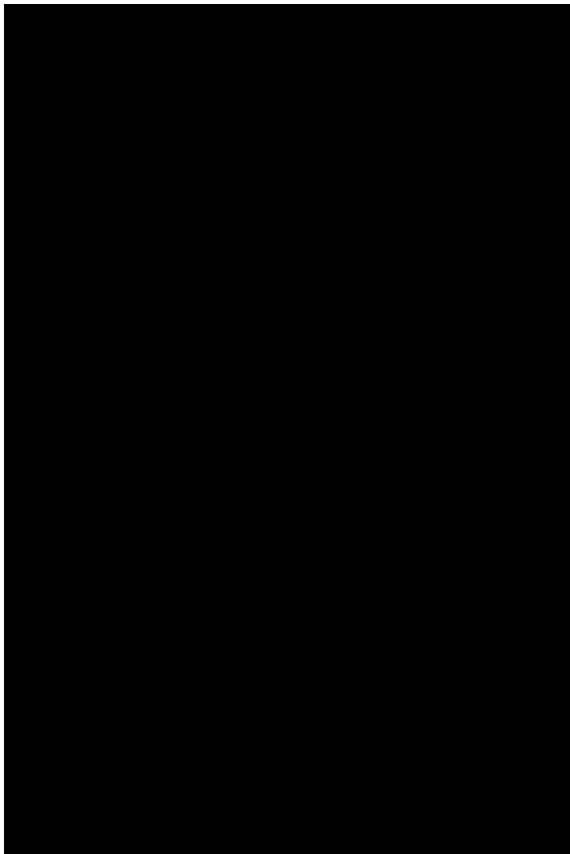
全身左斜め



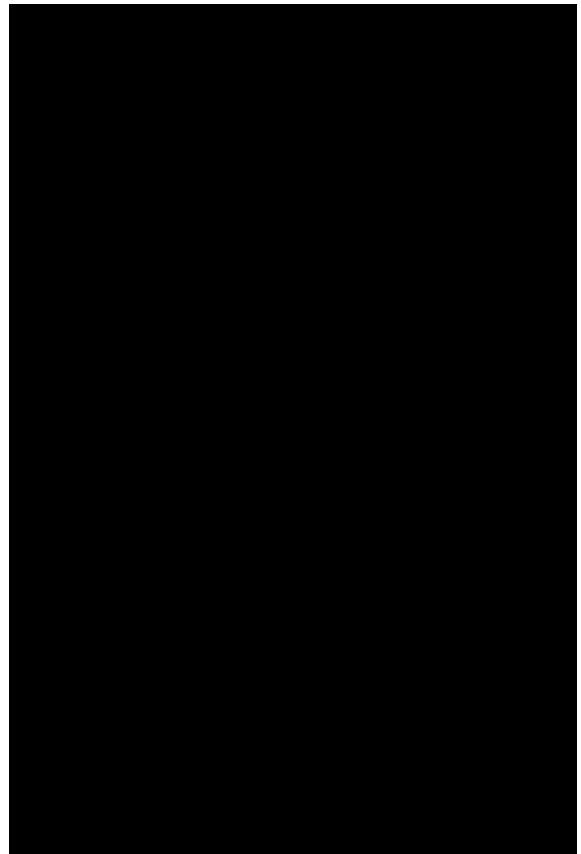
頭部右側面



頭部左側面



頭部右斜め



頭部左斜め

### 三 ◎菩薩立像（石山寺本尊像内納入品のうち）（解説）

銅造 鍍金 一軀

#### 〔法量〕

鬘（際）	三九・二	像	高	二一・六	頂	一	顎	五・九
面	長 二・八	面	幅	二・五	面	奥	三・四	
胸奥（左）	二・六	胸奥（右）	二・九	腹	奥	二・六		
肘	張 五・〇	天衣	張 五・五	足先開（内）	〇・八			
足先開（外）	三・〇	柄	長 四・二	柄	径 一・三			

#### 〔形状〕

頭上に三面頭飾をいたたく。冠帯は带状で、前面のみに表され、上三分の一あたりに陰刻をほどこす。正面の頭飾は放光する六弁花（陰刻）の上に小さな宝珠を配し、それを象る陰刻線の周囲に火焰形をめぐらす。両側の頭飾は翼状に表される。耳前から腹部に带状の冠帯を垂らす。髻は表さない。正面の地髪はおかっぱ状に表される。頭髪は素髪とし、後頭部にはやや粗く整の痕を残す。垂髪は耳後ろから両肩に垂れて匙状に広がり、先が三つ又に割れる。耳は平板で細長く、下辺を直線的に断ち切る。三道は刻まない。

胸飾は带状無文で下向きに弧を描く。腕釧は帯一条。天衣は背面から両肩にかかり、脚前を上下二段にわたるかに見えるが、実際には混乱が認められる。両肩から垂下する天衣は腹前をU字にわたり、輪状を呈する。膝前をU字にわたる天衣は、一方は右膝外にいたり、一方は左手で一端をつまみ、体側に垂下する。なお、左手にはあわせて裙の一端をつまんでいるようにも見え、天衣と裙とが同化しているのかも知れない。また、これらとは別に右前膊から体側に鱗状の襷を作って垂れる天衣が表される。裙を腰高に着ける。腰前に結び輪状の裙の一端を垂らし、両膝下にU字形ないしJ字形の衣文を重ね、正面では裾を連弧形として両足半ばまでを覆い、背面では上端をわずかに折り返し、臀部に小札状の襷を三段に作る。左手は僅かに肘を曲げつつ垂下し、天衣の一端をとり、右手は屈臂して手先を胸脇に挙げ、第一・三指でやや平たい小珠を挟み持ち、他指は第三指

に沿わせて曲げる。体軀を僅かに弓なりに反らし、請花（九弁間弁付き）に直立する。請花の下部に柄（長さ約5cm）を作り出す。請花の下部には大きな反花座や框があつたのだろう。

#### 〔品質構造〕

青銅製、鍍金。

頭飾頂上より蓮華座下方の柄にいたるまでを一鑄とする。中型はなく、無垢である。おそらく蠟型による鑄造とみられ、頭飾や冠帯、装身具、天衣垂下部などは、板状の蜜蝋からパーツを成形したと推察される。

蓮華座下部の柄や頭髪部をのぞき、ほぼ全体から金が検出される。ただし、水銀はまったく検出されないため、箔鍍金の可能性がある。金が検出されない箇所は、板状の蜜蝋からパーツを成形したと推察される。ただし、水の定量値の平均値は、銅九七・六％、鉛〇・二％、砒素〇・八％、鉄〇・四％、マンガン〇・一％、銀〇・七％、ビスマス〇・二％であつた。銅の割合が高く、他の元素はいずれも微量で、錫は検出されないのが特徴的である。そのなかで強いて言えば銀と砒素の割合が高いが、銀は鉄やマンガンとともに銅鉱石中の不純物であり、砒素は意図的に混入された可能性が考えられる。

#### 〔伝来〕

平成一四年（二〇〇二）八月一日、石山寺本尊如意輪観音菩薩坐像の勅封の宮殿開扉にあたり実施された奈良国立博物館の調査において、像背面上部の蓋板内部に納められた木製厨子に安置された状態で発見された。

平成一五年五月国追加指定。

#### 〔保存状態〕

本像には鍍金がよく残るが、左頭飾が変形しており、火中した可能性は否定できない。また、請花以下の台座、光背を亡失する。

#### 〔時代〕

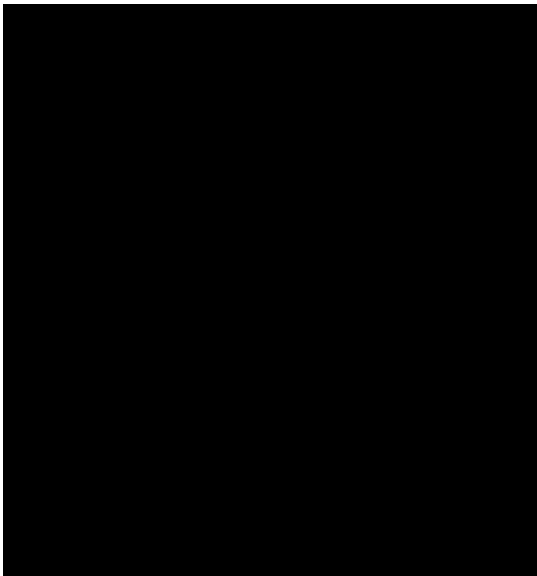
飛鳥時代（七世紀）

〔考察〕

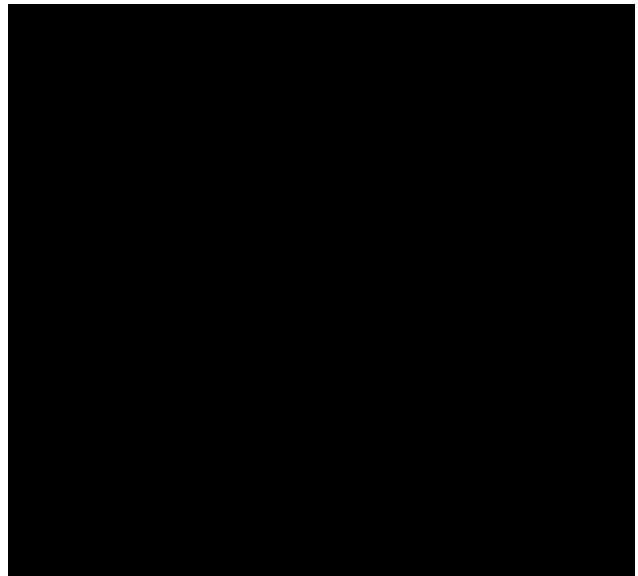
髻を表さないのは、法隆寺夢殿救世観音立像や同寺金堂四天王立像など飛鳥時代前期の作例の特徴として知られるが、新潟県伝来とも伝えられ、飛鳥時代後期の作とみられる東京国立博物館の木像菩薩立像も髻がなく、時代を超えて地方的な広がりがあったとみられ、本像もそうした作例と位置付けられるだろう。垂下する天衣に鱗状の折りたたみを表すのも飛鳥時代前期の作例に通じる古様と言えるが、本像の場合、側方への張り出しと同時に前後方向への動勢も認められ、これは七世紀後半の新傾向をしめしている。

本像の面長で頬の長い顔立ち、上瞼が弧を描き、やや目尻を下げ、下瞼を水平に表す目の表現は、隋ないし新羅の様式を受けたいわゆる童顔童形像の相貌に通じる。童顔童形像は七世紀末頃を中心に展開したが、三面頭飾の形式も七世紀後半から流行したものである。加えて、腰前に結び輪状の裙の一端を垂らすのは初唐様式を受容した七世紀末頃の菩薩像にみられるものであることを考慮すると、本像には古様な点も見受けられるが、着衣や装身具には省略や混乱もあり、また七世紀末頃に採用された形式が認められることから、飛鳥時代末期の造立とみるのが穏当であろう。

(藤岡・中田)



頭頂より



像底

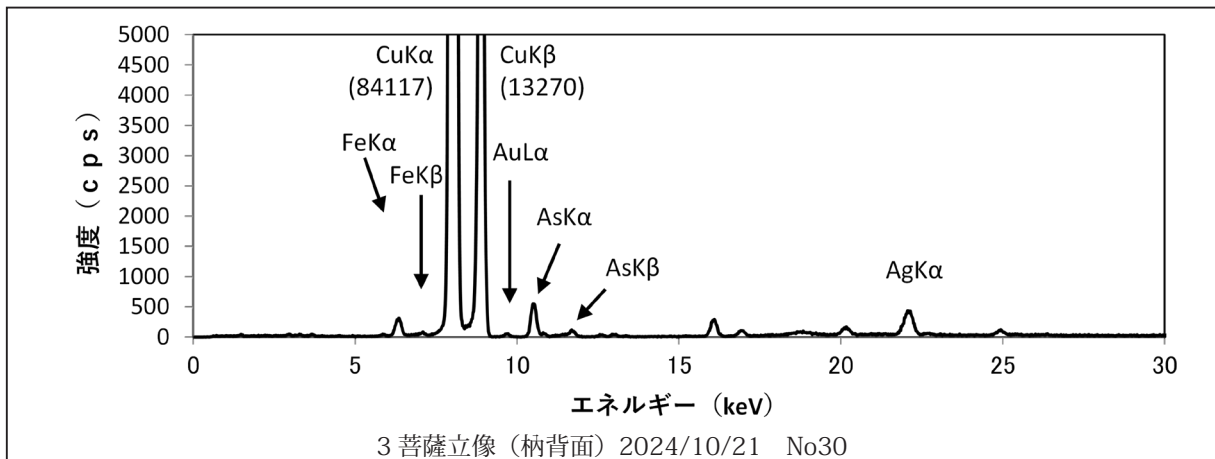
## 成分分析位置



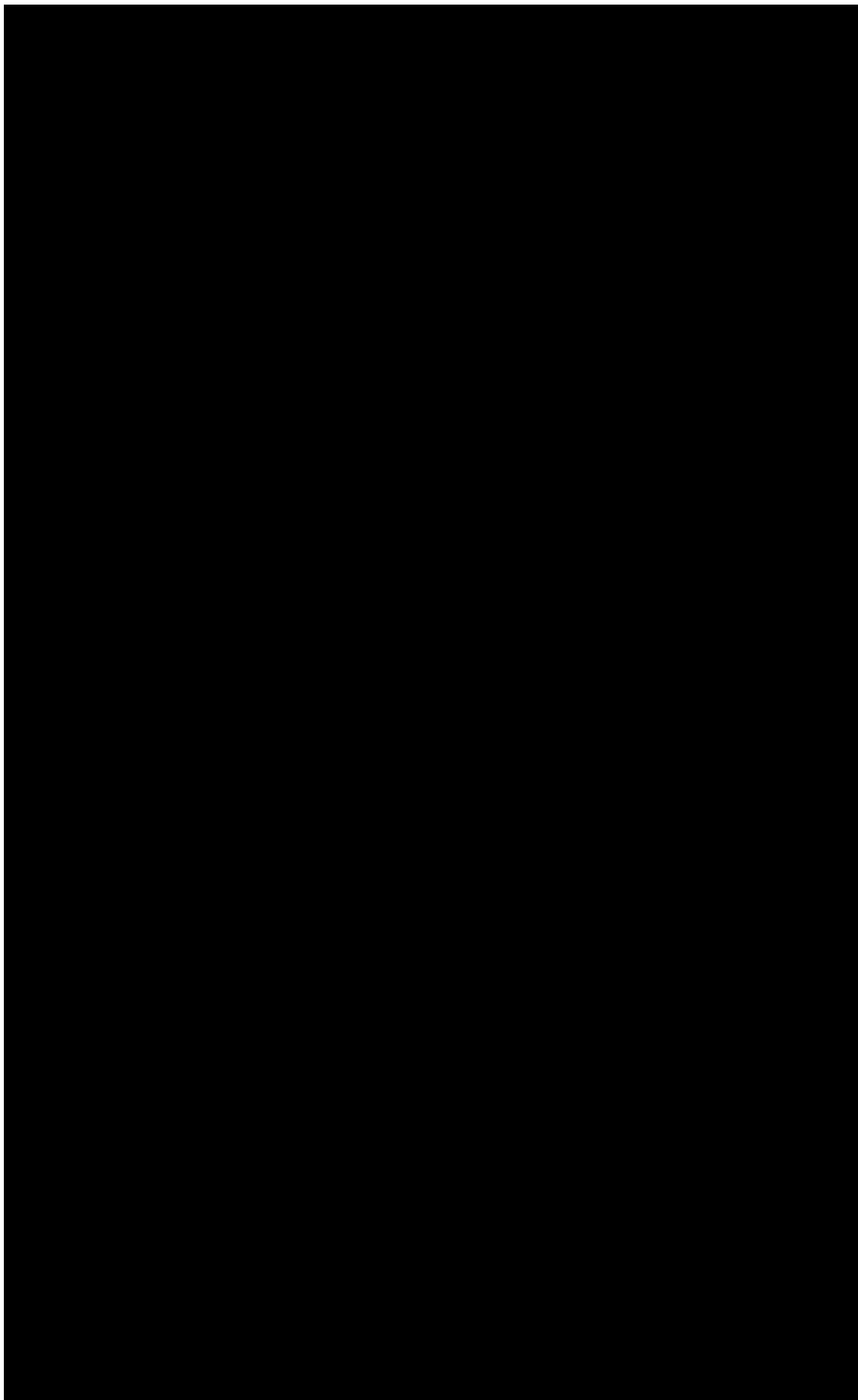
## 成分分析結果

測定日	No.	測定箇所	Au	Cu	Pb	As	Fe	Mn	Zn	Ag	Bi	Ti	Ni
2014/7/11	17	柄正面	0.00	98.37	0.11	0.52	0.35	0.14	0.00	0.44	0.07	0.00	0.00
2014/7/11	20	後頭部	0.00	97.25	0.25	0.74	0.62	0.02	0.10	0.69	0.33	0.00	0.00
2024/10/21	30	柄背面	0.00	97.21	0.15	1.27	0.19	0.03	0.00	1.00	0.14	0.00	0.00
【Average】地金			0.0	97.6	0.2	0.8	0.4	0.1	0.0	0.7	0.2	0.0	0.0
2014/7/11	19	臀部下方	13.56	84.71	0.08	0.45	0.12	0.02	0.27	0.64	0.16	0.00	0.00
2014/7/11	18	腹部	18.79	78.92	0.09	0.54	0.23	0.09	0.39	0.75	0.19	0.00	0.02
2024/10/21	26	蓮華座正面	13.09	83.23	0.17	0.68	1.02	0.43	0.39	0.70	0.13	0.14	0.02
2024/10/21	27	左頬	18.08	78.45	0.18	0.57	0.74	0.26	0.49	0.70	0.34	0.17	0.03
2024/10/21	28	右冠飾	28.53	68.35	0.30	0.41	0.66	0.12	0.56	0.55	0.35	0.13	0.04
2024/10/21	29	背面上部	14.44	83.68	0.14	0.47	0.09	0.01	0.27	0.62	0.27	0.00	0.00
2024/10/21	31	天衣右肘下方	23.14	74.88	0.13	0.39	0.18	0.05	0.43	0.60	0.19	0.00	0.02
【Average】Au 検出部			18.5	78.9	0.2	0.5	0.4	0.1	0.4	0.7	0.2	0.1	0.0

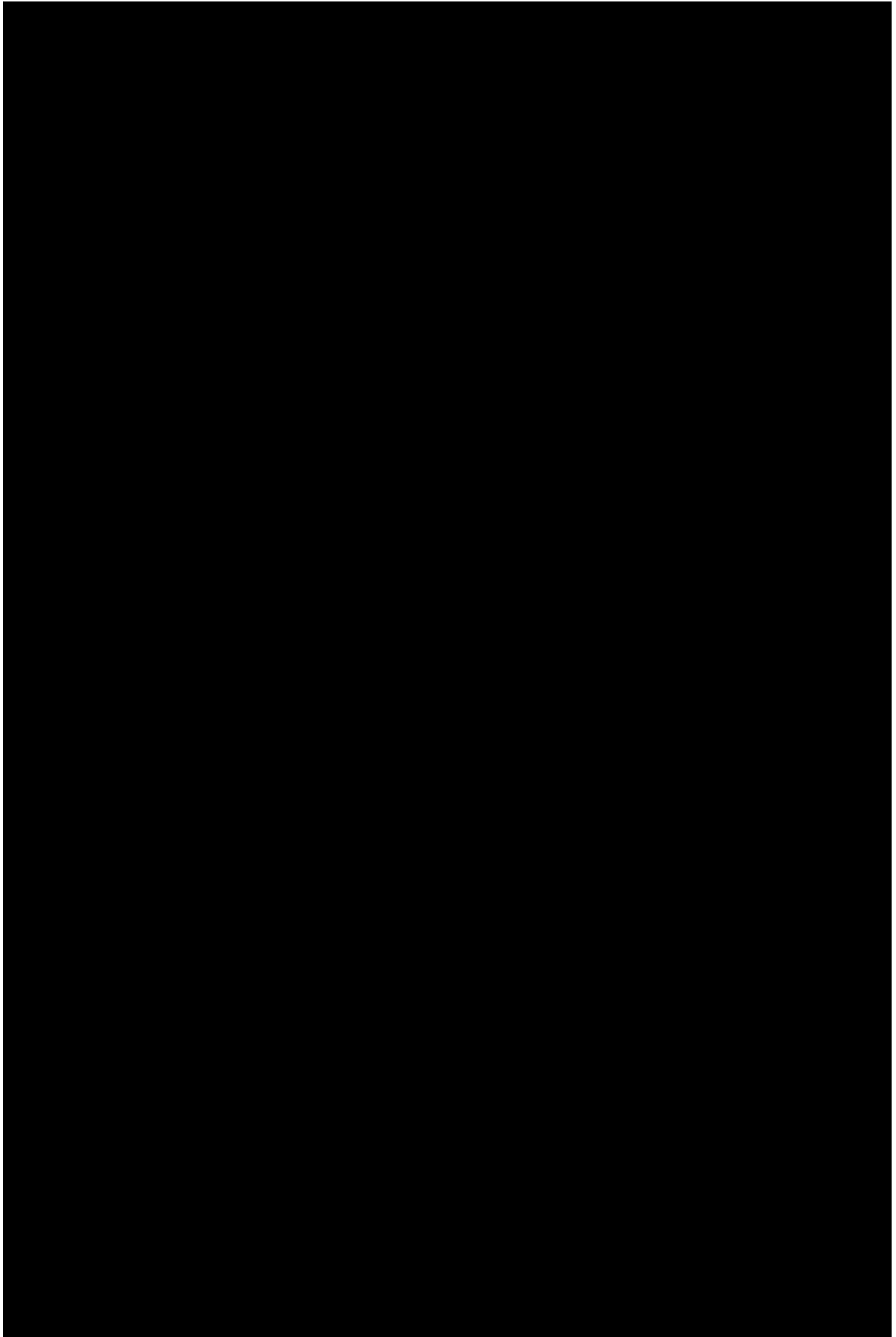
## 分析部位スペクトル



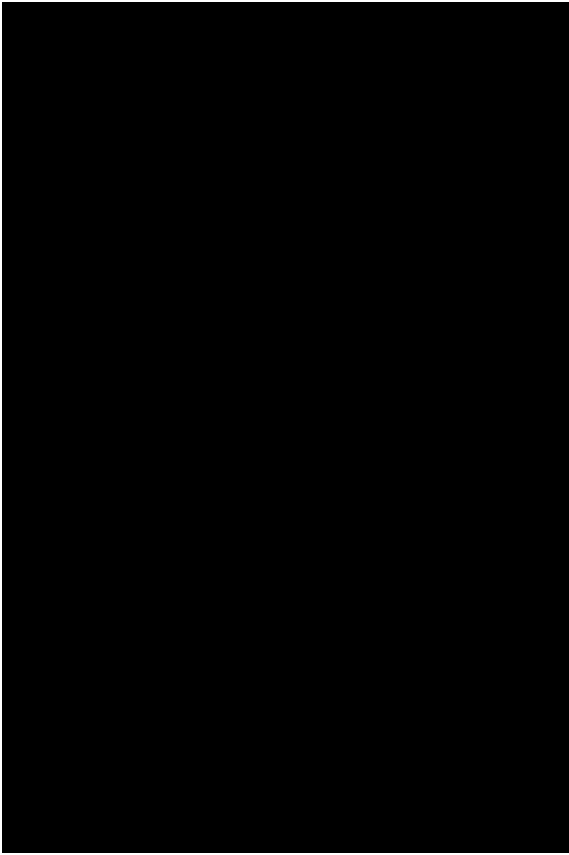
四  
◎観音菩薩立像（石山寺本尊像内納入品のうち）（図版）  
本堂安置



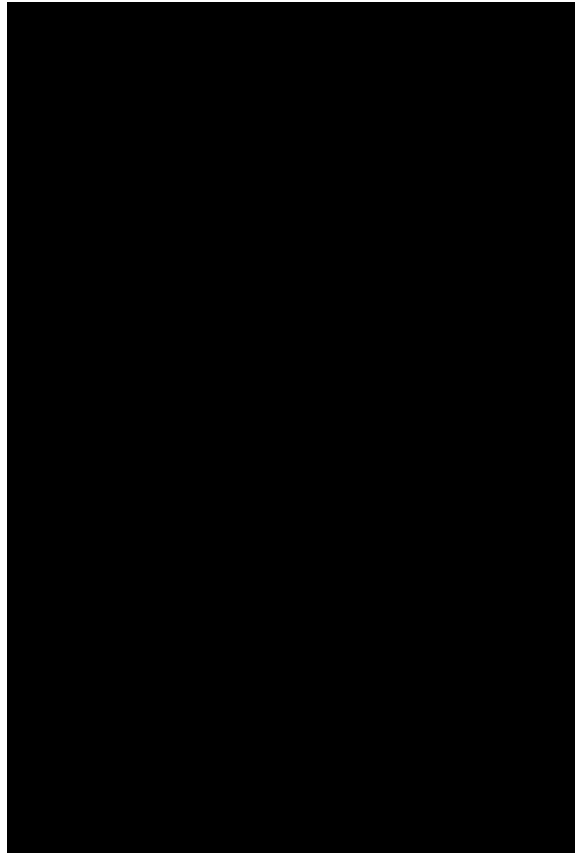
全身正面



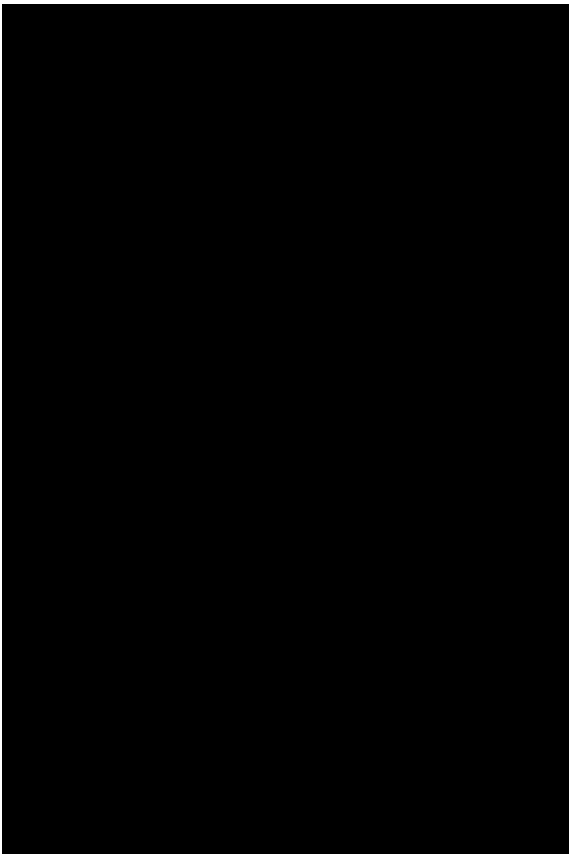
頭部正面



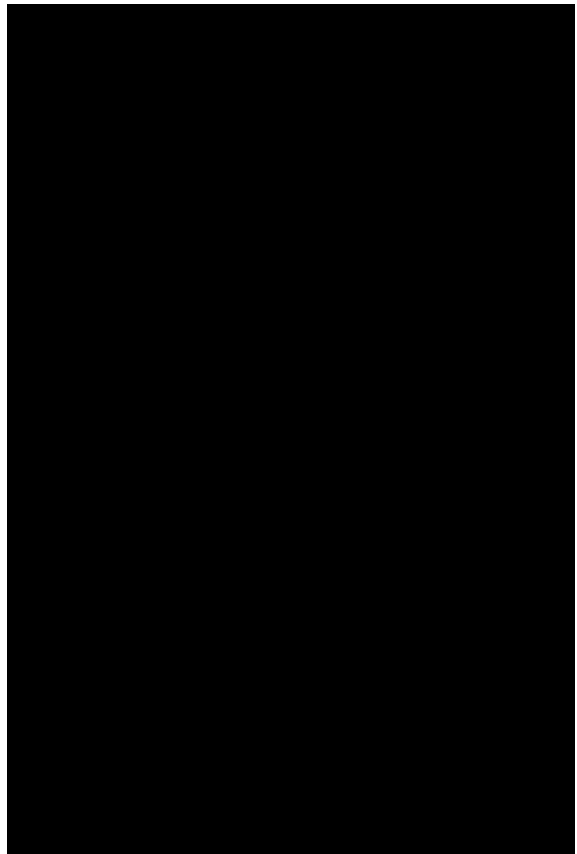
全身右側面



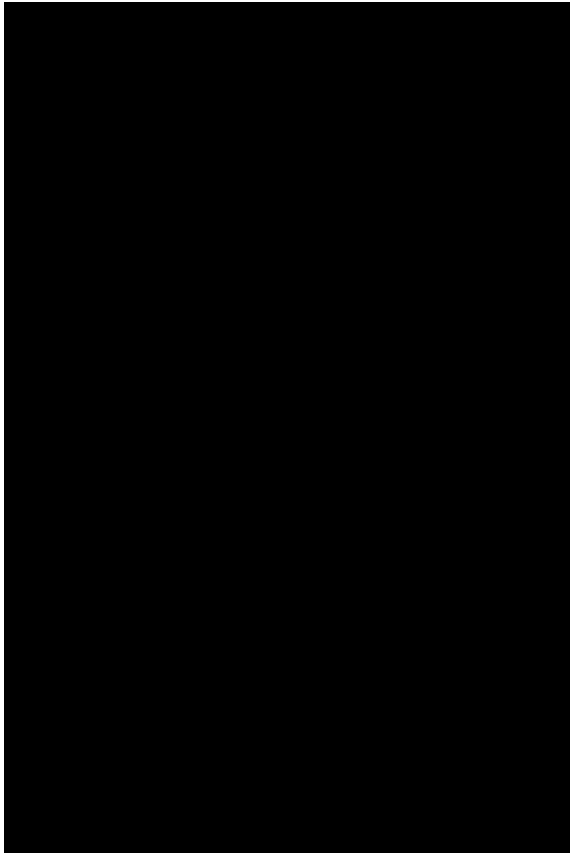
全身左側面



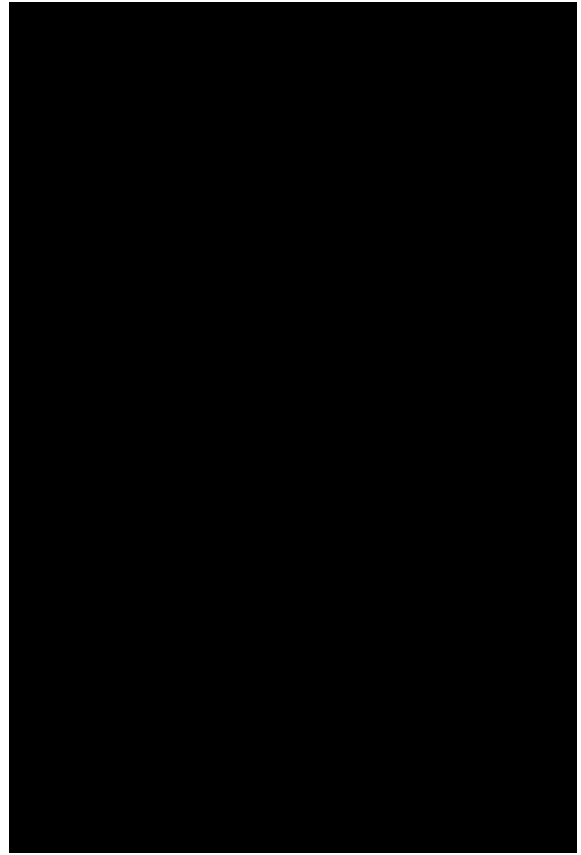
全身背面



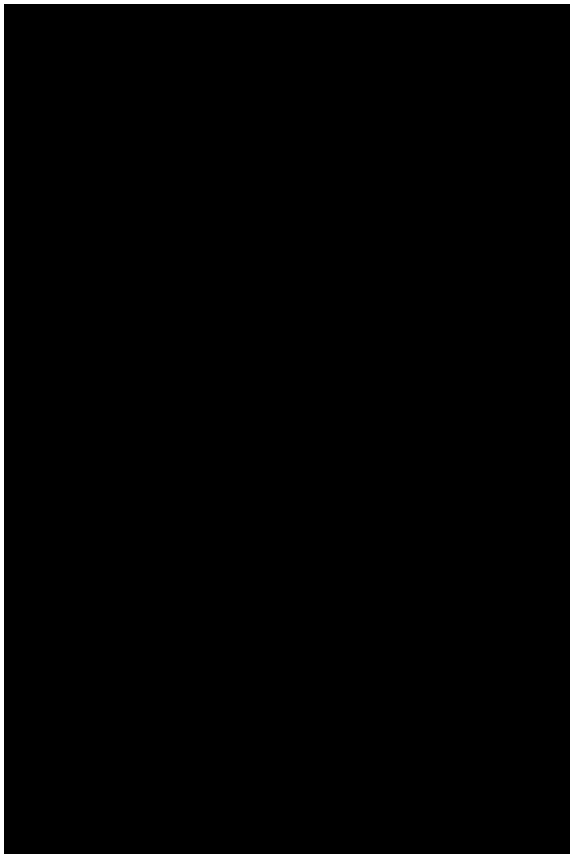
全身左斜め



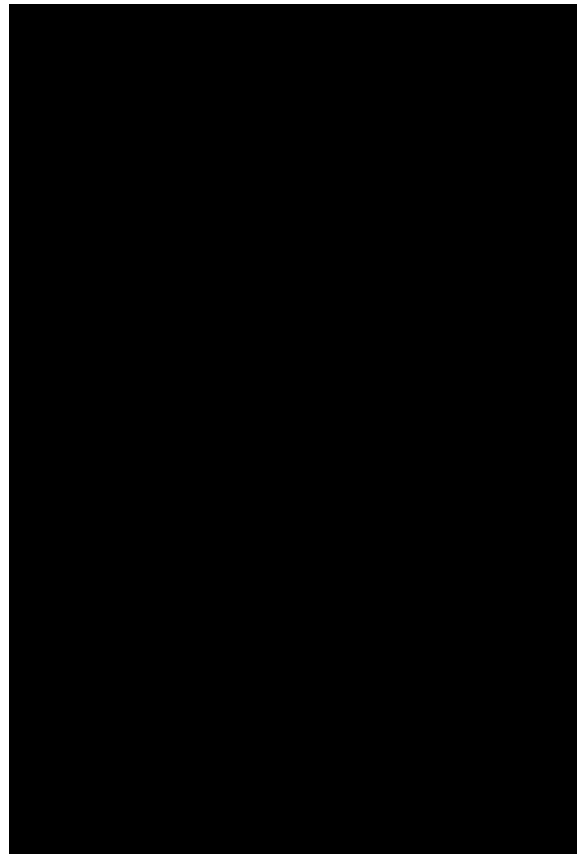
頭部右側面



頭部左側面



頭部右斜め



頭部左斜め

#### 四 ◎観音菩薩立像（石山寺本尊像内納入品のうち）（解説）

銅造 鍍金 一軀

##### 〔法量〕

鬘（柄）	三二・四	像	高	二八・一	髮際高	二四・八
頂―顎	七・一	面	長	三・四	面	幅
耳	四・八	面	奥	五・二	胸奥（左）	四・二
胸奥（右）	四・〇	腹	奥	三・九	肘	張
裾裾張	四・五	天衣	張	八・七	足先開（内）	一・二
足先開（外）	四・六	台座	高	五・八	台座	径
柄	長	二・三	柄	径	一・九	八・二

##### 〔形状〕

山形の髻を結う。元結びを上下二段に表す（左方では三段にもみえる）。元結により、左右各四束の髪束を輪状に結び上げて前後に連ね、これを後方から側面にかけて順に重なるように垂らしている。正面天冠下の地髪は中央から左右に縄状に束ね目を作り、背面では中央で左右に振り分け、人字形に髪束を表す。髻地髪とも各髪束に鑄を立てる。垂髪は耳後ろに垂れ、肩上で匙状に広がり、さらにその周囲に四条ほど波打つ髪束を広げる。天冠（列弁・縄二条）を正面にいただけ、中央には拱手して反花座に坐し、列弁形の光背をいたたく化仏、右側面には八弁花形（中央に径3mm、深さ八・五mmの小孔あり）の頂上に弁先形の放光を表す頭飾（左方分は損傷により不明）を表し、両側面の頭飾の後方には冠繪の結び輪と先端が表される。両目は上瞼のふくらみを表すが、眼瞼裂は刻まない。白毫は表さず、耳朶は扁平で角張り、三道を刻まない。

胸飾は連珠・列弁とし、正面には中央と左右の三箇所に六弁花を配し、中央の六弁花の中央からは垂飾（次第に大きくなる連珠の先端に萼付きの大珠をあしらす）を垂らす。臂釧は帯一条、腕釧は連珠・列弁とする。裾は正面中央で右前に打ち合わせ、正面中央と左右前後の五箇所に折り畳みを作り、各々の上端を引き上げて階段状ないし品字形の襞を作り出す。腰帯をしめ、正面中央に結び目を表

し、結び輪を腹前に立てる。裾の上端を折り返すが、正面中央部のみ折り返しの上層に腰帯を表し、左右の腹脇、背面では腰帯の上に折り返し部がかかる。天衣は背面から両肩にかかり、両肘内をとおって体側に垂下し、蓮華座の上面にいたる。左手は僅かに肘を曲げて垂下して、水瓶の首を全指で握る。右手は屈臂して掌を右胸に当て、全指を伸ばす。腰をわずかに右に捻り、左脚を遊脚として蓮華座に立つ。

蓮華座は素弁八弁間弁付きで、各弁の中央の上半に鑄を立てる。蓮華座の下方中央に丸柄を作り出す。

##### 〔品質構造〕

青銅製、鍍金。

髻頂より丸柄にいたるまでを一鑄とする。嵌金や鉄心はなく、中型を設けない無垢の像とみられる。

蛍光X線分析の結果、金が検出されない計測部位の定量値の平均値をとると、銅八九・八%、錫三・九%、鉛〇・七%、砒素一・三%、鉄二・〇%、マンガン〇・五%、亜鉛〇・三%、銀一・二%、ピスマス〇・二%、チタン〇・二%であった。定性値（スペクトル）でもそれらの元素の含有がほぼ確認できる。一方、金が検出される部位については、金の割合が高い部位でも水銀は検出されず（定性値でも認められない）、箔鍍金の可能性が高い。また、面部（頬）では特に銀の含有量が高いが、あるいは銀箔と金箔を重ねたいわゆる仏師箔を用いた可能性も考えられるだろう。なお、蓮華座下方の丸柄の底面と側面の下から一・五cmほどまでは表面に黒漆塗りを施しているように見える。

（1）定性値（スペクトル）では金がわずかに検出される場合がある。

##### 〔伝来〕

平成一四年（二〇〇二）八月一日、石山寺本尊如意輪観音菩薩坐像の勅封の宮殿開扉にあたり実施された奈良国立博物館の調査において、像背面上部の蓋板内部に納められた木製厨子に安置された状態で発見された。

平成一五年五月国追加指定。

〔保存状態〕

焼けただけたりはしていないが、左の頭飾や冠繪の結び目、右冠繪の結び輪の先端などが欠損しており、火中していると思われる。また、頭髪の顔料が失われ、頭髪には土が付着している。本体の箔鍍金は火中後にあらためて施されたものかも知れない。台座の蓮華以下が亡失するが、蓮肉の下半部が露出しているため、あるいは銅板製の蓮弁が数段分あつた可能性も考えられる。

〔時代〕

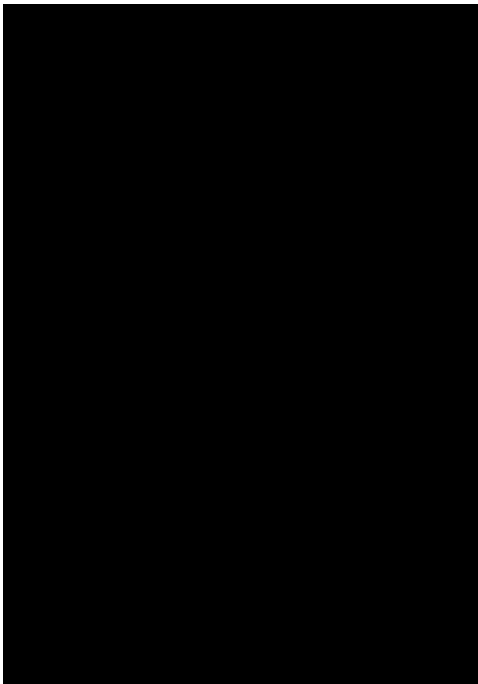
奈良時代（八世紀）

〔考察〕

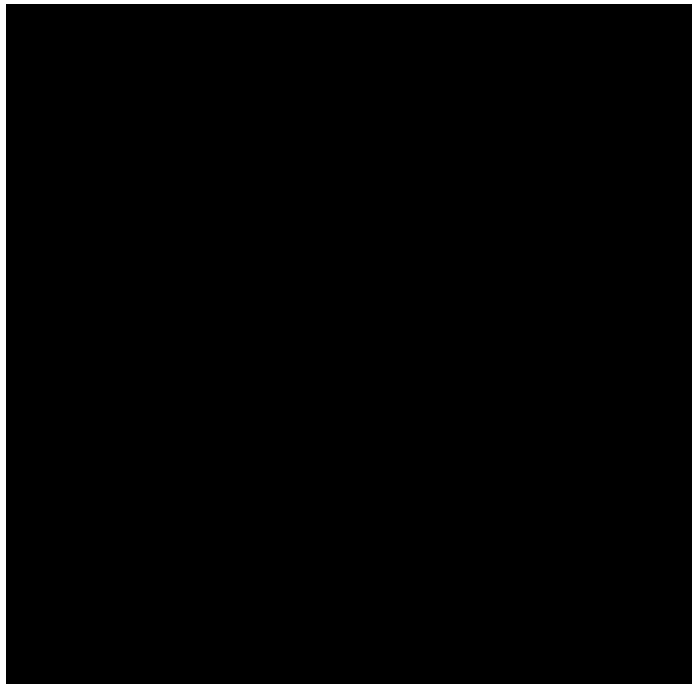
本像の髻は、元結いを上下二段とし、輪状に結び上げた髪束を左右に振り分けて垂らしている。こうした形式の髻は、法隆寺五重塔塑像や薬師寺金堂脇侍菩薩立像などの元結いを一段とする単髻とは異なる形式で、基準的な作例では天平六年（七三四）の興福寺阿修羅立像を初例とする。また、頬が豊かに張り、眼瞼裂を刻まない目の表現は、八世紀前半の作とみられる奈良・岡寺半跏思惟像や福井・正法寺半跏思惟像などに通じるもので、腰をひねり、左脚を遊ばせる動勢などにも成熟した表現が認められ、本像の制作時期は八世紀第二四半期を中心に想定することができるだろう。

右手を屈臂して胸に当てる姿が特徴的だが、動勢もあわせて考えると、本像は三尊の左脇侍であつた可能性もあるだろう。

（藤岡・中田）

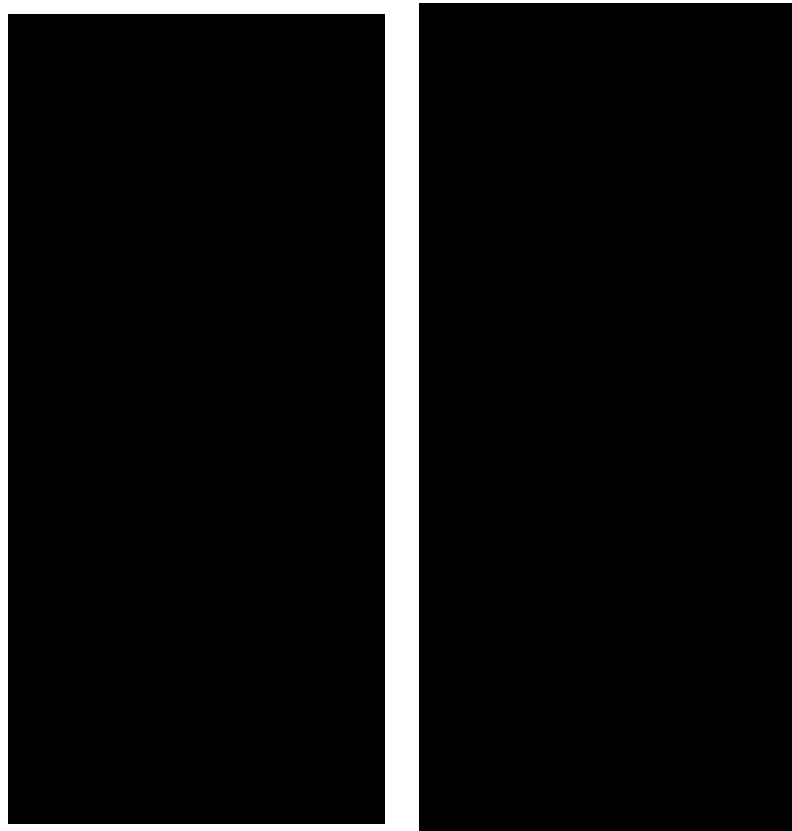


頭頂より



像底

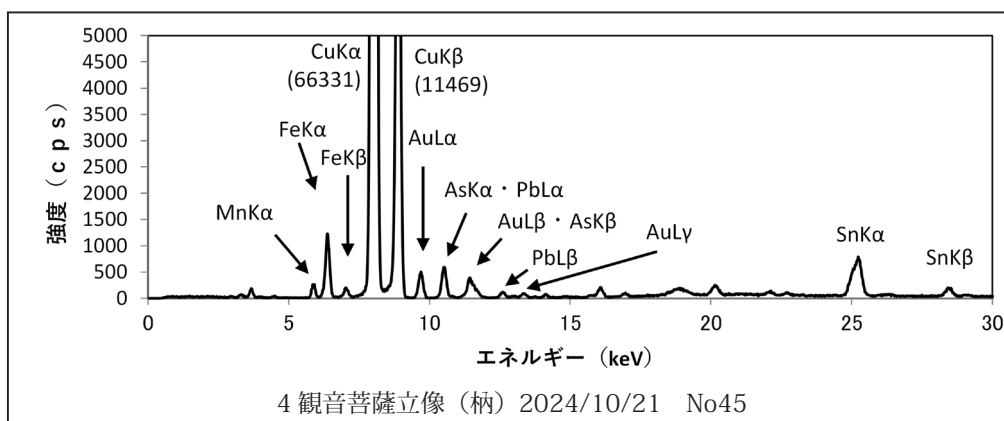
## 成分分析位置



## 成分分析結果

測定日	No.	測定箇所	Au	Hg	Cu	Sn	Pb	As	Fe	Mn	Sb	Zn	Ag	Bi	Ti	Ni	V
2014/7/11	11	左頬	0.00	0.00	89.91	2.32	0.27	0.97	0.54	0.15	0.00	0.32	5.20	0.18	0.14	0.00	0.00
2024/10/21	45	柄正面右寄り	0.00	0.00	92.29	3.44	0.58	1.16	1.47	0.45	0.00	0.24	0.00	0.15	0.22	0.00	0.00
2024/10/21	53	右冠繒欠損部	0.00	0.00	93.94	3.40	0.46	1.35	0.42	0.04	0.00	0.00	0.00	0.40	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	54	右冠繒欠損部	0.00	0.00	92.53	3.88	0.48	1.57	0.97	0.15	0.00	0.00	0.00	0.41	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	55	左冠繒欠損部	0.00	0.00	88.25	3.19	0.80	1.27	2.79	0.37	0.00	0.00	3.33	0.00	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	57	柄先端	0.00	0.00	83.18	6.32	1.82	1.40	4.22	1.49	0.00	0.78	0.00	0.00	0.65	0.00	0.00
2024/10/21	58	柄正面右寄り	0.00	0.00	88.58	4.42	0.77	1.19	3.31	0.55	0.00	0.60	0.00	0.00	0.50	0.00	0.00
【Average】地金			0.0	0.0	89.8	3.9	0.7	1.3	2.0	0.5	0.0	0.3	1.2	0.2	0.2	0.0	0.0
2014/7/11	5	柄正面	21.46	0.00	72.30	3.66	0.18	1.25	0.47	0.11	0.20	0.18	0.00	0.19	0.00	0.00	0.00
2014/7/11	9	蓮華座正面	43.61	0.00	50.65	3.12	0.17	0.41	0.39	0.12	0.18	0.00	1.08	0.16	0.12	0.00	0.00
2014/7/11	10	右前膊	27.67	0.00	63.58	3.13	0.67	0.76	1.24	0.34	0.15	0.59	0.76	0.80	0.22	0.06	0.05
2014/7/11	12	右頬	11.18	0.00	73.37	6.57	2.03	1.77	0.55	0.11	0.26	0.42	0.60	3.12	0.00	0.02	0.00
2014/7/11	13	腹部背面	19.05	0.00	74.61	3.30	0.24	0.97	0.12	0.00	0.19	0.39	0.45	0.68	0.00	0.00	0.00
2014/7/11	14	膝裏下方	37.20	0.00	57.64	3.05	0.13	0.41	0.27	0.02	0.16	0.00	0.81	0.22	0.08	0.00	0.00
2014/7/11	15	左頬	7.49	0.00	78.38	2.61	0.57	1.02	0.84	0.17	0.12	0.31	7.60	0.72	0.18	0.00	0.00
2014/7/11	16	左肘左側	24.43	0.00	68.11	3.23	0.41	0.77	0.79	0.28	0.16	0.50	0.61	0.47	0.21	0.03	0.00
2024/10/21	46	柄正面	18.82	0.00	74.24	3.85	0.14	1.52	0.66	0.11	0.19	0.26	0.00	0.21	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	47	左頬	5.35	0.00	86.35	2.44	0.28	1.08	0.56	0.11	0.00	0.00	3.66	0.18	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	48	右頬	5.35	0.00	85.93	3.76	0.79	1.79	0.52	0.07	0.00	0.38	0.00	1.42	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	49	蓮華座正面	40.20	0.00	55.09	3.31	0.12	0.37	0.14	0.00	0.00	0.00	0.77	0.00	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	50	臀部左寄り	33.46	0.00	61.59	3.03	0.08	0.44	0.21	0.00	0.00	0.46	0.72	0.00	0.00	0.00	0.00
【Average】Au 検出部			22.7	0.0	69.4	3.5	0.4	1.0	0.5	0.1	0.1	0.3	1.3	0.6	0.1	0.0	0.0

## 分析部位スペクトル



五  
◎菩薩立像(圖版)  
豐淨殿安置



全身正面



全身背面



全身右側面



全身左側面



全身右斜め



全身左斜め

## 五 ◎菩薩立像（解説）

銅造 一軀

### 〔法量〕

総高	七七・五	像高（現状）	五五・七	胸奥（左）	七・九
胸奥（右）	七・五	腹奥	一〇・一	肘張（現状）	一八・〇
足先開（内）	六・二	足先開（外）	一二・八	台座径	一八・一
台座高	四・二				

### 〔形状〕

現状、頭部を欠失し、右肘以下、左手首以下を亡失する。

垂髪が頸部上方の左右から両肩に垂れる。両肩では匙状の髪束が三段に重なり、それぞれに輪状および放射状の毛筋を刻み、さらにその外側に五条の波打つ髪束を広げる。頭髪には全体に毛筋彫りが施される。

左肩のみにかかるワシヨルダーの内衣を着け、裾を裾にたくしこむ。正面では左肩から腹部にかけて裳を作り、腹前にはたるみを表す。ただし、背面では上縁に三本の裳が平行に表され、あたかも条帛を着けているかのようなのである。

裾は、正面では両足間に衣角があり、右脚内で右前に打ち合わせているように見えるが、背面中央の上下にも二箇所の衣角があり、右脚裏で右前に打ち合わせており、矛盾が認められる。正面中央には階段状の折り畳みがあり、両膝以下にはU字形の衣文を密に重ね、背面には自在にJ字形の衣文を表す。裾が長く、足の甲や蓮肉上面にかかる。上端を折り返し、正面やや左寄り打ち合わせると見られるが、折り返し部には衣文を表さない。裾の衣縁には陰刻一条を施す。また、裾部と折り返しの裾部には二重の陰刻線で帯状区画を設け、前者には大ぶりの魚々子地に半パルメットの波状唐草を陰刻し、後者には大ぶりの魚々子散らし文を施す。なお、右脛部には、帯状区画の上部にさらに幅広の区画を設けて縦に陰刻線を連ねている。

天衣は、両肩から上膊にかけてかかり、背面では腰後ろまでU字を描き、正面では左肩分は腹前をわたって右前膊内側にいたり、右肩分は右肘内にいたる。ま

た、これとは別に、膝上を翻転してわたる天衣があり、一端は右腰脇で腰飾りの下層にいたり、一端は左肘にかかる。右肘から体側に垂下する天衣が表され、先端を右足で踏み、左肘から体側に垂下する天衣は亡失するが、先端は左足で踏んでいる。

両肩の垂髪上に十二弁の座金をともなう饅頭形の大珠を表す（大珠の底部に1mmほどの立ち上がりがある）。座金の前方に別製の瓔珞を取り付けていたとみられる柄受けを設けており、右肩に垂れる垂髪前縁には瓔珞（連珠・紐・連珠）の一端が残存する。腹部に大きな円形飾り（内側から円相・紐二条・連珠・蔽手文）を付ける。その円形飾りには五方（上方の左右、下方の左右および下方）に半円形の突起があり、それぞれに柄受けを穿ち、別製の瓔珞を取り付けていたとみられる。また、左膝外に中央に円孔がある割損した花形の飾り、右膝上外側と右体側に垂下する天衣内側に破断面（両者の間に花形の飾りがあったか）、背面腰上に柄孔がある。両腰脇から腹部下方をわたる豪華な腰飾りを付ける。腰飾りは幅広く、単弁の列弁・紐一条・長円（中央のみ二連珠）を二重線で括る区画・紐一条・単弁の列弁とする帯に六個の垂飾（二連の連珠の先端に小珠・連珠・大珠ないし未敷蓮形を表す）付きの花形（内側から円相・紐一条・連珠・九ないし十弁の単弁）を等間隔に配している。臂釧は単弁の列弁・紐二条・単弁の列弁とし、外側に花形（内側から円相・紐一条・九ないし十弁の単弁）を配す。

左手はほぼ垂下し、手首にT字形の柄受けを設ける。右手は屈臂していたとみられ、肘先に方形の柄受けを設けている。腰を右に捻り、左足をやや外に開いて蓮肉上に立つ。足の爪を表し、爪先の肉付きがよく、爪より高く盛り上がる。

蓮肉はわずかに甲盛りで、上面に蓮実（宝珠形の中に小円文）を密に陰刻する。側面は約四十五度の角度に立ち上がり、正面から両側面にかけて薬を陰刻する。

### 〔品質構造〕

青銅製。

残存する後頭部、頸部から蓮肉までのほぼ全容を、おそらく蠟型原型により一鑄とする。蓮肉から像内に中型を設ける。現在、脛あたりまで中空で、その上部には中型土がつまる。頸部には断面楕円形の中型を設けていたが、鑄バリが生じて前方が塞がり、内部には中型土がつまる。残存する後頭部内は匙面をとり、頭

部まで中型が通じていたことがわかる。現状、頭部の中型土は残存しない。蓮肉左前から左足甲にかけてと左脛に鑄懸けをほどこす（像内に鑄銕状の隆起あり）。頸部前方に鑄バリがあり、脚部下方の前面に鑄懸けがあることから、正面を上にして鑄込みが行われた可能性がある。なお、蓮肉左前の鑄懸け部は鑿の陰刻がずれていることから、陰刻は原型段階でほどこされていたとみられる。右手首以下、左肘以下（それぞれ天衣の一端を含む）はもとより別鑄とし、右手先はT字形、左前膊は方形の柄を作り出し、本体に継いでいたとみられる。また、背面にU字に垂れる天衣の下半（肘上以下）は銅板製で、雇い柄を作り出し、かつ鑿でたいてかきめ留めている。なお、右肘から垂下する天衣の上端が破断し、左肩から垂れる天衣の途中や腹部左上の内衣に亀裂が生じているのは湯境が生じたためと思われる。頸部、右肘などの破断面をみると鬆が多いことがわかる。その他、両足首間や右体側に垂下する天衣の下方に亀裂が走り、何らかの鑄物欠陥があったとみられる。

蛍光X線分析の結果、本体で金が検出されない測定箇所定量値の平均は、銅九七・二%、砒素一・二%、鉄〇・八%、ビスマス〇・三%、鉛〇・二%、錫、マンガ、亜鉛各〇・一%であった。一方、別製の背面天衣下半の定量値の平均は、銅九九・一%、砒素、鉄各〇・四%、マンガ、マンガン〇・一%で、ほぼ純銅である<sup>1)</sup>。よってこの天衣下半は銅板鍛造である可能性が高い。接続部が拙劣なため、当初からの仕様と断定はできないが、一鑄で作るのも困難であり、背面ゆえに許容されたのかも知れない。左腹前や左右の臂釧などでは金が検出され、本来鍍金がほどこされていたとみられるが、水銀は検出されず、アマルガム鍍金であったか否かは蛍光X線分析からは判別できない。また、金が検出される部位では銀があわせて検出されるため、金の純度が高くないのかも知れない。

(1) 定性値（スペクトル）を見ると、鉛と錫も微量に含まれている可能性がある。

#### 〔伝来〕

戦前に盗難に遭い、その際に頭部が欠損、紛失した。盗難前の古写真があり、それ以前より石山寺に伝来したことがわかる。

明治三十七年二月国指定。明治四〇年修理。

#### 〔保存状態〕

頭部、左前膊から体側に垂下する天衣を欠失し、左手首以下、右肘以下、胸飾および瓔珞の大半、反花以下の台座、光背を亡失する。表面がやや荒れ、火中したとみられるが、各部の欠失や亡失、右肘から垂下する天衣上端や脚部下方の亀裂は火中が原因となった可能性がある。木製の反花座は後補。

#### 〔時代〕

飛鳥時代（七世紀末～八世紀初め）

#### 〔考察〕

盗難前の古写真によれば、頭部の形状は以下のとおりである。髻は先端が三つ又に分かれて後方になびき、元結は紐二条・単弁の列弁とする。髻には毛筋彫りがほどこされる。天冠は基部を紐二条とし、両端に結び目がある。正面から側面にかけて大小五つの花形飾りを配し、それぞれを花綱で繋ぐ、いわゆるグプタ式宝冠である。正面の花形（内側から円相・紐一条・連珠・単弁の花弁・蔽手文）がもつとも大きく、その上に小さな花形（内側から円相・紐一条・連珠）を重ね、小さな花形の下方左右、上方に蔽手状の放光を表す。両側面の花形（内側から円相・紐一条・連珠・単弁の花弁・蔽手文）はやや小振り、上部に大きな蔽手状の突起を設ける。正面と両側面の中間の花形（円相・紐一条・連珠・蔽手文）はもつとも小さく、蔽手文の上部がとがり、全体として宝珠形を呈する。五つの花形の中心からは垂飾が垂れる。花綱は両端に萼があり、各花形の中央から伸びる紐一条で吊る。正面の地髪は束ね目と毛筋を陰刻で表す。耳朶は滴形に穿つが不貫とみられる。頸部には亀裂が走る。髻や宝冠は、隋～初唐の菩薩像にしばしばみられる形式である（開皇一六年へ五九六）銘菩薩立像やメトロポリタン美術館像 [ACC: 29.100.32a,b]、ボストン美術館像 [ACC: 15.254] など）。一方、全体に明快な輪郭をしめす顔立ち、大きく弧を描く眉や上脛が弧を描き、下脛を直線的に表す目などは、興福寺（旧山田寺）仏頭に近い印象を受ける。興福寺仏頭は隋時代の制作とみられる西安碑林博物館の黄花石（大理石）製の交脚菩薩坐像の相貌に類似することが指摘されており、要するに相貌については隋代の様式にならうものとみられる。



古写真 石山寺蔵

形状の項に記した瓔珞の痕跡を勘案すると、亡失した瓔珞は両肩の大珠から腹部の円形飾りに垂れ、腹部の円形飾りから膝外の花形にいたり、さらに腰上の柄孔に挿した飾りにいたり、また腹部の円形飾りからは真下に垂れる垂飾があつたと想定できる。なお、胸飾もあつたに違いないが、両肩の座金上の珠飾りの底部に立ち上がりがあることから、そこに別製（銅板製か）の胸飾の両端がとりつけられていたのかも知れない。いずれにしても、こうした豪華な瓔珞も随々初唐の菩薩像に顕著にみられる特徴である。

本像は腰を右に捻り、上半身を左に傾け、左肩を大きく張り出すが、そうした体勢は西安の大雁塔大唐三藏聖教序碑（永徽四年（六五三））の浮彫仏五尊像の脇侍菩薩立像など初唐期の作例に通じる。側面観に注目すると、体奥が薄く、腰を迫りだしてくの字を呈するが、それも随々初唐の作とみられるメトロポリタン美術館像やミネアポリス美術館像（ACC: 18.5）などに類似する。

以上、本像は随々初唐様式の影響が濃厚である。ただし、薬師寺金堂薬師三尊脇侍菩薩立像や同寺東院堂聖観音菩薩立像、あるいは滋賀・眞光寺観音菩薩立像など奈良時代初期の作例に比べると、特にプロポーションが相違し、飛鳥時代の作例に多いワンショルダーの内衣を着ける点など本像の古様さが際立つ。興福寺仏頭と類似する点にも鑑み、飛鳥時代末期、七世紀末から八世紀初頭の制作と考へたい。

（藤岡・中田）

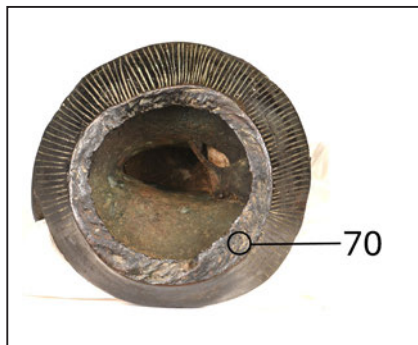
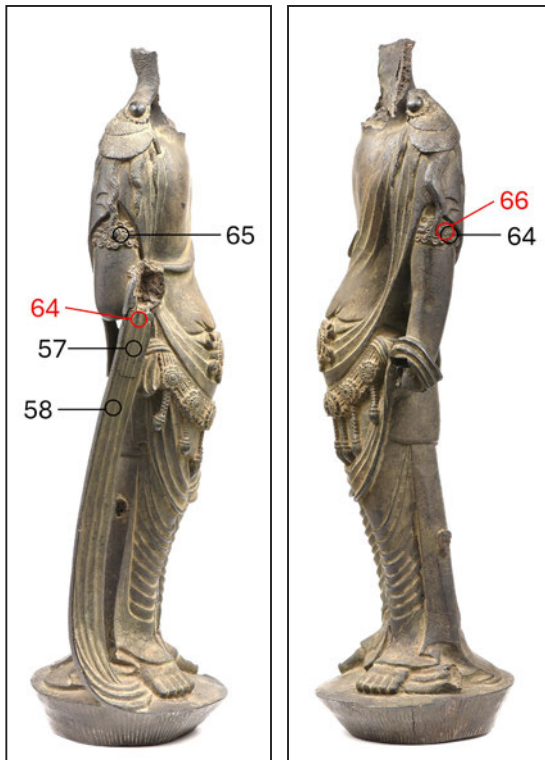
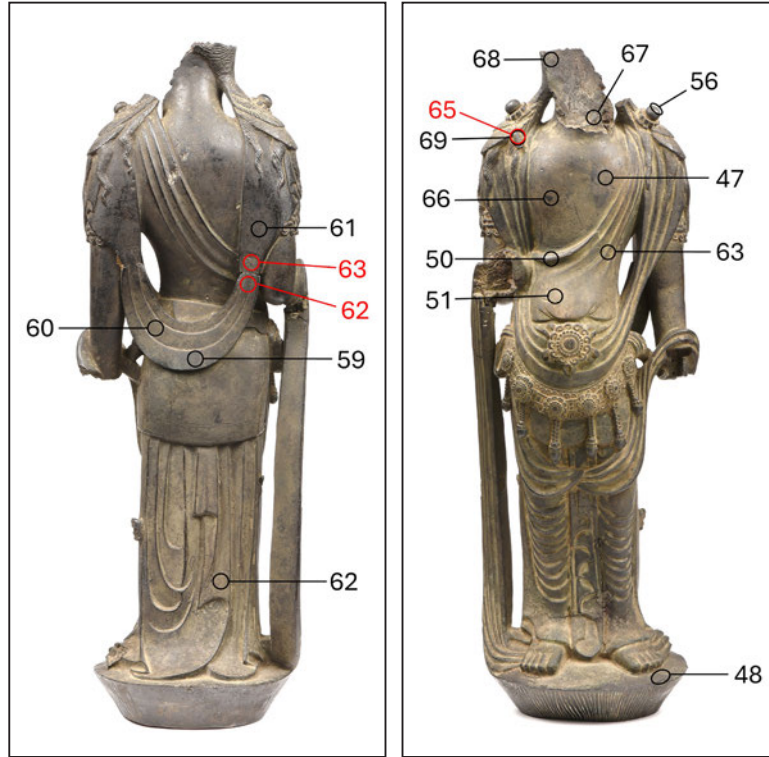


頭頂より



像底

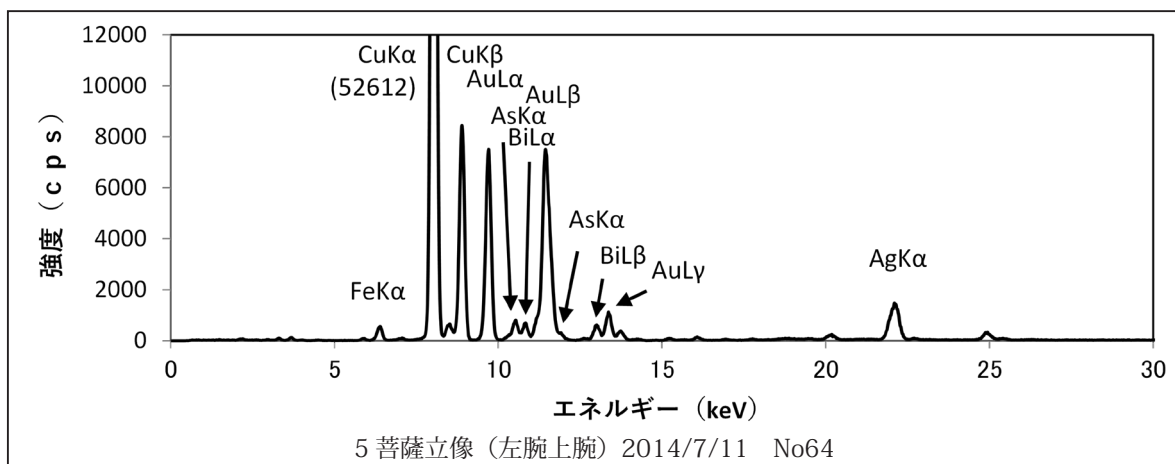
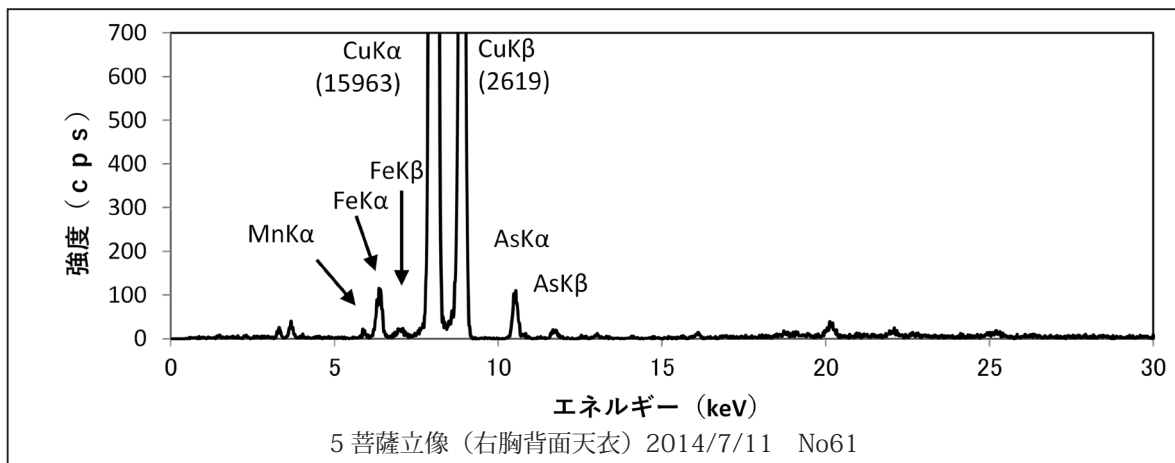
### 成分分析位置



## 成分分析結果

測定日	No.	測定箇所	Au	Hg	Cu	Sn	Pb	As	Fe	Mn	Zn	Ag	Bi	Ti	Ni
2014/7/11	47	左胸	0.00	0.00	96.61	0.25	0.05	1.09	1.52	0.03	0.32	0.00	0.14	0.00	0.00
2014/7/11	48	左足先蓮肉	0.00	0.00	98.30	0.17	0.08	1.11	0.21	0.00	0.00	0.00	0.14	0.00	0.00
2014/7/11	50	內衣上縁	0.00	0.00	96.61	0.00	0.32	1.45	1.10	0.09	0.30	0.00	0.13	0.00	0.00
2014/7/11	51	腹部	0.00	0.00	96.93	0.00	0.26	1.09	1.26	0.09	0.37	0.00	0.00	0.00	0.00
2014/7/11	56	左肩髪飾り	0.00	0.00	98.74	0.00	0.16	0.71	0.14	0.00	0.26	0.00	0.00	0.00	0.00
2014/7/11	57	天衣前膊下方	0.00	0.00	97.82	0.00	0.28	0.95	0.61	0.04	0.00	0.00	0.30	0.00	0.00
2014/7/11	58	天衣右腰辺	0.00	0.00	98.32	0.00	0.07	1.08	0.53	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
2014/7/11	61	右胸背面天衣	0.00	0.00	97.60	0.19	0.08	1.15	0.47	0.09	0.26	0.00	0.16	0.00	0.00
2014/7/11	62	背面裾下方	0.00	0.00	98.26	0.00	0.05	1.15	0.40	0.14	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
2014/7/11	66	右胸	0.00	0.00	97.79	0.25	0.06	1.25	0.61	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
2014/7/11	67	頸部中の突起	0.00	0.00	97.13	0.25	0.17	1.48	0.43	0.00	0.00	0.00	0.54	0.00	0.00
2014/7/11	68	頸部断面	0.00	0.00	95.99	0.00	0.17	2.12	0.85	0.00	0.00	0.00	0.87	0.00	0.00
2014/7/11	69	右肩瓔珞	0.00	0.00	95.23	0.00	0.29	1.07	2.07	0.27	0.00	0.00	1.06	0.00	0.00
2014/7/11	70	台座底面左後ろ	0.00	0.00	95.70	0.20	0.15	1.75	0.98	0.06	0.22	0.00	0.77	0.16	0.00
2024/10/21	64	天衣右前膊直下	0.00	0.00	97.56	0.00	0.34	1.09	0.61	0.06	0.00	0.00	0.34	0.00	0.00
		【Average】地金	0.0	0.0	97.2	0.1	0.2	1.2	0.8	0.1	0.1	0.0	0.3	0.0	0.0
2014/7/11	59	天衣臀部	0.00	0.00	99.24	0.00	0.04	0.29	0.33	0.10	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
2014/7/11	60	天衣臀部左方	0.00	0.00	99.00	0.00	0.00	0.37	0.53	0.10	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	62	天衣右腰背面	0.00	0.00	99.07	0.00	0.06	0.38	0.38	0.11	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	63	天衣右腰背面	0.00	0.00	98.94	0.00	0.06	0.57	0.34	0.08	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
		【Average】天衣背面遊離部	0.0	0.0	99.1	0.0	0.0	0.4	0.4	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
2014/7/11	63	左腹前の湯境下方	25.76	0.00	68.21	0.08	0.21	0.69	1.16	0.11	0.55	1.22	1.72	0.19	0.09
2014/7/11	64	左臂釧装飾部	30.84	0.00	61.26	0.00	0.17	0.91	0.92	0.19	0.55	3.27	1.62	0.17	0.10
2014/7/11	65	右臂釧装飾部	23.47	0.00	68.18	0.11	0.38	0.67	1.08	0.12	0.51	2.84	2.56	0.00	0.08
2024/10/21	65	右肩瓔珞	8.38	0.00	87.56	0.00	0.17	0.88	1.42	0.21	0.48	0.91	0.00	0.00	0.00
2024/10/21	66	左上膊	12.16	0.00	79.79	0.00	0.26	1.61	0.97	0.21	0.43	1.67	2.86	0.00	0.05
		【Average】Au 検出部	20.1	0.0	73.0	0.0	0.2	1.0	1.1	0.2	0.5	2.0	1.8	0.1	0.1

## 分析部位スペクトル





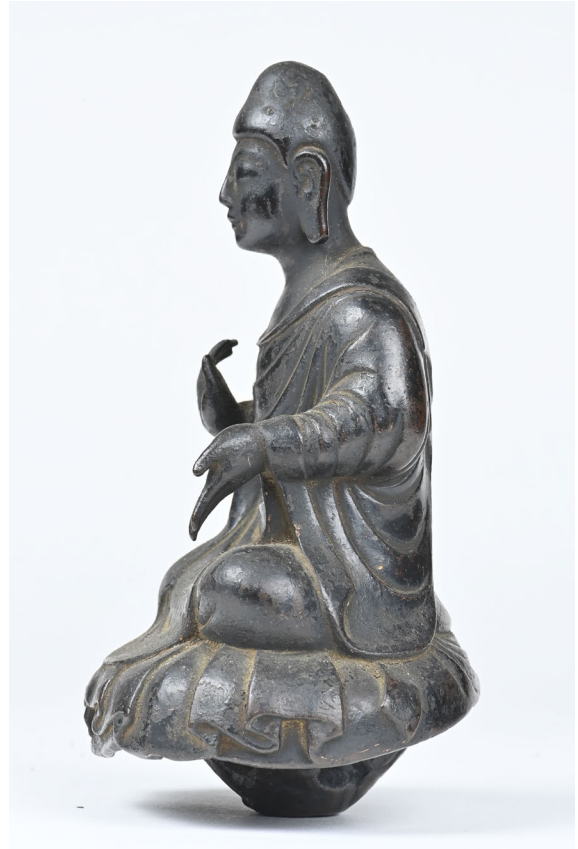
全身正面



頭部正面



全身右側面



全身左側面



全身背面



全身左斜め



頭部右側面



頭部左側面



頭部右斜め



頭部左斜め

## 六 ◎ 釈迦如来坐像 (解説)

銅造 一軀

### 〔法量〕

総	高一三・九	像	高	四八・九	髪際高	九・二	
頂	顎	三・六	面	長	二・〇	面幅	二・〇
耳	張	二・八	面	奥	二・六	胸奥(左)	二・八
胸奥(右)	三・〇	腹	奥	三・三	肘	張	六・六
膝	張	八・〇	坐	奥	五・三	膝高(左)	一・八
膝高(右)	一・八	裳先	奥	七・三	裳裾張	九・六	

### 〔形状〕

肉髻を表すが、地髪からなだらかに立ち上がり、地髪と肉髻の境目を明瞭に表さない。頭髪は素髪とする。両耳はやや前方を向き、耳朵不貫。白毫は表さず、三道も刻まない。後頭部に方形の浅い柄孔を穿つ。

大衣を通肩に着ける。正面では大衣の裾が脚部の半ばを大きく覆って台座に垂れ、末端を左肩から左体側にかける。右膝を覆うのは大衣で、左膝を覆う衣は大衣の一周目、裙の両方の可能性がある。左手は屈臂し、左腹脇で与願印を結び(全指を伸ばす)、右手は屈臂し、右胸脇で施無畏印を結ぶ(全指を伸ばす)。火中の際のダメージによるものか、右手の指が大きく後方に反る。

台座は楕円の盤を伏せたような形状で全体に布がかかる。布は正面から側面にかけて襞をたたみ、背面には下向きに同心円状の衣文を刻む。懸裳とみるにはやや不自然で、別の布かと思われる。台座底部には前後左右に四脚状に棧を渡し、中央に円孔を開ける。

### 〔品質構造〕

青銅製。

頭頂から台座までを一鑄とする。ただし、台座底部の四脚状の棧は別製でかじめ留められているとみられる。中央の円孔は、これを支持する金具の挿したものと

想像される。背面中央に方形の嵌金がある。

蛍光X線分析の結果、本体および台座底部の棧の定量値の平均は、銅九四・三%、砒素三・四%、錫〇・九%、アンチモン〇・五%、鉛、ビスマス各〇・三%、鉄、亜鉛各〇・二%で、金は検出されなかった。また、背面の嵌金の定量値は、銅九九・九六%で、鉄がわずかに〇・〇四%であった。

### 〔伝来〕

不詳。明治三十七年二月国指定。

### 〔保存状態〕

火中の際のダメージによるものか、右手の指先が後方に反る。

### 〔時代〕

奈良時代(八世紀)

### 〔考察〕

肉髻と頭部がなだらかに連続する頭部の形状は、飛鳥時代の作例としては石川・薬師寺の仏三尊像の中尊が想起されるが、鞍馬寺経塚出土の仏三尊像の中尊など、むしろ平安時代、一〇世紀末から一一世紀前半頃の作例により近い。通肩は、中国では初唐、七世紀第四四半期頃から流行したことが知られ、朝鮮半島では新羅の作例に多くみられる。日本ではあまり受容されなかったが、石川・薬師寺像は胸前を広く開けながらも大衣を通肩に着けている。布をかけた盤を伏せたような台座の形状、底部に四脚状の棧を渡すのは他に類例がない。四脚状の棧は、中央に円孔があつてここに支持する金具の柄を挿していたとすれば、本像はたとえば光背の化仏として制作されたものかも知れない。脚部中央を大衣で覆い、両足先を見せないのも拱手する化仏の姿に通じている。両目は眼剣裂を刻まず、ふくらみだけで表すが、そうした特徴は奈良・岡寺半跏思惟像や福井・正法寺半跏思惟像など、奈良時代、八世紀初期の作例に認められる。

本体の青銅の組成は古代の金銅仏として問題ない。嵌金の銅の純度が高いが、奈良時代初期の作とみられる福井・正法寺半跏思惟像の嵌金は同様の純度であり、



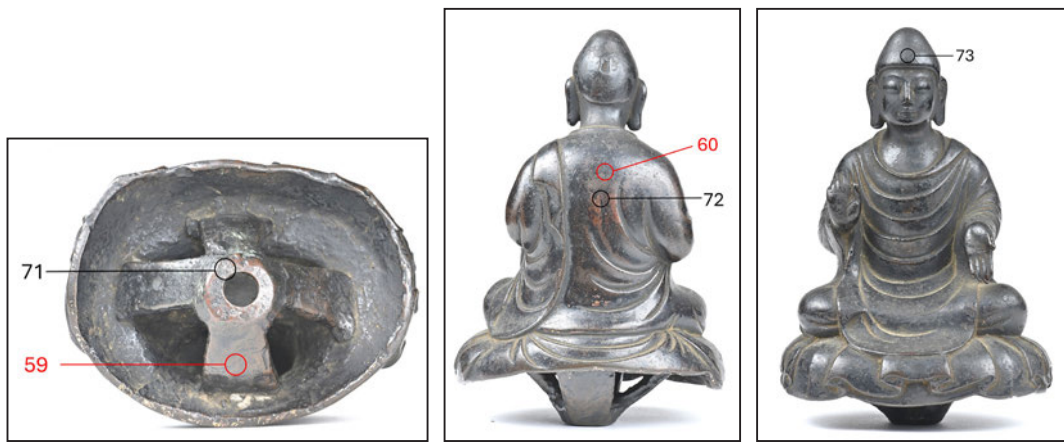
像底

これも古代の金銅仏として問題はない。火中による損傷が大きくないにもかかわらず、鍍金がまったく確認できないのはやや不審で、もとより鍍金がほどこされていなかった可能性も考えられる。

制作年代については様式や形式からは容易に判断できないが、本体ならびに嵌金の組成が福井・正法寺像に近いことに注目すると、本像の制作も奈良時代前半とみることができると思われる。

(藤岡・中田)

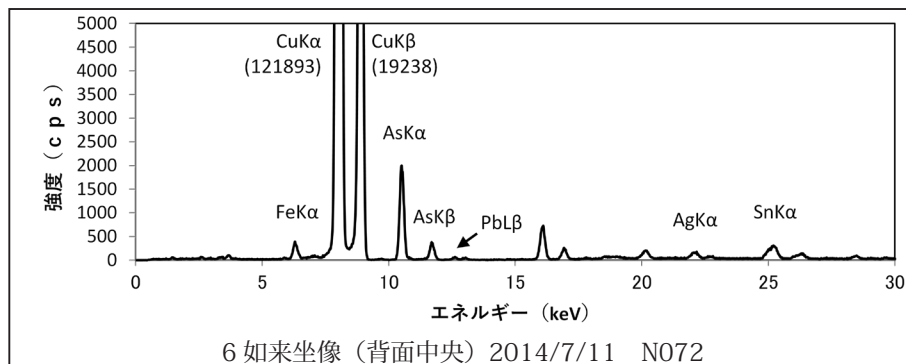
### 成分分析位置



### 成分分析結果

測定日	No.	測定箇所	Au	Hg	Cu	Sn	Pb	As	Fe	Mn	Sb	Zn	Bi
2014/7/11	71	像底の帯中央	0.00	0.00	94.21	0.79	0.26	3.64	0.15	0.03	0.48	0.20	0.25
2014/7/11	72	背中	0.00	0.00	95.20	0.80	0.17	3.00	0.10	0.02	0.38	0.22	0.11
2014/7/11	73	正面地髪	0.00	0.00	92.94	1.02	0.60	3.80	0.26	0.13	0.52	0.26	0.47
2024/10/21	59	像底の帯下方	0.00	0.00	94.73	0.88	0.33	3.29	0.11	0.00	0.44	0.00	0.22
【Average】 本体地金			0.0	0.0	94.3	0.9	0.3	3.4	0.2	0.0	0.5	0.2	0.3
2024/10/21	60	背面嵌金	0.00	0.00	99.96	0.00	0.00	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.00

### 分析部位スペクトル





全身正面



全身左斜め



全身左側面



全身背面



全身右側面



全身右斜め

## 七 ◎金剛藏王心木（解説）

### 本堂安置

木造 一軀

#### 〔法量〕

総 高一七三・〇 像 高一五九・〇 胸 奥 一三・四  
腹 奥 一六・七 肘 張 八三・〇

#### 〔形状〕

右腕を屈臂して拳を挙げ、左腕は体側へ突き出す。右足を蹴り上げ、左足で井桁状に組んだ台座上に立つ。

#### 〔品質構造〕

針葉樹（本体はヒノキ、台座はマツか）、素地。

体幹部材は左右二材とし、胸より下にマチ材を一、腰より下に二入れる。裾の垂下部を背面に取りつけ、左体幹部材との間にマチ材を一入れる。左腕部は体部と丸い雇柄で、右腕部は体部に挿し込んでそれぞれ緊結し、上膊と前膊は三枚接ぎで接合する。右脚部は体部に挿し込んで緊結し、膝部は三枚接ぎ、足先は柄差して接合する。台座は井桁状に角材四材を組み、それに横架材一材を渡す。

#### 〔伝来〕

石山寺本堂に安置。平成一四年の塑造金剛藏王立像の保存修復に際し、像内より抽出された。平成一六年六月国指定。塑像断片、光背、心木納入品（木造五輪塔形、木造舍利容器、紙本墨書般若心経）、以上附指定。

#### 〔保存状態〕

左前膊以下亡失。右足先については後補の可能性がある。

#### 〔時代〕

奈良時代（八世紀）

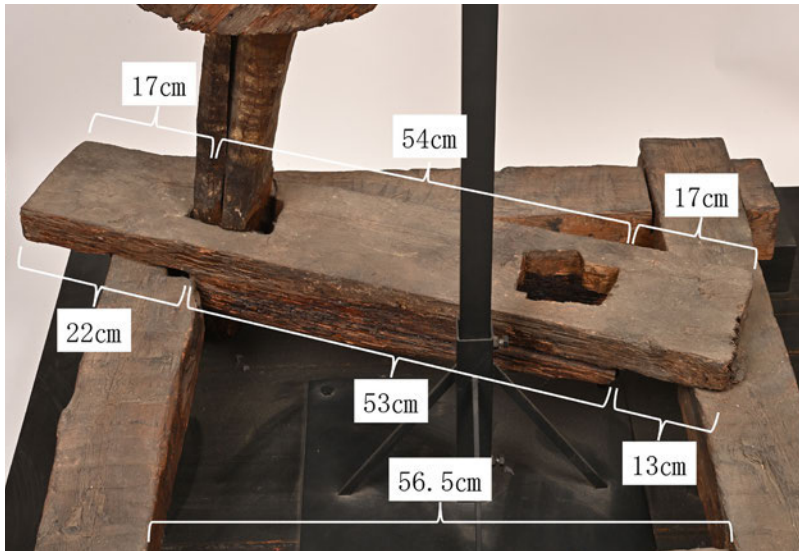
#### 〔考察〕

本像は、天平宝字期に造営され、正倉院文書に「神王」と記される本尊脇侍の造形を伝えるものとして重要である。正倉院文書からは「神王」を造り始めた時期を正確に知ることはできないが、天平宝字六年（七六二）六月一八〜二一日には「神王」のための筋鉄九条が造られており、遅くともこの頃には心木の概形は出来上がっていたと推測される。同七月五日には台座の塑形が、同八月十二日には彩色が終了している。正倉院文書では、石山寺本尊三尊像の尊格を、中尊を「観音」、両脇侍を「神王」と記すが、遅くとも平安時代（一〇世紀）以降には、それぞれ「如意輪観音」「執金剛神」「金剛藏王」と認識され、現在の名称はこの認識に基づく。

本像は、右足を大きく蹴り上げる点が特徴的であるが、この体勢が当初からのものなのか議論がある。井桁状に組んだ台座に渡された横架材には、右側に使われていない孔があり、一見すると、当初使用されていた右足の柄穴のようにも思われるためである。これまでは、①右足を後補とし、当初は右足を地に付けていたとする見方<sup>①</sup>、②右足は後補だが、横架材の右孔の位置が、心木体幹部の向きからすると後ろすぎるため、当初より蹴り上げていたとする見方<sup>②</sup>、③右足を当初とする見方<sup>③</sup>が挙げられている。③の見方を示した伊東史朗氏は、当初より右孔を使わない方針だったが、体部右腰下に荒く削り取った痕跡があることから、右足の出は下向きで、あまり高く上げない設計だったと推定し、制作途中で右足を高く上げるように改変したとする。また、右腰下に心木が通り、現状の蹴り上げる右足大腿部にも心木があるため、共木だった体部と右足を切断し、蹴り上げるかたちに付け替えた可能性を示している<sup>④</sup>。

以上を念頭に、蹴り上げた右足の保存状態を検討してみよう。伊東氏が指摘したように、心木を含み、体部と同様の材に見える。また、関節の接合を三枚組接ぎとする技法（六三頁・左上写真）については、奈良・唐招提寺菩薩形立像（伝宝生如来立像）や奈良・秋篠寺脱活乾漆像心木などに認められ、奈良時代の仕口として相応しい。足先のみ後補に替わっている可能性も残るが、少なくとも現状の右足全体が後補ということは考えにくい。

ここで問題となるのが、右孔の存在である。伊東氏は右孔を当初より使用しな



挿図 台座の法量（後方から）

い方針だったとするが、やはり何らかの目的を持った工作とすべきであろう。現状では、横架材の右側に比して、左側の方が井桁状の台座から大きく飛び出している。しかし、横架材下面の切り欠きをみると、右側では井桁との間に大きく隙間が空くのに対し、左側では横架材の切り欠きに合わせるために井桁の方を逆に削り込んである。したがって、制作開始時には、横架材は現状より右寄りに渡されてきたとするのが自然ではなからうか。また、現状の角度で斜めに横架材を井桁に載せるには、左右の切り欠きの幅が大きすぎる（左側一七〇二センチメートル、右側一三〇一七センチメートル）。切り欠きを除いた横架材下面の長さは五三〇五センチメートルであり、井桁状台座の左右材の間の距離（五六・五センチメートル）におおよそ適合することからすれば（各法量は挿図参照）、横架材は、井桁に対してより平行に配置されていたのであろう。

とすれば、制作開始時には、横架材が右寄りに、かつ井桁に対して平行に渡されるのに合わせて、像本体も正面に向くよう時計回りに回転していたと推定できる。この配置であれば、右孔は右足の柄を受けるために設けられたものとして相応しく、本像は制作開始時には両足を地に付くように設計されていたように思われる。

これを補強するのが、

裳裾の材の造形である。現状、裳裾は臀部に斜め向きに取り付けられるが、臀部との接合面には衣文が粗く彫り出されている。この衣文は、現状では接合面に重なっており、用をなしていないため、制作の初期段階ではより下部に、地面に対して垂直に近い角度で取り付けられていたと思われる。下向きに垂下する裳裾の形状は、右足を大きく蹴り上げる体勢ではなく、両足を地に着く体勢の方により適合している。

以上を要するに、本像は、両足を地に着く姿で制作が始められたが、途中で計画が変更され、右足を大きく蹴り上げる姿で完成された、という流れが想定できる。このような大きな変更は、石山寺造営における良弁の主導的立場を踏まえれば、直接的には良弁の指示と考えられ、造形の淵源や思想的背景も良弁周辺に求められるだろう。変更の時期や背景については、今後の課題としたい。

- (1) 紺野敏文『藏王権現』の出現（『古代文化』五七（七）、二〇〇五）、吉川聡『執金剛神から藏王権現へ―天神信仰に及ぶ―』（栄原永遠男・佐藤信・吉川真司編『東大寺の美術と考古』法蔵館、二〇一六）。
- (2) 藤岡稜『藏王権現―その成立と展開―』（『増補吉野町史』二〇〇四、同『東アジア仏像史論』中央公論美術出版、二〇二二）改題のうえ再録、石川知彦『大峯山で祀られた尊像―如意輪観音三尊像をめぐって―』（『山岳修験』五二（二〇二二））。
- (3) 伊東史朗『金剛蔵王と藏王権現』（同『神像の研究』思文閣出版、二〇二二）。
- (4) 『月刊文化財』（四八九、二〇〇四）の重要文化財指定解説において、体部材と蹴り上げる右足の材が共木である可能性が言及されている。しかし、指定解説では右足を蹴り上げる姿態が当初からのものか否かは、判断を保留している。
- (5) このほか、奈良時代の例として唐招提寺金堂千手観音立像の小脇手などがあり、京都・東寺西院御影堂不動明王坐像や滋賀・日吉神社千手観音立像といった九世紀の木彫像に引き継がれる。奥健夫『構造技法よりみた東寺講堂諸尊像』（同『仏教彫像の制作と受容―平安時代を中心に―』中央公論美術出版、二〇一九）参照。
- (6) 福山敏男『石山寺・保良宮と良弁』（同『寺院建築の研究』中、中央公論美術出版、一九八二）、鷲森浩幸『奈良時代における寺院造営と僧』（『ヒストリア』一一二、一九八八）、山下友美『石山寺造営機構の性格と展開』（『正倉院文書研究』一六、二〇一九）。

（柘植）



胸部 納入孔



体部右腰下



裳裾 (下側より)



裳裾 (左側より)



右脚部



左脚部



横架材右側の切り欠き



全身正面



頭部正面



全身右側面



全身左側面



全身背面



全身左斜め



頭部右側面



頭部左側面



頭部右斜め



頭部左斜め

## 八 ◎維摩居士坐像（解説）

### 豊浄殿安置

木造 彩色 彫眼 一軀

#### 〔法量〕

像	高	四八・九	面	幅	一〇・八	耳	張	一五・九
面	奥	一七・五	胸奥（左）	張	一九・二	胸奥（右）	張	一八・六
腹	奥	二一・八	肘	張	三四・七	膝	張	四二・五
坐	奥	三五・六	膝高（左）	九・〇	膝高（右）	七・一		

#### 〔形状〕

頭巾を被り、背面では衣縁が背中に及ぶ。髻の根本で頭巾の括りを表す。面貌は老相とし、正面を向いて閉口する。顎鬚を表す。筒袖衣、右衽の长袖衣、羽織状の衣、腰帯を着ける。筒袖衣は両手首に現れる。右衽の长袖衣は筒袖衣の上に着ける。羽織上の衣は両上膊から背面にかけてを覆う。腹部に腰帯の結び目を表し、末端を垂下する。両臂を脇息に置き、両手を胸の高さに掲げる。右手は掌を正面に向け、第二、三指を伸ばし、第一・四・五指を捻じて、いわゆる刀印とする。左手は掌を内に向け、全指を捻じ、かつては塵尾を執っていたものと考えられる。脇息に体を預け、趺坐する。

#### 〔口質構造〕

針葉樹（ヒノキか）、一木造、彩色、彫眼。

頭体幹部を通して豎一材より彫出し、木心を像のほぼ中央に籠める。像底より縦二四・五センチ、横二九・八センチ、深さ約一九・五センチの内割りを実施。地付部には底板（亡失）を嵌めるためと思われる、高さ約七ミリメートルの段を設け、七つの釘孔が残る（釘は亡失）。

彩色は、全面に白下地を施し、頭巾は緑色、肉身は肉色とする。白目は白色とし、目尻、目尻にそれぞれ朱を差す。筒袖衣は現状白色、大袖衣は代赭、羽織状の衣は緑色、腰帯は白色とする。脇息上面は朱地とし、文様は現状不明。脇息側面の正面は、白地に朱線を界線とする方形区画を設け、中央に緑青による花文を

各一表す。方形区画は、現状両袖の内側に四、外側に各一表す。脇息側面の両端は朱地とし、方形区画を各一表し、連珠文帯を配する。

#### 〔伝来〕

石山寺豊浄殿に安置。明治三十七年二月国指定。

#### 〔保存状態〕

右第二指先、大袖の両垂下部先端、背面に垂下する羽織上の衣の先端、以上欠失。持物、底板、脇息の肢、以上亡失。羽織状の衣に表された赤色の斑点状の文様、以上後補。

#### 〔時代〕

平安時代（九世紀）

#### 〔考察〕

本像は、頭部が大きくデフォルメされた寸の詰まった体型、深く鑄だった衣文などから、平安時代でも前期にさかのぼることが明らかである。従来の研究においても平安時代前期の作とされ、中でも九世紀に位置付けることが多かった<sup>(1)</sup>。また、近年では、東大寺弥勒仏坐像（通称「試みの大仏」、以下東大寺像）との類似を指摘するとともに、石山寺開創以来の東大寺との密接な関係をもとに、本像が石山寺に伝来したとの見方も提出されている<sup>(2)</sup>。

本像のプロポーシヨンや、整理の進んだ衣褶表現は、先行研究で指摘される通り、東大寺像によく通じ、制作年代の近しきを感じさせる。背中を丸め頭部を前方へ出す体勢は、先行研究で挙げられる東大寺像の他、奈良国立博物館薬師如来坐像など、九世紀前半の作例にしばしば見られるものである<sup>(3)</sup>。東大寺像は、九世紀も半ばに近づいた頃の制作とする見方が穏当と思われ、本像の制作も同時期にかかるものと考えることができよう。

日本に現存する維摩居士像のうち平安時代以前に遡るものは、本像のほか、和銅四年頃（七一）の奈良・法隆寺塔本四面具東面塑像、神護景雲元年（七六七）の奈良・頭塔東面浮彫、八世紀末の奈良・法華寺像、九世紀後半の滋賀・延暦寺

像（青龍寺伝来）が挙げられるのみであり、本像は貴重な作例である。刀印を結ぶ点において、本像は延暦寺像との共通性が認められる。

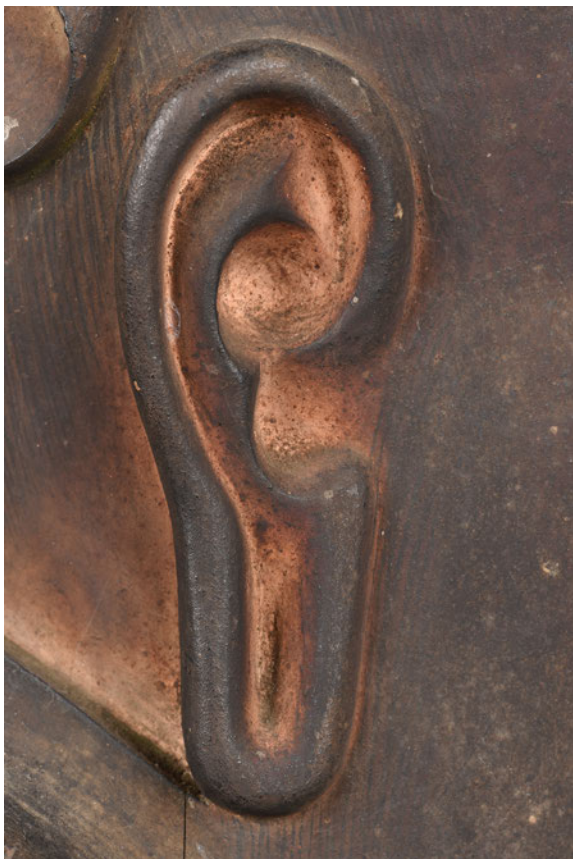
石窟壁画などに多くの維摩像が残る中国の作例へ眼を向けると、敦煌莫高窟第六一窟・第一三八窟など、晩唐から五代にかけての作例に、一方の手で刀印を結び、もう一方の手で塵尾を執る作例が認められる。本像の左手は、持物を支持するように全指を捻じることからすれば、中国の作例に見られるように、当初は塵尾を執っていたとするのが穏当であろう。

なお、刀印を結び、塵尾を執る維摩の図像は、中唐かそれをやや遡る時期に成立した規範的な図像に拠るものとした上で、石山寺像は平安初期に入って唐より伝えられた図像に基づく可能性が示されている。<sup>4)</sup>

東大寺の作例と特に類似することからすれば、東大寺との密接な関係を背景として、石山寺に伝来したとの説は魅力的ではある。とはいえ、伝来は詳らかではなく、本像の造像背景については不明とせざるを得ない。

- (1) 猪川和子『石山寺』（中央公論美術出版、一九七二）、榊原吉郎「石山寺の彫刻」（『佛教藝術』九四、一九七三）、野口武彦・鷲尾隆輝『古寺巡礼 近江二石山寺』（淡交社、一九八〇）、宮本忠雄「石山寺の仏像」（朝日新聞社『週刊朝日百科 日本の国宝七八石山寺』一九九八）、奈良国立博物館編『観音のみてら石山寺』（二〇〇二）、奈良国立博物館編『石山寺の美―観音・紫式部・源氏物語―』（石山寺、二〇〇八）
- (2) 瀬谷貴之『国宝クラス仏をさがせ!』（新潮社、二〇二四）
- (3) 奈良国立博物館像は、承和一年（八四四）の開眼と見られる京都・東寺講堂諸像との類似から九世紀中頃をやや遡る時期のものとする見方がある（奥健夫「東寺伝聖僧文殊像をめぐって」〈『美術史』一三四、一九九三〉。その他、弘仁年間（八一〇～八二四）まで年代を上げる見方もある（藤岡稔「様式からみた新薬師寺薬師如来像」（林温編『様式論―スタイルとモードの分析―仏教美術論集二』竹林舎、二〇二二、同『東アジア仏像史論』中央公論美術出版、二〇二二）再録）。
- (4) 奥健夫「延暦寺維摩居士像試考」（辻惟雄先生還暦記念会編『日本美術史の水脈』ベリかん社、一九九三）。なお、同論文においては、本像が、いずれかの寺院で行われた維摩会本尊として造立された可能性もあわせて提示している。

（柘植）



右耳 部分



像底



脇息 部分



左体側 部分



頭部左側面（赤外線写真）



頭部正面（赤外線写真）

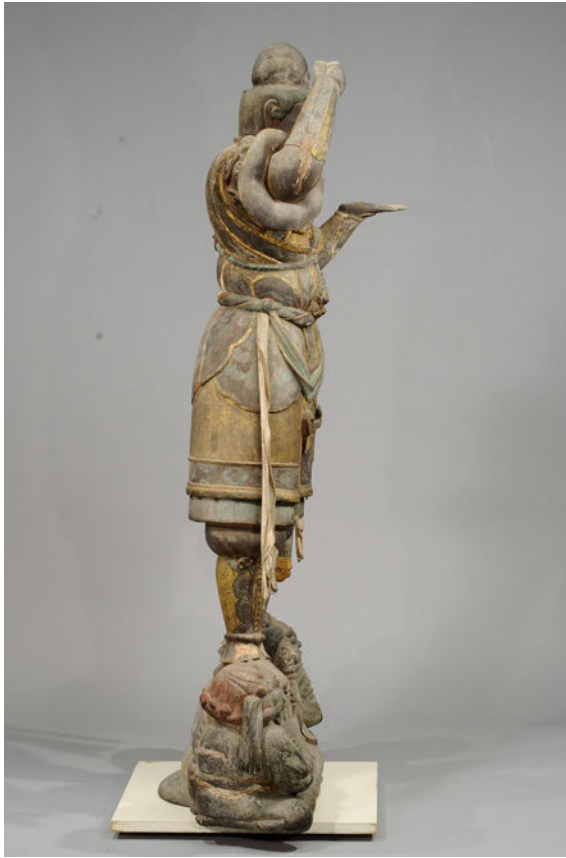
九  
◎兜跋毘沙門天立像（國版）  
毘沙門堂安置



全身正面



頭部正面



全身右側面



全身左側面



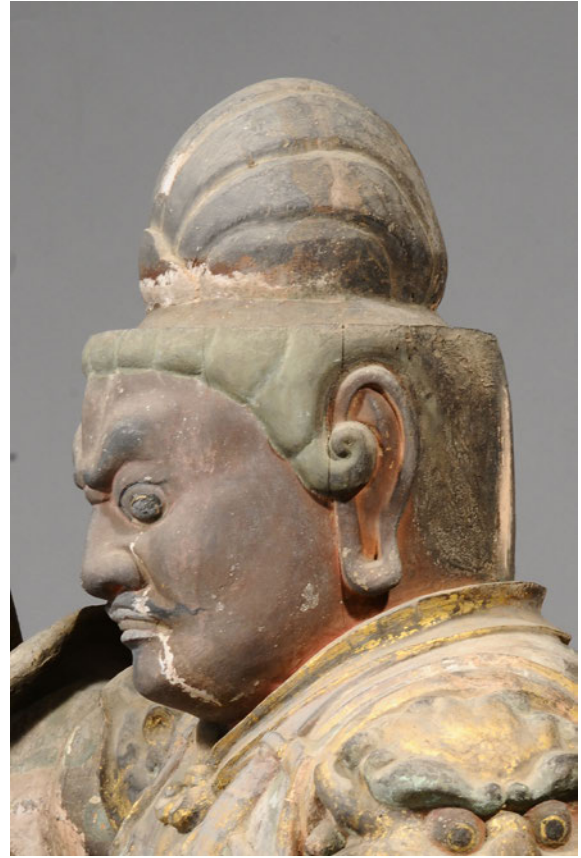
全身背面



全身左斜め



頭部右側面



頭部左側面



頭部右斜め



頭部左斜め

九 ◎兜跋毘沙門天立像（解説）

毘沙門堂安置

木造 彩色 彫眼 一軀

〔法量〕

毘沙門天		像		頂—顎	
総高	二〇三・〇	像高	一七二・五	耳張	二〇・五
面長	一七・六	面幅	一五・〇	胸輿(右)	二七・六
面輿	二二・六	胸輿(左)	二七・四	裾張	四八・五
腹輿	三〇・二	肘張	八四・五		
袖張	八三・五	裾開分	五三・六		
台座					
幅	一〇二・一	最大輿	四三・二		
地天					
像高	五〇・九	髮際高	四一・八	頂—顎	二二・四
面長	九・九	面幅	九・九	面輿	一七・六
胸輿(右)	二四・九	胸輿(左)	二五・一	腹輿	二六・八
肘張	三六・六	袖張	四五・〇	膝張	四五・四
膝輿(左)	九・三	膝輿(右)	一〇・四	最大輿	四三・二
左鬼					
像高	四一・九	髮際高	四〇・三	頂—顎	一八・一
面長	一四・九	面幅	一四・五	面輿	一九・一
胸輿(左)	二一・二	膝張	二一・三	坐輿	三五・九
膝輿(左)	七・五	膝輿(右)	八・二		
右鬼					
像高	四二・八	髮際高	四一・二	頂—顎	一七・九
面長	一三・三	面幅	一三・九	面輿	二一・八
胸輿(右)	一九・八	胸輿(左)	二〇・七	膝張	二三・〇
坐輿	三三・一	膝輿(左)	八・六	膝輿(右)	八・八

劍

長 九六・〇 最大幅 八・二

〔形状〕

毘沙門天

単髻を結び、三山型の元結飾りをつける。地髪部上部を水平に切り込み、段差を設ける。髻と地髪部段差以下の前頭部の頭髪はマバラ彫り、その他は平彫り。両耳前で鬢髪各一条が上方に巻きこむ。瞼目。開口し、上歯列を表す。筒袖衣と鱗袖衣をまとい、袴を履き、表甲、襟当、胸甲をつける。胸甲に獸面を彫出する。腰回りに前楯と三枚の腰甲をつける。表甲の合わせの下層に下前楯、その下層に右衽に打ち合わせる衣の裾を表す。肩に獅噛を表し、籠手をつける。各甲を甲縮具と腰帯で締め、腹部中央に腰帯を食む獅噛を表す。天衣は腰帯に結び付け、正面にU字形にわたす。脛当てをつけ、紐で括った袴の裾を内側にたくし込む。杵を履く。左手は屈臂し、宝塔を捧持する。右手は屈臂し、頭の高さで三叉戟を握る。左腰に劍を佩く。顔を正面に向け、左掌上の宝塔に視線を向け、腰を左に振り、両足先を外に向けて立つ。

地天

単髻を結び、元結紐一条で括り、半截花形の元結飾りをつける。髻に束ね目を彫る。その他は素髻。半眼閉口。胸飾りをつける。左衽に打ち合わせる鱗袖衣と雲肩をまとう。袴をつけるか。腰帯を締め、結び目を二つ作る。腕釧をつける。各手を屈臂し、掌で毘沙門天の各足を承ける。

二鬼

いずれも禪を締め、両手は胸の前で交差して五指を伸ばし、地天の脇に坐す。左像はウェーブのかかった頭髪を後方に流し、両牙を上出し、正面を向く。右像は巻髪で、両牙を下出し、左上方を仰ぐ。右側頭部に長い耳を表す。

〔材質構造〕

針葉樹（ヒノキか）、一木造、彩色、漆箔、彫眼。

針葉樹の堅一材から頭体幹部を彫出する。髻背部に小材を矧ぐ。後頭部、体部背部に内割りを施し、蓋板を当てる。両肩以下、両足先、天衣遊離部、宝塔、劍、

各別材製。台座の地天および二鬼は横一材から彫出し、各像背部に内割りをほどこし、蓋板を当てる。

本体と台座は布貼りのうえ、錆漆と白土を下地とし、以下の通り彩色と漆箔をほどこす。毘沙門天の髻は現状墨色。地髪部は緑青。肉身は朱。瞳は墨、金で縁取る。白目は白地。目頭と目尻に朱をぼかす。上瞼、蒙古襷、眉、髭を墨描。齒は白地に墨の輪郭線。襟甲や金鎖甲、籠手、脛当、獅鬣、各甲の覆輪、甲縮具などの金属部分は漆箔のうえ、文様を墨描。胸甲内区の獣面は緑青を地とし、髭や眉を墨描。外区は緑青を地とし、茶褐色の蕊、緑青の纏縹彩色による半截形の花文を表し、その周囲に紫丹の纏縹彩色による如意頭文を巡らせる。鰭袖衣のうち、肩口近くは丹地に群青の纏縹彩色による円花文（中心から放射線を引く。外縁を円文が取り囲む）を散らし、括り部以下に大ぶりの赤系半切花文と小ぶりの緑系半截花文を等間隔に配置する。その下段に白と緑のストライプ文を表し、袖口を漆箔で縁取る。衣の内側は白と赤のストライプ文。左手鰭袖衣括り部の側面の花形飾りは漆箔のうえ墨描。筒袖衣は白地に銀泥の団花文を散らす。籠手は、漆箔地に紐・連珠・紐を墨描した覆輪を中心に、赤・緑青・群青・紫の纏縹彩色による宝相華を表す。肘近くの縮具は白地に現状褐色の三ツ目文を散らす。両肩と腹部の獅鬣は、全体を漆箔のうえ、目や口、眉、髭、鬣を彩色と墨描で表す。表甲は正面と背面臀部以下の内区は漆箔地に金鎖甲を墨描。外区は朱地とし、白の中央線を引き、その両脇に黄褐色系の纏縹彩色による帯状の線を引き、その両外側に白線を引く。木瓜四弁花文（蕊は朱、花弁は緑青、輪郭線は朱）と上下に分け反転させた半截の花文を交互に配する。表甲外縁は漆箔地に唐草文を墨描。表甲背部は漆箔地に湧出雲（緑青および赤褐色、輪郭線は朱、墨）を表す。背部を垂直にわたる二条の甲縮具は朱・丹・黄土・紫の矢羽文、胸の下を水平にわたる縮具は緑青・白の矢羽文とし、縊り目を表す。腰帯は緑青地とし、漆箔で縁取る。前桶は朱地に纏縹彩色による宝相華（括り線は朱と塗り残しの白の二重線）を表す。袴は白地に銀泥の団花文を散らす。袴を括る紐は丹。表甲下端からのぞく右衽に打ち合わせる衣の裾は緑青地とし、細い衣襷を墨描。下前桶は朱地とし、緑は緑青と漆箔の二段。三枚の腰甲は朱地とし、中央に纏縹彩色による大ぶりの宝相華を表す。緑は黄土・白・漆箔の三段。左右の腰甲の宝相華は緑青・紫・丹・群青・白の纏縹彩色で、中心に黄褐色の雄蕊を表す。背面の腰甲は花文（蕊は赤、

花弁は白）を中央に配し、その上方に緑青の雲気文、下方に大ぶりの纏縹彩色による宝相華を表す。脛当では、漆箔地に紐・連珠・紐を墨描した覆輪を中心に、緑・紫・緑青・赤の纏縹彩色による宝相華を表す。踝の括り紐は朱と丹の矢羽文で縊り目を表す。その下方の裾は紺丹緑紫のストライプ文（界線は白地に彫り塗り風に朱線を引く）。沓は漆箔地に唐草文を墨描。足先と足首の両側に纏縹彩色による宝相華を表す。土踏まずをわたる平帯は朱。

地天の頭髪は現状黒色。髪際に墨線を引く。半切花形の元結飾りは緑青地、中央の蕊漆箔。肉身は肉色。眉と二重瞼の目墨描。唇は朱。胸飾りは漆箔地に墨描。左衽の衣の衿は朱地に緑青の纏縹彩色による半截形の花文を上下に反転させて交互に表す花弁文帯からなる。衿際は漆箔。胸部は緑青地とし紫の纏縹彩色で文様を描くか。背面の衿は、黄と白のストライプ文。群青で縁取る。下層にまとう三弁形の雲肩は、墨線および群青で雲頭形を象り、内区は赤、外区は緑青と白のストライプ文。腰帯は黄土。鰭袖衣は、袖の内側を緑青と白のストライプ文、外側を赤地とする。腕釧は赤。裾は緑青地に花文を表すか（一部に漆箔の痕跡）。

二鬼はいずれも頭髪は丹地に毛筋を墨描。肉身は緑青で、黄土を刷りて陰影を表すか。白目は白、瞳は黒、漆箔で縁取る。眉を墨描。両牙は白地に稜線を墨描。禪は朱。腕や胸の体毛を墨描。右鬼の側頭部にみえる耳は緑青。

〔伝 来〕

石山寺毘沙門堂の須弥壇中央に安置。

正中年間（一三二四〜六）に詞書が成立した『石山寺縁起絵巻』によれば、本像は、建久年間（一一九〇〜九九）に中原親能（一一四三〜一二〇九）が建立した勝南院に安置されていた。親能は、関東の下知で山城国和束の敵を召取るに際して石山寺で祈請し、毘沙門天の加護を得て勝利したことで、堂宇の建立を發願した。勝南院の名は、敵地が石山寺の南に位置することにちなむという。本院は、石山寺一四代座主実位の居所であったことから、一三世紀前半に実在したことが確かめられる<sup>1)</sup>。

尊賢（一七四九〜一八二九）が編纂した『石山要記』や『石山年代記』、膳所藩土寒川辰清（一六九七〜一七三九）が編纂した、享保十九年（一七三三）の序を持つ『近江輿地志略』には、近江国寺辺村勝南谷に所在する毘沙門堂（勝南院）

が中古に退転した後、本像を石山寺本堂に移したとの記述がある。

『石山要記』や『石山年代記』、毘沙門堂付属の棟札によれば、現在の毘沙門堂は、紀州藩士福田儀左衛門正勝が、安永二年（一七七三）に建立したものである。儀左衛門は、石山寺本堂に安置されていた本像に帰依したことで建立を計画し、自身の誕生日にあたる五月二七日に本像を遷座して落慶供養をおこなった。<sup>②</sup>

明治三年（一八九九）修理。明治三三年四月国指定。

#### 〔保存状態〕

天衣遊離部、宝塔、右足の漆箔の一部、後補。右鬼像側頭部の象耳の先端欠失。宝冠、表甲下縁に取り付ける鈴型飾り亡失。

#### 〔時代〕

平安時代（九世紀）

#### 〔考察〕

本像は、足下に地天と二鬼を従える毘沙門天像である。この形式の毘沙門天像は九世紀前半に日本にもたらされると、平安時代に盛んに造像され、一一世紀頃から兜跋毘沙門天と呼称された。

本像の特色として、大型の髻を結び、地髪部に段差を設けて別材製の宝冠を載せる頭部の仕様や、顔を真正面に向けながら宝塔に視線を注ぎ、齒列を露わにする独特な面貌表現、下半身を長大に作る堂々たるプロポーション、八世紀半ば以降の日本の神将形像に一般的な衣であった大袖衣をまとい、袖や裾の裾を大きく翻らせる表現を採らない点などが指摘できる。このうち、面貌表現や高い腰を左に振る立ち姿については、唐より請来された京都・東寺像や、空海の請来図像を伝える京都・醍醐寺『四種護摩本尊並眷属図像』中の白描図像などの類似が指摘される。<sup>③</sup>

足下の地天像は、露わにした胸元や手首に胸飾りや腕釧などの装身具をつけ、雲肩をまとい、女人形の天部に通じる服制を示す。その両脇の二鬼は、通例であれば刀印を結んだ両手を胸前で交差し、つま先を立てて跪坐するが、本像二鬼は、両手の五指を伸ばし、つま先を立てずに坐す点に特徴がある。なお右鬼像の

右側頭部には、先端を欠失した帯らしきものが垂下する。肉身と同じ緑青色であり、本来は象頭人身の障障礙神ガナパティに由来する長い象耳を表したものと思われ、これも請来図像と一致する要素といえる。

本像の制作の年代と背景について、近藤譲氏は、東寺や醍醐寺などの別当や長者を歴任し、金峯山や東大寺で毘沙門天像を造立した経歴を持つ聖宝（八三二〜九〇九）の関与を想定し、在世中の九世紀後半の作と論じた。<sup>④</sup>これに対し、玉琢人氏は、聖宝が醍醐寺に入寺した頃に石山寺の密教化を推進したという定説には疑問があり、本像の成立背景について再検討が必要であるとしながら、九世紀半ば頃から後半にかけての神将像や菩薩像、女神像と本像各部の表現を比較し、本像を九世紀第三四半期の作と位置付けた。さらに、従来後補とみられてきた表面の彩色を当初のものと評価し、中国甘肅省敦煌莫高窟の壁画にみられる中唐期の文様や、奈良時代の作例に通じる彩色法がみられることを指摘する。<sup>⑤</sup>

王氏が様式検討に基づき示した年代観は妥当なものである。聖宝が本像の造立に関与したのかを含め、制作背景にはなお検討を要するが、聖宝と同時代の作として位置づけてよいと思われる。日本に現存する九世紀に遡る兜跋毘沙門天立像は希少で、承和十一年（八四四）開眼の東寺講堂多聞天像、福岡・観世音寺像、愛媛・金竜寺像が挙げられるが、なかでも石山寺像は特に整った作行を示すとともに、保存状態が極めてよい点で貴重である。

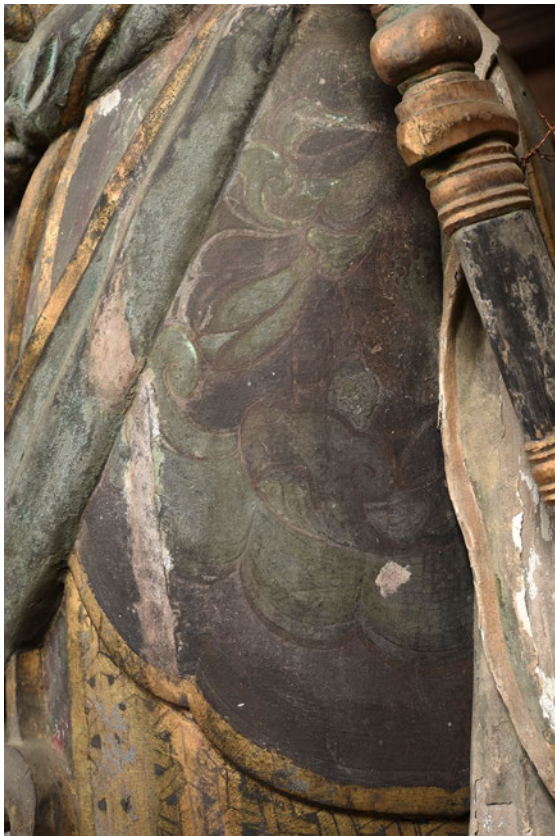
なお、本像に帰依し、勝南院を建立したとされる中原親能は、齋院次官として朝廷に仕える文官であったが、源平合戦の軍功により頼朝の信任を得て、文治年間（一一八五〜九〇）における後白河院（一一二七〜九二）の居所閑院殿や六条殿の修造の差配など、鎌倉幕府と朝廷を取り持つ重要な役を担い、初の京都守護となった人物である。<sup>⑥</sup>『石山寺縁起絵巻』巻六によれば、石山寺に宝塔院を寄進したのは、親能の妻亀谷禅尼であるという。多宝塔須弥壇框裏に建久五年の供養銘があり、ここに安置される本尊の快慶作大日如来坐像も、多宝塔の建立と軌を一にして亀谷禅尼により発願されたものと考えられている。この意味で、親能自身も快慶周辺の人脈に連なっていたこと、<sup>⑦</sup>ひいては、建仁三年（一一二〇）に快慶が制作した醍醐寺不動明王像の像内結縁銘に名を残していることは、多宝塔大日如来坐像の成立に絡む人的背景を考察するうえで注目に値する。<sup>⑧</sup>



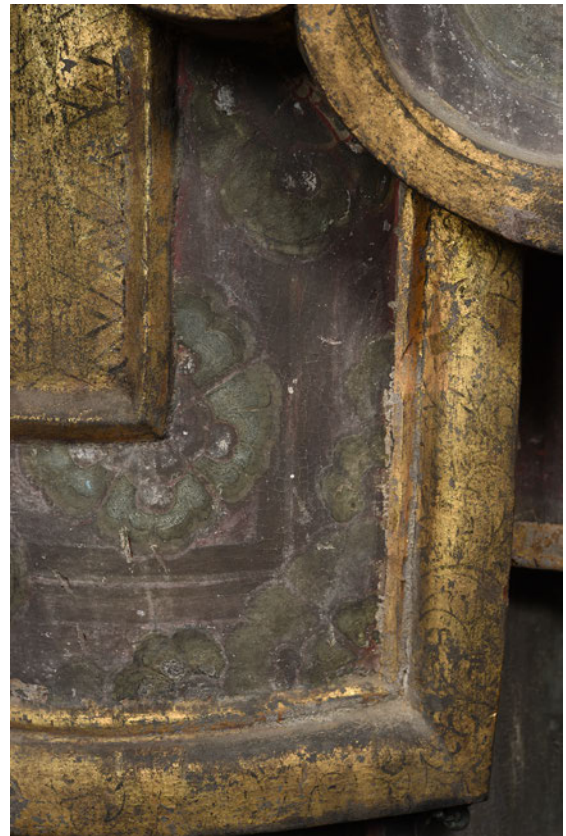
背面 腰甲

- (1) 東寺観智院金剛藏伝来聖教「諸尊口伝」(貞永元年へ二二三)四月二七日筆写) および東寺百合文書「石山寺座主并禅林・観心両寺座主相承次第」。
- (2) 大本山石山寺『石山寺の古建築』(二〇〇六)。
- (3) 近藤謙「石山寺兜跋毘沙門天像に関する一試論」(『佛教大学大学院紀要』三二、二〇〇四)、玉珪人「石山寺兜跋毘沙門天像について」(『仏教芸術』一一、二〇二三)。
- (4) 高橋早紀子「新図様の毘沙門天の受容と展開―地天・二鬼の属性をめぐって―」(『鹿島美術研究』年報第三三号別冊、二〇二六)、同「毘沙門天脚下の地天の属性とその変容」(吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』、名古屋大学出版会、二〇二二)。
- (5) 前掲注3近藤論文。
- (6) 前掲注3王論文。
- (7) 田端泰子「鎌倉初期の「京都守護」を勤めた中原親能とその家族」(『女性歴史文化研究所紀要』三二、二〇二三)。
- (8) 『吾妻鏡』には、嫡子季時が招請した勝賢が導師を務める鎌倉永福寺新造堂の落慶供養に供奉したこと(建久五年一〇月一三日条、同一二月一九日条)や、高野山に逐電した重源に幕府の使者として対面し、帰洛を促したこと(同六年五月二四日条)などが見え、建久年間に親能は快慶と親交の深い僧と接触していたことが知られる。
- (9) 醍醐寺不動明王坐像像内の造立時の銘文に見える結縁者のなかに、親能の法名「寂忍」が認められる。像内銘文の画像および翻刻は、奈良国立博物館編『仏師快慶の研究』(思文閣出版、二〇二三)を参照。

(森)



左側面 腰甲



表甲周縁部



前楯 (赤外線写真)



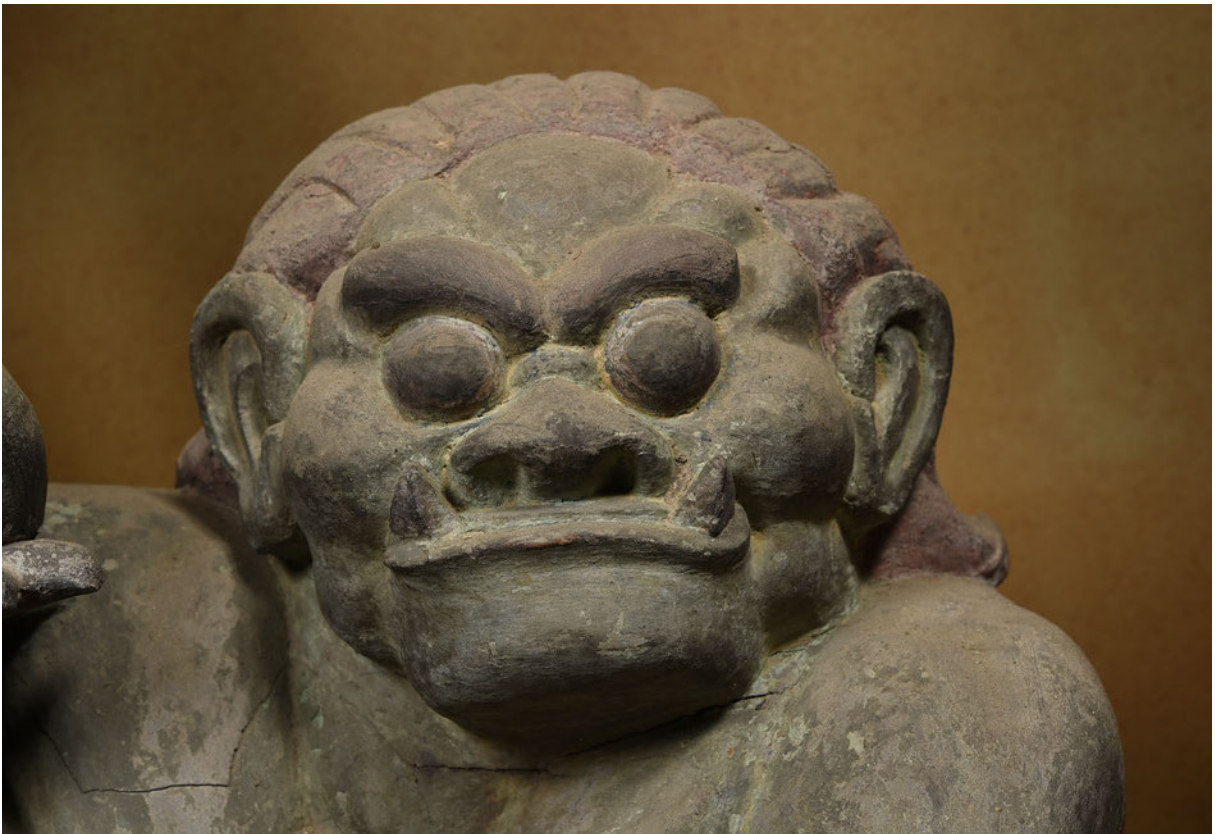
左足 脛当て



左肩喰



背面



左鬼 頭部正面



右鬼 頭部正面



地天 赤外線写真



右鬼 右側面



全身正面



頭部正面



全身右側面



全身左側面



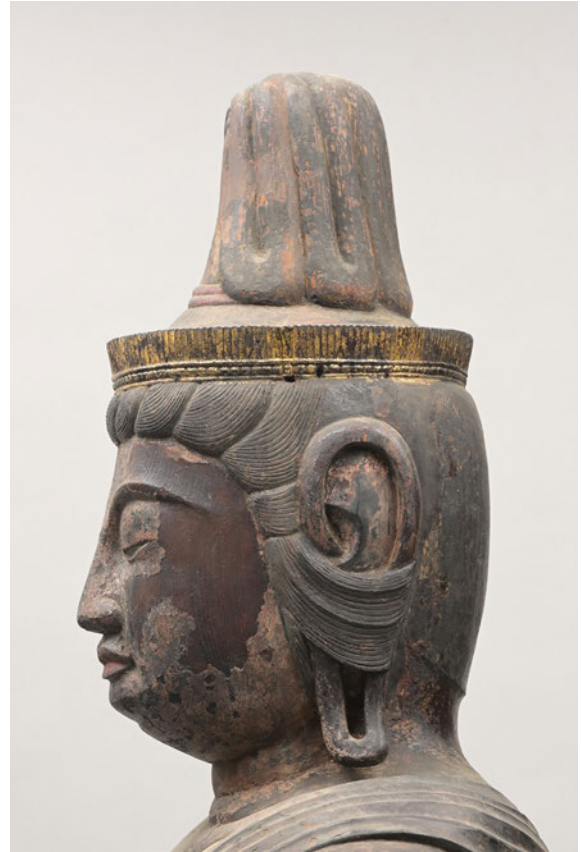
全身背面



全身右斜め



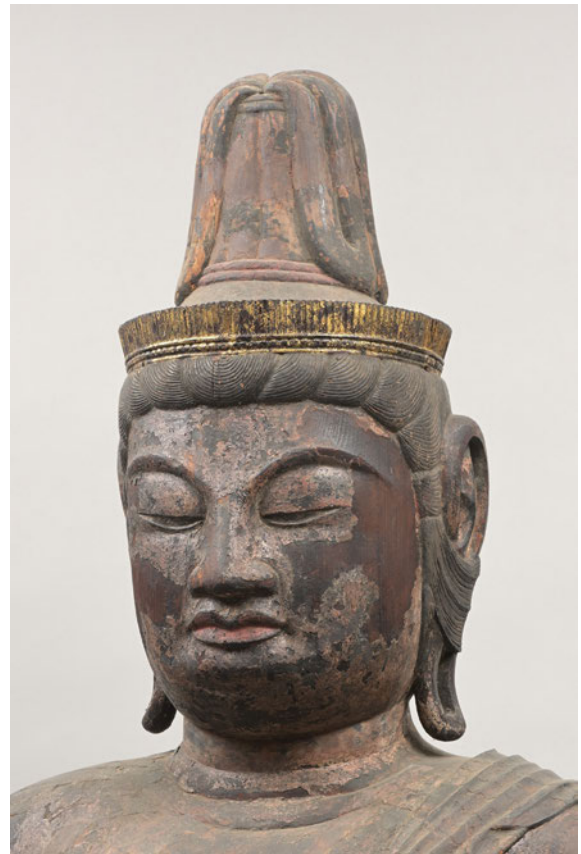
頭部右側面



頭部左側面



頭部右斜め



頭部左斜め

# 一〇〇 ◎大日如来坐像（解説）

## 光堂安置

木造 彩色 彫眼 一軀

### 〔法量〕

像	高 八七・三	髮際高 七六・三	頂—顎 二七・五
面	長 一六・三	面幅 一五・五	耳張 二〇・七
面	奥 一九・〇	胸奥(左) 二〇・七	胸奥(右) 二〇・九
腹	奥 二三・六	肘張 五一・四	膝張 六九・六
坐	奥 四九・五	膝高(左) 一三・二	膝高(右) 一三・四

### 〔形状〕

高髻を結び、元結紐二条を表す。髪束六束を側面と後方に垂らす。天冠台より上は平彫りとし、天冠台より下の頭髪は、前面では束ね目入り毛筋彫り、他は平彫りとする。鬢髪二条、耳半ばをわたる。天冠台は、下から紐・連珠・紐・列弁とし、列弁文の六本を一組として、中央に三角形の切込みを入れる。半眼閉口。耳朶環状貫通。三道相。胸と腹のくびれ、へそを表す。条帛、裙、腰布を着け、右足首には裙の下層の衣が巻き付く。条帛は左肩から斜めに懸け、背面で末端を上方から巻き込んで垂らす。裙は上端を一段折返して、腰布は臀部から腿にかけて巻く。腕釧は、紐二条・列弁とする。臂釧は、列弁・紐・連珠・紐・列弁とし、外側に菊座を設け、その中央から紐を通し、前後を内側にわたる。両腕を屈臂して、胸前で智拳印を結ぶ。右足を外にして結跏趺坐する。

### 〔品質構造〕

針葉樹（ヒノキか）、一木造、彩色、彫眼。

頭体幹部は、木心を込める豎一材より彫出する。面部は髻の半ばから三道のくびれの一段目まで、別材を耳前で矧付け、後頭部左側にも天冠台上部を含む別材を矧ぐ。後頭部右寄りに干割れを埋めた跡が残る。背面中央に背割りを設け、蓋板を当てる。両臂までを体幹部材より彫出し、両前膊半ば、両手首より、各別材を矧ぐ。左前膊部材は豎材を、右前膊部材は横材を使用する。右第二指を別材と

する。両大腿部は体幹部材より彫出し、脚部は横木一材を下腹部に切り込んで角柄で矧付け、裳先にも別材を矧付ける。右腰脇に三角材を矧ぐ。

両手首を中心に木屎漆を盛り上げる。表面は、肉身を白土地の上に黒漆塗り、丹塗りとする。条帛は白土地の上に黒漆塗り、赤色塗りとする。裙は黒漆の上に地色赤とするが、詳細は不明。腰布は白土地に黒漆塗り、その上に赤色塗りとする。

### 〔伝来〕

石山寺光堂、内陣向かつて左側に安置。寺伝には石山寺多宝塔の旧本尊という。明治三七年（一九〇四）二月国指定。明治四〇年、昭和五八年（一九八三）修理。

### 〔保存状態〕

明治四〇年の修理の際に後補の錆下地の除去や虫蝕部の補修などが行われている。天冠台、臂釧、腕釧に施される漆箔、両膝辺に施される切箔の籠目文、唇・元結紐・天冠台上面の朱、右腰脇の三角材、背面地付き付近の小材、干割部の木屎漆、像底底板、裳先、台座、光背、以上後補。

### 〔時代〕

平安時代（九世紀末〜一〇世紀前半）

### 〔考察〕

智拳印を結ぶ金剛界大日如来坐像である。本像は、量感あふれる体軀や両膝外側に見られる粘りの強い衣文などから、平安時代中期以前に遡る作例であることが明らかである。部分的に乾漆を使用し、条帛には渦文を交え、随所に粘りの強い衣文を刻む点には古様が感じられる。ところが、両脚部の翻波式衣文は整理が進み、条数が多くなってきた。このような特徴は、やや時代が降る要素として捉えられる。また、下膨れでやや平面的な面部の立体把握、厚い唇、鼻梁が大きい目鼻といった面貌表現は、延喜七年（九〇七）から同一三年の京都・醍醐寺薬師如来坐像に近い。したがって、本像の制作は九世紀末から一〇世紀前半を想定するのが穏当であろう。大日如来彫像の古例として貴重な存在である。

また、ホノルル美術館大日如来坐像（一〇世紀）が本像と近い作風を示すとする見方がある<sup>(2)</sup>。ホノルル美術館像の方が本像に比して量感豊かであり、装身具の細部形式に違いが認められるものの、髻の形式や全体のプロポーションは確かに類似し、両像の関連に興味を持たれる。

図像的な面では、京都・安祥寺大日如来坐像、和歌山・金剛峰寺大日如来坐像といった、一〇世紀以前に遡る大日如来彫像が肉身を金色とするのに対し、本像は肉身を肉色としており、彫刻作品の中で見ると珍しい特徴といえよう。絵画作品では、京都・東寺両界曼荼羅（西院曼荼羅へ伝真言院曼荼羅）の金剛界大日如来は肉身を肉色とすることが注目される<sup>(3)</sup>。この他、本像では、正面で条帛の末端を表さない点や<sup>(4)</sup>、左手の甲ではなく掌を正面に向ける智拳印などが特徴的である。本像が造立されたと思われる九世紀末から一〇世紀前半は、石山寺二代座主観賢（八五四〜九二五）、三代座主淳祐（八九〇〜九五三）の活動時期にあたり、本像が当初より石山寺に伝来したものであったとすれば、観賢、淳祐といった石山寺の祖師たちの信仰との関連も想起されよう。

明治末年の修理の際、背削りされた胎内から銅製経筒が発見され、建久の年紀を有する三十七尊種子や陀羅尼が納められていたことが報告されており、建久五年（一一九四）造立の石山寺多宝塔との関係を想像させる。ただ、現在多宝塔の本尊として安置される快慶作大日如来坐像が建久五年頃の作風を示すことから、多宝塔建立と同時に本尊として制作されたと考えられている。そこで、松島健氏は、建久五年以前より石山寺には多宝塔が存在しており、本像がその本尊として安置されていたと推定した<sup>(5)</sup>。氏はさらに、承暦火災に伴い多宝塔が焼失したため、本像を本堂などに移安、その後、建久五年の多宝塔再建に合わせて旧本尊であった本像にも補修の手が加えられ、陀羅尼などが納入されたと推測した<sup>(6)</sup>。ところが、考古学の分野においては、建久五年以前に多宝塔が存在した可能性は否定的に捉えられており<sup>(7)</sup>、松島氏の見解をそのまま受け入れることは難しい。

現状では、本像と多宝塔建立との関連は明確にしたいものの、『石山寺縁起絵巻』によれば、建久年間に中原親能が石山寺に勝南院を建て、その妻の亀谷禪尼も、別院として宝塔院を建立したという。「別院宝塔院」という呼称からすれば、多宝塔以外にも建築が付属していた可能性も想定され、本像はそうした付属の建築に安置されており、建久五年に補修ならびに陀羅尼などの納入が行われたとす

るのも一案であろう。

(1) 山本勉『日本の美術三七四大日如来像』（至文堂、一九九七）では、本像を九世紀末頃の作とする。奈良国立博物館編『観音のみてら 石山寺』（二〇〇二）では、九〜一〇世紀の作とする。

(2) 前掲注1山本書。

(3) この他、肉身を金色に表さないという点では、一字金輪仏頂が肉身白色である。ただ、本像の身色は赤みが強い肉色であり、一字金輪仏頂とは捉えがたい。

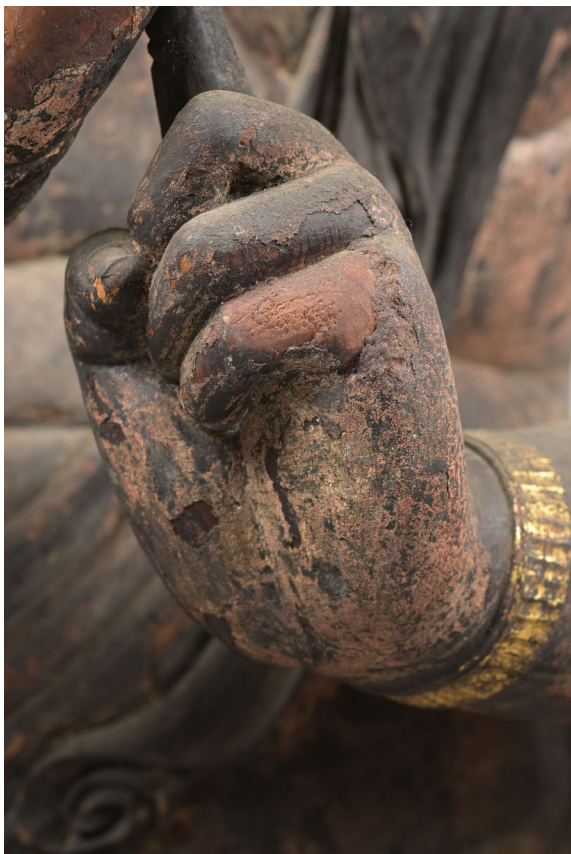
(4) 平安時代前期に遡る作例では、安祥寺像が正面で条帛の末端を表さない。

(5) 松島健「石山寺多宝塔の快慶作本尊像」、『美術研究』三四一、一九八八。

(6) 前掲注5松島論文。

(7) 滋賀県教育委員会事務局社会教育課編『国宝石山寺本堂修理工事報告書』（一九六一）。

（柘植）



左手先（木屎漆の盛り上げが確認できる）



像底



頭頂より



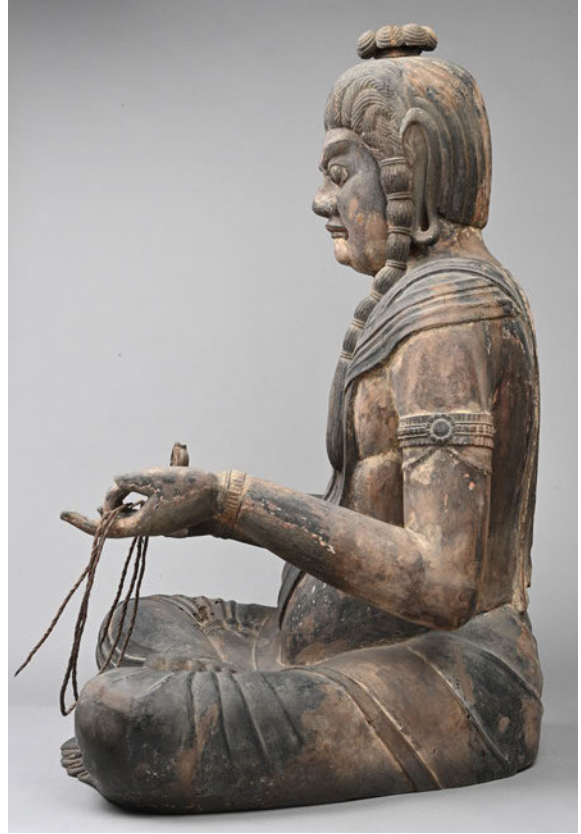
全身正面



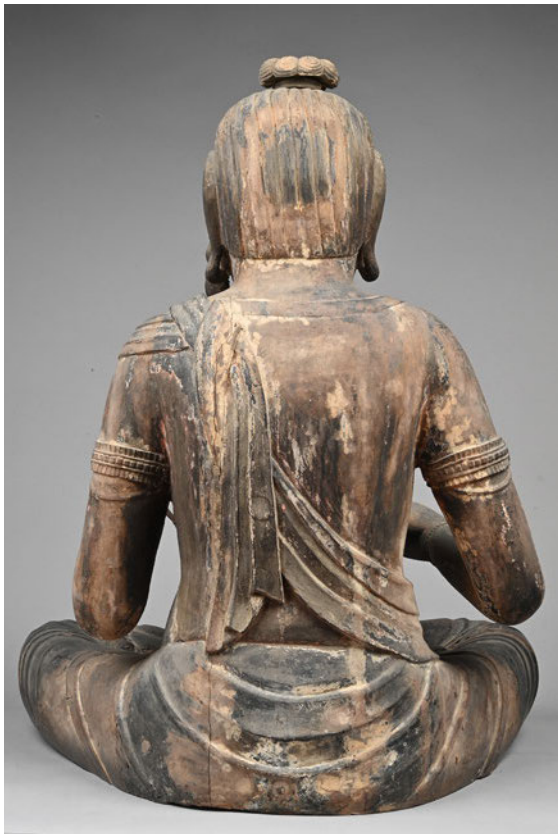
頭部正面



全身右側面



全身左側面



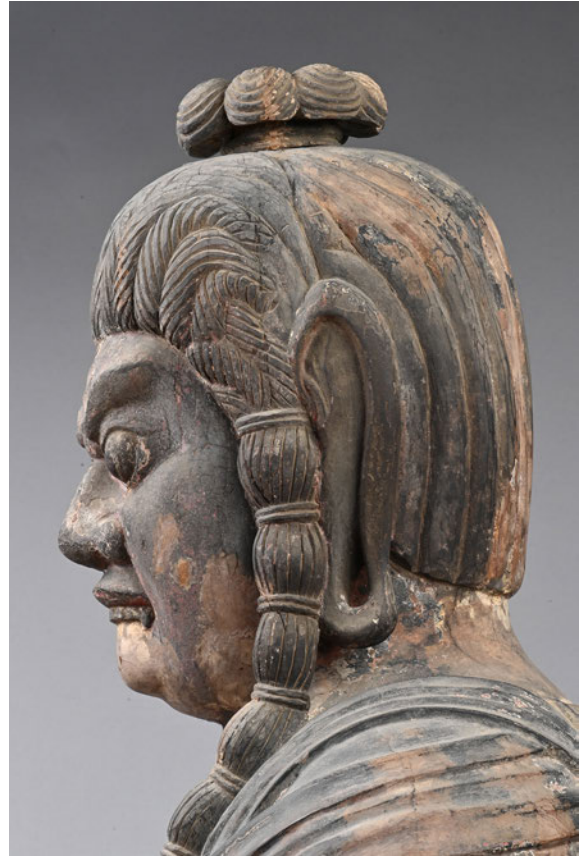
全身背面



全身左斜め



頭部右側面



頭部左側面



頭部右斜め



頭部左斜め

# 一 不動明王坐像 (解説)

## 本堂安置

木造 彩色 彫眼 一軀

### 〔法量〕

像	高 八六・〇	髮際高 七二・八	頂―顎 二九・一
面	長 一五・九	面幅 一五・七	耳張 二一・五
面	奥 二二・七	胸奥(左) 二四・六	胸奥(右) 二四・一
腹	奥 二九・四	肘張 五五・六	膝張 六九・九
坐	奥 五五・八	膝高(左) 一四・六	膝高(右) 一五・七

### 〔形状〕

頭頂に莎髻を表し、髪束は八とする。莎髻の元結紐二条を表す。頭髪は総髪とし、前頭部では髪束を左方に集め弁髪を結う。後頭部では髪束を頭頂に集める。弁髪は左耳前を通り、左胸辺りまで垂下する。弁髪は紐七結とし、各紐二条とする。前頭部と弁髪は毛筋を彫出し、後頭部では省略する。左こめかみに弁髪へ通じる編み込みを表す。水波相。眉根を寄せ瞼目。上前歯で下唇を噛む。両牙下出。耳朶環状貫通。三道相。両胸の括りを各一条、腹の括りを二条表す。胸飾、腕釧、臂釧を着ける。胸飾は背面では帯一条で表すが、正面では消失しており、当初は別材製の胸飾が付属していたか。臂釧は、列弁、紐一条、連珠、紐一条、列弁とし、外側に花型飾りを表し、内側へ向けて紐二条を表す。腕釧は手首側から紐二条、列弁とする。条帛、裙を着ける。条帛は背面では末端を表すが、正面では表さない。裙は上端を一段折り返し、体部前面中央で右前に打ち合わせる。折り返しについては、腰布の可能性を留保する。左手は屈臂して、腹の高さに挙げ、掌上にし、第一・二指を相捻じ、第四指を捻じ、第二・五指は軽く曲げて絹索を執る。右手は屈臂して腹の高さに挙げ、利剣を執る。左足を上にして結跏趺坐する。

### 〔品質構造〕

針葉樹(ヒノキか)、一木造、彩色、彫眼。

頭体幹部は、木心を中央に籠めた縦一材より彫出する。体幹部材は両肘までを

含む。背面より内削りを施し、別材製の背板を矧ぐ。この体幹部材に、横一材製の両脚部を腹部の下にかき込むようにして矧ぐ。莎髻、両前膊、左手第二・五指、両腰脇の三角材、体幹部と両脚部材の間のマチ材、高さ調節のための地付きの小材数材を別材とし各矧ぐ。

表面は、漆地、白下地、朱とし、左膝前部には布貼りが認められる。臂釧、腕釧には漆箔を施す。

### 〔伝来〕

石山寺本堂、内陣向かって左側に安置。明治三三年(一九〇〇)四月国指定。明治三二年、令和六年(二〇二四)修理。

### 〔保存状態〕

当初彩色の上に施された白下地、朱、黒漆、瞳の金泥の縁取りは補彩と見られる。表面や像底に見られるペーストは明治三三年の修理によるものである。両腰脇の三角材、体幹部と脚部間のマチ材数材、高さ調節のための地付きの小材、体幹部と両脚部を繋結する鍔、持物、光背、台座、以上後補。

### 〔時代〕

平安時代(一〇世紀後半)

### 〔考察〕

等身大の不動明王坐像である。体幹部を一木より彫出する点や、大振りな目鼻立ちなどには、平安時代前期彫刻の名残が感じられる。一方で、脚部材を体幹部材にかき込んで矧ぎ付ける構造や、臂釧の角張った連珠文は、一〇世紀後半から一一世紀前半にかけて多い特徴であり、やや時代が降る要素も認められる。胸部の量感を減じつつ、腹部が大きく膨らむ側面の量感把握は、一〇世紀後半の京都・六波羅蜜寺薬師如来坐像や、正暦四年(九九三)の滋賀・善水寺不動明王坐像に近い。両像は天台系の作例と目され、真言系の石山寺に伝来した本像とは系統を異にするものの、この類似は時代様式の共通として捉えることができるのではなからうか。つまり、本像の制作時期としては一〇世紀も後半を想定するのが妥当

であろう<sup>(1)</sup>。

図像的な面では、総髪で弁髪は七か所で括り、両眼を見開き、上歯で下唇を噛む点などが、弘法大師空海請来の原本を写した京都・神護寺高雄曼荼羅や、空海が構想に関わった東寺講堂像といった東密の代表的な不動明王像に通じるもの、頭頂に八の髪束を持つ莎髻を表す点は両作例と異なる。同様の表現を採る作例のうち、一〇世紀まで遡り得るものを求めると、管見の限りでは奈良・長谷寺普門院不動明王坐像<sup>(2)</sup>（九世紀末頃）、滋賀・菅山寺不動明王坐像<sup>(3)</sup>（一〇世紀末、一〇世紀前半）の二例のみで、珍しい特徴といえよう<sup>(4)</sup>。なお、左こめかみ辺に弁髪へ通じる頭髪の編み込みを作る点は、他にあまり見ない表現であり、目を引く。

伝来の面では、『石山要記』第二仏像部のうち、「弘法大師御作、古老伝云也、本護摩堂本尊、此堂退転後移而安置本堂内陣。」と記される不動明王像に本像が当たると思われることが注目される。この記述から元は石山寺山内に存在した護摩堂の本尊であったことが判明するが、同じく『石山要記』第一堂舎「護摩堂」の項を見ると「旧記、護摩堂一字五間六間、天正時代旧記、四十年前已前既転倒（云々、割注）、其旧跡今有護摩堂屋敷、此堂本尊不動明王像、今安置本堂内陣也。」とあり、護摩堂は遅くとも室町時代（一六世紀）にはすでに退転していたことが理解される。したがって、本像は中世より石山寺に伝来していたとわかり、造立当初より石山寺に安置されたことも十分に考えられよう。石山寺の一〇世紀は、醍醐寺から入寺した淳祐の弟子らが活動していた時期で、本像は真言系の中でも特に醍醐寺に関係する造像である可能性も想定される。ただし、醍醐寺に関わる平安時代の不動明王といえは、上醍醐の中院に伝来し、現在は霊宝館に所在する五大明王像のうちの不動明王坐像が想起されるもの<sup>(5)</sup>、頭髪表現などの図像面では本像と異なる点も多い。本像は一〇世紀の小野流における不動明王図像の多様性を示す一例といえよう。

(1) 本像に言及した研究は枚挙に暇がない。制作年代としては、一〇世紀後半を想定する見方が多く、一〇世紀前半まで含めるものもある。以下の諸文献を参照した。猪川和子『石山寺』（中央公論美術出版、一九七二）、榎原吉郎「石山寺の彫刻」（『佛教藝術』九四、一九七三）、野口武彦・鷲尾隆輝『古寺巡礼近江二石山寺』（淡交社、一九八〇）、山岸公墓「大阪・常福寺不動明王坐像小考」（武者小路研究室『無遮』一九九一）、宮本

忠雄「石山寺の仏像」（朝日新聞社『週刊朝日百科 日本の国宝七八石山寺』一九九八）、奈良国立博物館編『観音のみてら石山寺』（二〇〇二）、奈良国立博物館編『石山寺の美—観音・紫式部・源氏物語』（石山寺、二〇〇八）。

(2) 奈良国立博物館編『特別公開奈良・普門院本尊不動明王坐像』（二〇一三）。

(3) 前掲注1山岸論文、見田隆鑑「滋賀県余呉町・菅山寺不動明王坐像考」（『名古屋大学博物館報告』二〇、二〇〇四）。

(4) この莎髻については、これまでの研究史においては後補と判断されることが多かった。しかし、莎髻の毛筋彫りが前頭部の毛筋彫りと類似していることには留意されよう。さらに、莎髻を扁平な花型に表すのではなく、ある程度の高さをもって立ち上げる点や、元結紐を二条表す点を考え合わせれば、積極的に後補と判断することは躊躇され、むしろ当初の造形と評価すべきように思われる。なお、現状では髻を欠失するもの、大阪・常福寺像（一〇世紀後半）が当初は髻を有した可能性が指摘されている（前掲注1山岸論文）。京都・妙法院護摩堂像にも髻があるものの、これは後補とされている（伊東史朗「妙法院護摩堂不動明王立像について—天台系不動像の一系譜」、『佛教藝術』二二六、一九九八、同『平安時代彫刻史の研究』（名古屋大学出版会、二〇〇〇）再録）。本像のように頭頂に髻を戴く不動明王について、入唐八家のひとり恵雲が請来したものと見る見方があるが（中野玄三『日本の美術三三八不動明王像』〈至文堂、一九八六〉、この見解には反対意見も提出されている（見田隆鑑「日本における不動明王の図像展開に関する一試論—特に頂髻を表す不動明王について—」、『密教図像』二四、二〇〇五）。本像の典拠については後考に期したい。

(5) 柘植健生「ヲコト点と石山寺の法脈」（大津市歴史博物館編『石山寺—密教と観音の聖地—』二〇二四）。

(6) 津田徹英「醍醐寺霊宝館所在五大明王像考」（『佛教藝術』二五五、二〇〇一、のち同『平安密教彫刻論』〈中央公論美術出版、二〇一五〉改題のうえ再録）。

（柘植）



頭頂より



像底



全身正面



頭部正面



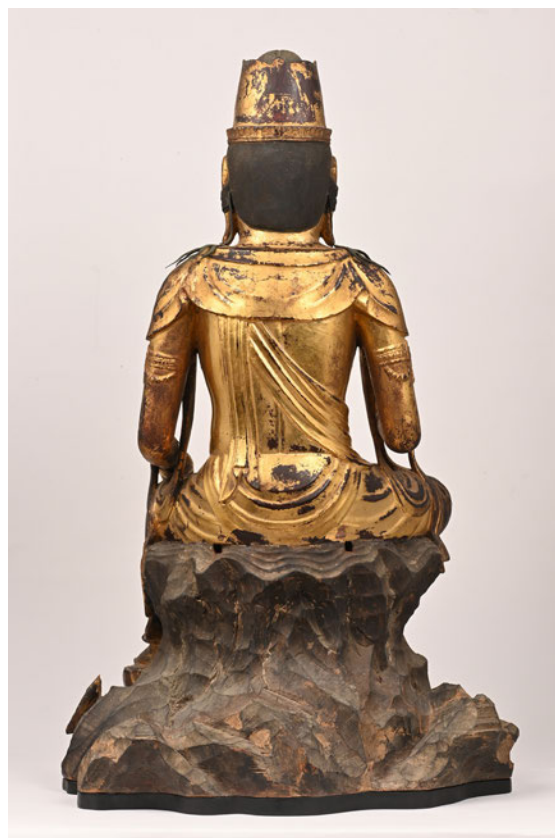
全身右側面



全身左側面



全身右斜め



全身背面



頭部右側面



頭部左側面



頭部右斜め



頭部左斜め

一一一 ◎如意輪観音坐像（解説）

豊浄殿安置

木造 漆箔 彫眼 一軀

〔法量〕

総高	六〇・八	像高	五二・二	坐高	四〇・〇
髮際高	四三・五	頂―顎	一六・七	面長	七・三
面幅	七・五	耳張	九・三	面―奥	九・七
胸奥(左)	一〇・三	胸奥(右)	九・三	腹―奥	一一・七
肘張	二三・二	膝張	二六・二	坐―奥	二〇・〇
膝高(右)	五・六				

〔形状〕

高髻を結び、頂部に前後に通る刻線を一条表す。筒形宝冠を戴く。宝冠上縁は、前後左右にそれぞれ各一の山型の突起を表し、その間を弧線であつた。天冠台は下から紐二条・列弁文帯とする。頭髮は前面ではマバラ彫りとし、他は平彫りとする。鬢髪二条耳を渡る。白毫相。半眼閉口。耳朶環状不貫。三道相。胸、腹のくくり、背面中央を縦に通る広背筋を表すと見られる刻線、各一条を表す。へそを陰刻で表す。条帛、天衣、裙、腰布を付ける。条帛は、一端が左胸で上からたくし込んで腹部左前辺に垂下し、もう一端が背面左側に垂下する。天衣は、両肩にかかつて両体側へ垂下し、腰横で弛みを作ったのち、両前膊にかかつて体側から台面下部へ垂下する（遊離部は欠失）。裙は腹前と臀部に折り返しを一段表す。腰布は臀部から腿にかけて巻く。右脛下部より垂下する二条の衣は腰帯結び目の両端か。腕釧は、下から列弁・紐・連珠・紐・列弁とし、外側に菊座を設け、その中央から連珠文帯を通し、前後を内側に渡る。両腕を屈臂して、腹の高さに上げる。左足を蓮花上に踏み下げ、右足を踵を股間に引き寄せ、足先を前方に向けて坐す。

台面は岩石状を呈し、左足下に蓮華を表す。全体にノミ痕を遺した仕上げとし、側面から背面にかけての上部には波状を表す。

〔品質構造〕

針葉樹（ヒノキカ）、一木造、漆箔、彫眼。

頭体、岩座まで含んで木心を前方に外した縦一材より彫出し、内刳は施さない。両肩以下を別材とし、両前膊半ば、両手首で各矧ぐ。天衣遊離部、右脛下部より垂下する帯状の衣、岩座最後面の小材数材を各矧ぐ。銘文を記した長方形の薄板を鉄釘二本で岩座底に打ち付ける。像底には前後に通るアタリ線が引かれる。現状、岩座底の形状にあわせた黒漆塗りの薄板に、銘文を記した岩座底の薄板を嵌め込んで固定される。垂髪金属製。

表面は衣部、肉身を漆地に漆箔とし、唇を朱とする。頭髮は彩色仕上げとするが、色は判然としない。

〔伝来〕

石山寺豊浄殿に安置。寺伝には、本堂の秘仏本尊宮殿前に安置される御前立であつたという。昭和三〇年（一九五五）六月国指定。平成八年（一九九六）修理。

〔保存状態〕

白毫、両手先、岩座最後面の小材数材、金銅製垂髪、表面仕上げ、光背（二重円相光）、岩座下の黒漆塗りの薄板、以上後補。

〔銘文〕

岩座裏に墨書あり。「奉修覆／真言供／本堂天／等と／□文下（花押）カ」

〔時代〕

平安時代（一〇～一一世紀）

〔考察〕

本像は、筒形の丈高い宝冠や、半月形に近い眼の形状、ややめくれた唇、太い衣文などに、平安時代中期（一〇世紀）の要素を色濃く残している。ただ、面部は球形に近く、衣文も前代のものに比べると穏やかさを増しており、時代の下降を感じさせる。臂釧に表された連珠文が角張っている点は、一〇世紀末から一一

世紀初めにかけての作例に多く見出されることから、本像の造立も同時期と判断できよう<sup>(1)</sup>。

本像は、岩座に坐す点、左足を踏み下げる点、二臂である点などが、現在の石山寺本尊と共通する。こうした像容を示す作例は、本像と石山寺本尊像を除けば、石山寺の二軀の如意輪観音坐像<sup>(2)</sup>、奈良・西大寺如意輪観音坐像（平安時代）が挙げられる程度である。したがって、本像は石山寺本尊像の模刻と考えるのが自然といえよう。石山寺本尊像は、天平宝字六年（七六二）に完成し、承暦二年（一〇七八）の火災によって損傷を受けており、当初の像容について議論がある<sup>(3)</sup>。本像は承暦二年の火災を遡る時期の制作で、当初の石山寺本尊像の像容を検討する上での最重要作例として貴重である。

本像の踏み下げる左足下の岩座には、中国の石窟や日本古代の仏像に散見される山岳文様に似た表現がある。これは、観音の住まう補陀落山を意識した表現とも思われ、注目されよう<sup>(4)</sup>。

なお、像底の薄板には墨書があり、書風などから判断して中世に遡る銘記とも思われる。「本堂」「真言供」と記されることからすれば、本像は本堂における如意輪観音の真言供の本尊であったと想定され、寺伝の通り御前立であった可能性は高い。石山寺本尊が秘仏となった明確な時期は判然としないが、開扉の記録としては、後土御門天皇の勅許による寛正六年（一四六五）が古い<sup>(5)</sup>。少なくとも一五世紀には秘仏化が進んでいたようで、この頃に本像が御前立とされたことが考えられよう。

- (1) 先行研究においても一〇世紀の制作とするか、一〇世紀末から一一世紀初期の制作とする見方が多い。井上一稔「奈良時代の「如意輪」観音信仰とその造像―石山寺像を中心に―」（『美術研究』三五三、一九九二）、同「奈良・平安彫刻の文化史的研究」へ法蔵館、二〇二五）再録）、同『日本の美術三一二如意輪観音像・馬頭観音像』（至文堂、一九九二）、奈良国立博物館編『観音のみてら石山寺』（二〇〇二）などを参照。
- (2) 一軀は法輪院本尊の如意輪観音坐像（平安鎌倉時代へ一二―一三世紀）、もう一軀は光堂本尊の如意輪観音坐像（江戸時代へ一七世紀）である。
- (3) 前掲注1井上論文参照。なお、同論文では、造立当初の石山寺本尊像は、如意輪観音ではなく聖観音と呼ばれていたと指摘されており、本像の尊名についても当初は聖観音で

- あった可能性が想起される。ただ、一〇世紀中頃までには石山寺本尊像が如意輪観音として認識されていたと吉川聡氏によって示されており、本像は当初より如意輪観音として造像された可能性が高いため、本書では如意輪観音として掲載した。吉川聡「執金剛神から蔵王権現へ―天神信仰に及ぶ―」（采原永遠男、佐藤信、吉川真司編『東大寺の美術と考古』法蔵館、二〇一六）参照。
- (4) 柘植健生「コラム石山寺本尊の姿―印相・台座―」（大津市歴史博物館編『石山寺―密教と観音の聖地―』二〇二四）にて類似の指摘を行った。
- (5) 大野瑞男「近世の石山寺」（石山寺文化財総合調査団編『石山寺資料叢書近世文書集成』法蔵館、二〇〇一）。

（柘植）



像底 墨書



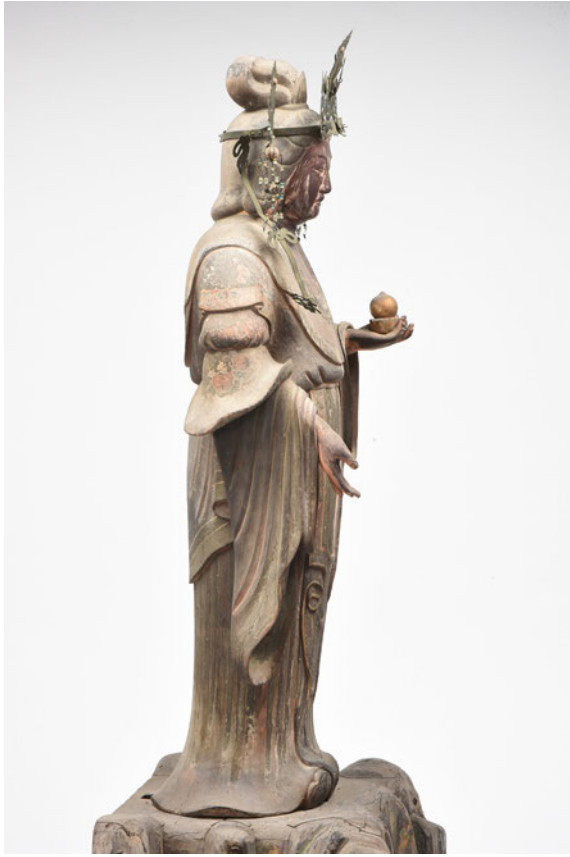
像底



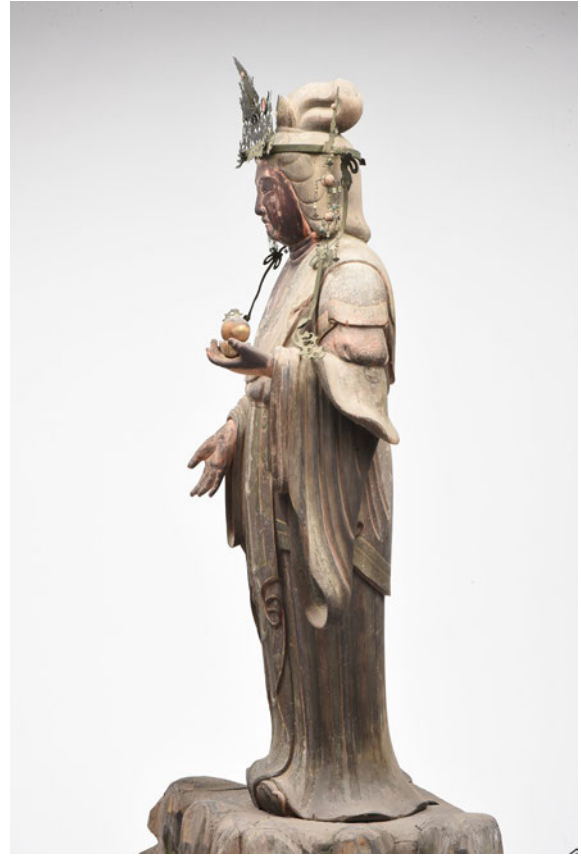
全身正面



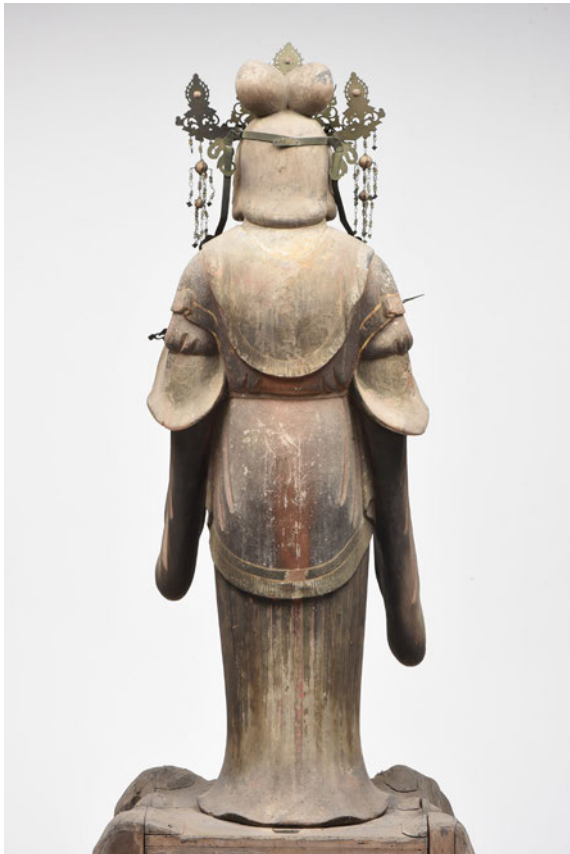
頭部正面



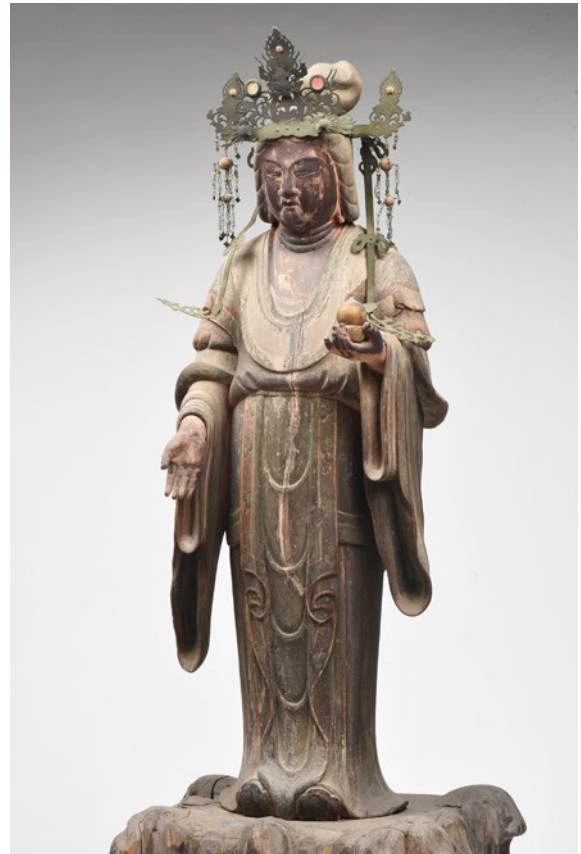
全身右側面



全身左側面



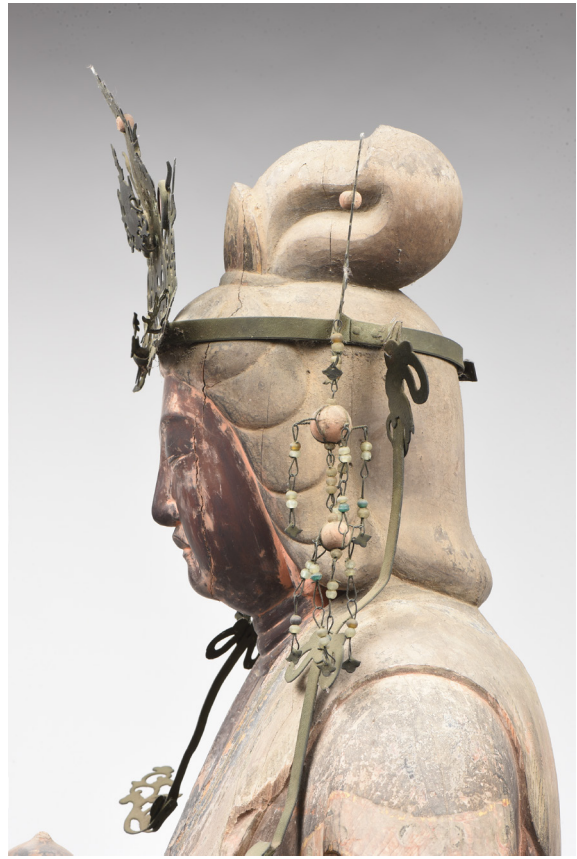
全身背面



全身左斜め



頭部右側面



頭部左側面



頭部右斜め



頭部左斜め

### 一三 吉祥天立像（解説）

#### 豊浄殿安置

木造 彩色 彫眼 一軀

#### 〔法量〕

像	高 九七・三	髮際高 八四・六	頂―顎 二一・三
面	長 一〇・七	面幅 九・五	面奥 一四・五
胸奥(左)	一七・六	胸奥(右) 一七・一	腹奥 一八・五
肘張	三三・三	袖張 三五・二	裾張 二五・五
足先開(内)		足先開(外) 一三・八	

#### 〔形状〕

髻を二束に結び、正面に蓮弁形の飾りを表す。髻下部に元結紐一条を表す。地髪は正面ではマバラ彫りとし、他は平彫りとする。耳朶環状貫通。半眼閉口。首にくびれを三条表す。二枚の内衣、筒袖衣、大袖衣、襦袢衣、襦袢、蔽膝を着ける。二枚の内衣は胸元にU字襷覗く。襦袢衣は大腿部半ば辺までを覆い、腰紐で締める。さらに、上部を一段折り返して、胸元から背中にかけて裏面を見せる。蔽膝は正面で腰紐から垂下し、地付きまで達する。左手は屈臂して腹の高さに挙げ、仰掌して蓮台上に宝珠をのせる。右手は垂下して五指を伸べ、掌を前方へ向ける。先端が三山型を呈する杵を履き、台座上に直立する。

#### 〔品質構造〕

針葉樹（ヒノキか）、一木造、彩色、彫眼。

両手首先に別材を矧ぐ以外、木心を杵裏あたりにわずかに籠めた堅一材より彫出し、内割りには施さない。像底は円形を呈し、中央に一部ノミ痕が残るもの、大半は鋸挽きとなる。

彩色について、頭髪は現状不明。髻正面の蓮弁形の飾り中央に半截花文を表し、漆箔で縁取る。内側の內衣は現状不明。外側の內衣は衣縁を漆箔で縁取る。筒袖衣は、表を薄い緑色、裏は薄い朱とするが、漆箔による衣縁の縁取りや、内外区の塗り分けがなく、後補の可能性を留保する。大袖衣は内区を朱色、外区は内側

から白色、墨色、漆箔で縁取る。大袖衣裏は、内区を緑色、外区を朱色とし、漆箔で衣縁を縁取る。襦袢衣は、括り部の上を朱色、襦袢部は中央に半截の縹縹彩色による宝相華を表し、朱線で縁取る。襦袢衣表は、内区を朱色とし、肩口の衣縁に半截の木瓜文を配し、界線は漆箔とする。胸元にU字状に現れる襦袢衣裏は上から漆箔の界線、緑青、漆箔の界線とし、衣縁は緑青でプリーツを表す。裾は緑色と朱色の色帯を縦に交互に配する。蔽膝は内区を緑色とし、格子文を表す。格子文は銀截金によるか。外区は朱色とし、半截の木瓜文を配する。内外区の界線及び衣縁は漆箔とする。杵は緑色とし、半截花文を表したうえ、周縁部を漆箔とする。

#### 〔伝来〕

石山寺山内、豊浄殿に安置。令和六年（二〇二四）まで石山寺本堂に安置されていたが、その後石山寺豊浄殿に移安。

#### 〔保存状態〕

肉身に施された錆漆地と朱彩、持物、宝冠、光背、台座、以上後補。面相部は眼の周辺を中心に彫り直しがあるか。

#### 〔時代〕

平安時代（一〇～一一世紀）

#### 〔考察〕

本像は、猪川和子氏によって報告された作例である。氏は当初、本像の張りのある頬や、腹部の衣のたくれ方、蔽膝の旋転の仕方などは鎌倉時代の特徴を示すものとした<sup>①</sup>。また、続く論考においては、本像を鎌倉時代以後の作とし、やや時代を降らせるように見方を修正している<sup>②</sup>。その後、論考や展覧会などで本像が取り上げられることは少なかったものの、二〇〇〇年代からは、一木造の構造や柔らかな衣文表現に古様を認め、平安時代（一〇～一一世紀）の作として位置づけられてきた<sup>③</sup>。

本像の構造は、木心を内に籠めた内割りのない一木造の構造で、丸太を思わせ

る材の用い方である。このような構造は、平安時代前中期の作例のほか、室町時代の模古作などにも見られる。しかし、体幹部に加え、両肩以下、袖先まで含めて一木から彫出する点からすれば、本像を中世まで下らせるのは違和感を覚える。

また、正面の衣文は浅く穏やかながらも、大袖や背面の衣文は深く、鋭さを感じさせる。これらの特徴は平安時代中期まで遡るものであろう。また、猪川氏が、鎌倉時代の特徴を示すとした丸みのある面部は、眼の周辺を中心に彫直しがあると思われることに加え、後補の錆漆と肉色によって彫刻面が損なわれている。したがって、構造、衣文表現に見られる古様を認め、平安時代の作とするのが妥当と思われる。さらに、体軀において十分な奥行を確保し、極めて大振りな髻を表すことからすれば、一〇世紀後半から一一世紀初頭まで遡る可能性を考えたい。当初の彩色が残ることも含め、吉祥天彫像の古例として貴重な存在といえよう。

本像については、尊賢撰『石山要記』第二仏像部の「毘沙門天像」の項に記述があり、「毘沙門天像 立像長 古代制作何堂本尊乎不詳、今禮堂一間安置之、脇士二天像長是亦已前何處安置乎、其義不詳、此像四天王内也、以持物可勘知之、吉祥天像是亦由来不詳」と述べられている。『石山要記』の写本は、文化六年（一八〇九）の尊賢自筆本が残っているため、少なくとも本像が一九世紀初期から石山寺本堂に伝来していたこと、その時点ですでに由来が不明になっていたことが判明する。

- (1) 猪川和子『吉祥天彫像』（『美術研究』二二〇、一九六〇、同『日本古彫刻史論』〈講談社、一九七五〉再録）。
- (2) 猪川和子『石山寺』（中央公論美術出版、一九七二）。
- (3) 大津市歴史博物館編『石山寺と湖南の仏像―近江と南都を結ぶ仏の道』（二〇〇八）、同『湖都大津の仏像と神像―』（二〇一八）、同『石山寺―密教と観音の聖地』（二〇二四）。
- (4) 石山寺文化財総合調査団編『石山寺史料叢書 寺誌篇第一』（法蔵館、二〇〇六）。

(柘植)



蔽膝 部分



像底



全身正面



頭部正面



全身右側面



全身左側面



全身背面



全身左斜め



頭部右側面



頭部左側面



頭部右斜め



頭部左斜め

## 一四 如意輪観音坐像（解説）

### 豊浄殿安置

木造 彩色 彫眼 一軀

#### 〔法量〕

像高	五六・四	髮際高	四四・五	頂—顎	二二・一
面長	一〇・五	面幅	八・七	耳張	一一・六
面奥	一二・四	胸奥(左)	一四・七	胸奥(右)	一四・八
腹奥	一四・〇	膝張	三七・六	坐奥	三一・三
膝高(左)	八・九	膝高(右)	八・九		

#### 〔形状〕

筒形宝冠を戴く。宝冠上縁は、八つの山型の突起を表す。宝冠頂部から髻を覗かせる。天冠台は列弁文帯とする。頭髮は前面ではマバラ彫りとし、他は平彫りとする。半眼とし、上脛を波打たせる。閉口。耳朶環状不貫。三道相。胸、腹のくくり、各一条を表す。条帛、天衣、裙、腰布を着ける。条帛は一端を左胸で上からたくし込んで腹部左前辺に垂下する。天衣は両肩にかかる。裙は体部正面に折り返しを一段表し、正面やや右寄りで右前に打ち合わせるようである（左足裏を通る衣が裙の一端か）。腰布は両大腿部半ば辺りまでを覆う。右大腿部を覆う腰布は、外側から右大腿部裏と右脛脛の間に巻き込まれる。頭部をやや右に傾ける。右膝を立て、左脚を寝かせ、両足裏を合わせる輪王坐で坐す。

#### 〔品質構造〕

針葉樹（サクラか）、一木造、彩色、彫眼。

頭体幹部は、木心を右斜め後方に籠めるサクラの豎一材から彫出し、内割りは施さない。この体幹部材に、右腰部地付きから、右膝部、左脚部上面を形成するサクラの横一材と、左脚部下半と右脛より下部を形成するバラ科の一材を各矧ぐ。サクラの脚部材は、体幹部材の腹部より下にかき込む。なお、この脚部材は右腰部までを含むため、体幹部との接合面が像底でL字に近い形状を呈する。

#### 〔伝来〕

石山寺山内、豊浄殿に安置。明治三二年（一八九八）に制作された『石山伝記』巻第六「仏像記」には、「木製長一尺八寸作者年代不詳」と記される如意輪観音像が記載されている。法量が一致することから、本像がこの如意輪観音像に該当する可能性があり、少なくとも明治時代には石山寺に伝来していたと思われる。平成一三年（二〇〇一）修理。

#### 〔保存状態〕

両肩以下、頭部耳後ろ・左踵付近・右脛・左脚部上面・右足外側の裙の衣端・右足先・裳先の小材、地付きと表面の干割れ、朽損を埋める木屎漆、白毫、持物、表面の古色、以上後補。像底では朽損が甚だしく、面部は眼の周囲を中心に彫直しがあるものと思われる。

#### 〔時代〕

平安時代（一〇～一一世紀）

#### 〔考察〕

本像は、かつて後補の漆箔に覆われ、江戸時代の作とされてきた。しかし、平成一三年の修理で面目を一新し、井上一稔氏によって平安時代の作として報告された。

井上氏は、一木造の構造、共木の宝冠、全体的に穏やかな表現、太い耳輪等の特徴からおおよそ一〇～一一世紀にかけての作と判断した。また、本像の下彫れの顔立ちや、サクラ材の使用から、京都・醍醐寺如意輪観音坐像の系譜を引き継ぐものと想定している。さらに、天衣を着け、腰布の結び目を表さないなど、平安時代前中期の如意輪観音像の中では新しい要素を有することから、本像の造像背景として、如意輪観音の次第を完成させた、石山寺第三代座主・淳祐（八九〇～九五三）の存在があった可能性も指摘する。

石山寺という伝来環境を踏まえて付け加えるならば、本像が如意輪観音坐像（五）とほぼ同時期の制作とみられることが注目される。上方へ尖った細長い耳

の形状、なだらかな胸部から丸く突き出る腹部へとつながる側面観、肩幅に対し腰が大きくくびれた正面観など、強い同時代性を示している。

これら二軀の如意輪観音坐像の制作をやや遡る一〇世紀中頃には、天平宝字年間（七五七〜七六五）に「観音」として造営された石山寺本尊像が、二臂の如意輪観音像として認識されるようになる。<sup>(3)</sup> また、一〇世紀末〜一一世紀初めは、淳祐の弟子筋が石山寺において盛んに活動していた時期でもある。<sup>(4)</sup> つまり、一〇世紀の石山寺においては、二臂如意輪観音に対する信仰が明確になるとともに、淳祐によって六臂如意輪観音が導入されたと捉えられる。

したがって、こうした石山寺の多様な如意輪観音信仰の下、本像と如意輪観音坐像（五）が必要とされ、あまり時を置かず制作されたと考えられる。密教修学と観音信仰という両側面を有する石山寺の歴史を反映した好例といえよう。

(1) 『石山伝記』の記載については、井上二稔「新出・石山寺蔵如意輪観音坐像をめぐって」（『博物館学年報』三五、二〇〇三、同『奈良・平安彫刻の文化史的研究』（法蔵館、二〇二五）再録）に言及がある。

(2) 前掲注1井上論文。その後の展覧会図録では、井上氏の見解が踏襲されている。大津市歴史博物館編『石山寺と湖南の仏像―近江と南都を結ぶ仏の道―』（二〇〇八）、同『石山寺―密教と観音の聖地―』（二〇二四）参照。

(3) 吉川聡「執金剛神から蔵王権現へ―天神信仰に及ぶ―」（采原永遠男・佐藤信、吉川真司編『東大寺の美術と考古』法蔵館、二〇一六）。

(4) 築島裕『平安時代訓点本論考』（汲古書院、一九九六）、柘植健生「ヲコト点と石山寺の法脈」（前掲注2大津市歴史博物館編書）。

(柘植)



像底



頭頂より



全身正面



頭部正面



全身右側面



全身左側面



全身背面



全身左斜め



頭部右側面



頭部左側面



頭部右斜め



頭部左斜め

# 一五 地藏菩薩立像（解説）

## 法輪院安置

木造 彩色 彫眼 一軀

### 〔法量〕

像	高三九・二	頂―頸	八・六	面幅	五・三
耳張	七・四	面奥	七・五	胸奥(左)	五・七
胸奥(右)	六・〇	腹奥	七・〇	肘張	一四・〇
袖張	一五・一	裾張	一三・九	足開(内)	三・〇
足開(外)	七・三				

### 〔形状〕

頭部は円頂とする。白毫を表す。閉口。耳朶環状不貫。三道を表す。左手は屈臂して掌を上にして宝珠を持つ。右手は垂下して掌を正面に向け与願印を表す。両足を軽く開き、わずかに腰を左にひねって立つ。

覆肩衣・袈裟・裙を各つける。覆肩衣は上端を一段折り返し、左肩から右肩にかけて、右腕の大半を覆う。また右脇腹で袈裟にたくし込まれる。袈裟は左肩から左腕に掛け、上縁を一段折り返して背面から右脇腹を通って末端は左肩から左肘にかかる。裙は袈裟の下につけ、両足の間で右前に打ち合わせる。

### 〔口質構造〕

針葉樹（ヒノキか）、一木造り、古色、彫眼。

頭体幹部を通し、両肩以下を含んで木心を背面右後方遠くに去る豎一材より彫出し、内割りを施さない。この体幹部材に、白毫、鼻先、右耳の耳輪の大部分、左耳の耳輪の上部、両手先、両足先、右袖先、覆肩衣の垂下部の先端、左袖先、袈裟一重目の垂下部の先端、袈裟二重目の先端、左右の裙裾の先端を各短く。両手先は挿し込み短ぎとする。両足先は像底に方形の割り込みを左右一ずつくり、両足先材をはめる。像底に丸孔をあけ、丸柄を挿し込んで台座上に立てる。持物（宝珠）別材製。

表面は大略灰黒色を呈する。漆地か古色塗によるものか不明。着衣の一部に朱

が残存するか。

### 〔伝来〕

石山寺山内の法輪院に安置される。もつとも過去には豊浄殿に安置されていた時期もあり、当初の安置場所は不明。

### 〔保存状態〕

白毫、鼻先、右耳の耳輪の大部分、左耳の耳輪の上部、両手先、両足先、右袖先、覆肩衣の垂下部の先端、左袖先、袈裟一重目の垂下部の先端、袈裟二重目の先端、左右の裙裾の先端、持物、表面彩色の大半、各後補。像底の丸柄は後補だが、当初からこの構造か不明。

### 〔時代〕

平安時代（一〇世紀）

### 〔考察〕

像高は約四〇センチ程度の小像ながら、体部に比して大きめに作られる頭部や、大ぶりの耳の表現など、どこか童子を思わせる像である。

頭部は円頂とし、覆肩衣・袈裟・裙を着けほぼ直立する姿となる。構造は頭体幹部の両肩以下までを含んだ大半を一材から彫出し、内割りを施さない一木造で、像底に丸柄を差し込んで立てられる。現状、表面は古色に覆われ、鼻先や両手先、両足先、袖の先端や裙裾などが後補に替わるものの、像の形状に大きな変更はないとみられる。

右手に与願印を結び、左手に宝珠を捧げる姿の地藏菩薩像は、錫杖を執る地藏菩薩像に比べて古い形式とされ、平安時代前半を中心に作例が残る。本像は両手先が後補に替わるものの、両腕の角度からみて当初からこの形式だったと考えられる。着衣に刻まれる鐺だった衣文は翻波式衣文の名残を留めており、やや頭部が大きく作られるのも平安時代前期の作例にまみ見られる。一方で胸元の着衣がV字状になり胸元の露出が小さくなる点は一〇世紀ごろの地藏菩薩像や如来像にみられる要素で、下半身の正面でY字状の衣文を表さず下向きの弧線を平行に重



頭頂より

ねる形式は一〇世紀末から一一世紀かけて定形化するなど、制作時期の下降を示す要素もみられる。また側面観に目を向けると、奥行きを深くとった頭部に比べ、胸奥や腹奥など体部の厚みは意外にも薄く緩やかな表現になっており、こうした点も時代の下降を感じさせる。制作の時期はおおよそ一〇世紀頃が想定されよう。

(赤津)



像底



全身正面



頭部正面



全身右側面



全身左側面



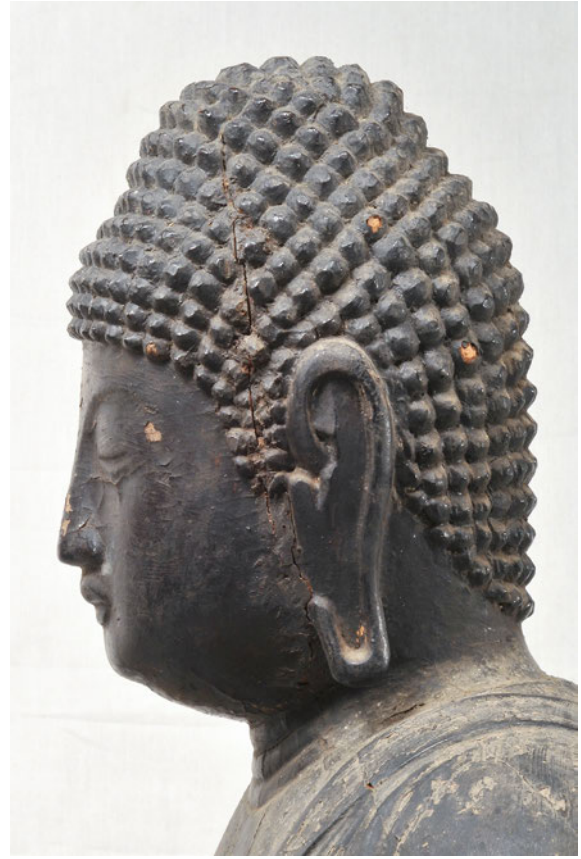
全身背面



全身左斜め



頭部右側面



頭部左側面



頭部右斜め



頭部左斜め

# 一六 □阿弥陀如来坐像（解説）

## 法輪院安置

木造 彩色 彫眼 一軀

### 〔法量〕

像高	五五・八	髮際高	四九・〇	頂―顎	一八・五
面長	一〇・〇	面幅	九・六	耳張	一四・〇
面奥	一三・七	胸奥(左)	一四・三	胸奥(右)	一四・七
腹奥	一八・二	肘張	三五・四	膝張	四二・〇
坐奥	三四・九	膝高(左)	八・八	膝高(右)	九・六

### 〔形状〕

螺髪彫出。肉髻と地髪の境は明瞭でない。半目閉口。耳朶環状不貫。三道相。両胸の括りを各一条表し、腹の括りを二条表す。袈裟は上端を折り返ししながら左肩から右肩へかけ、右脇下を通つて左肩へ掛け上げる。左手を右手にのせ、いわゆる「弥陀定印」を結ぶ（第二指の頂を第一指の内側にのぞかせる）。右足を外にして結跏趺坐し、両足裏を見せる。

### 〔品質構造〕

針葉樹（ヒノキか）、一木造、彩色、彫眼。

頭体を通し、像の幹部および両前膊半ばまでを含め、木心を像中央に籠める。一材より彫成し、内割り施さない。両脚部および両前膊半ばより先は、両手首先、裳先を含めて横一材を短く。臀部から脚部材後半までの像底に底板をあて、鏝と鉄釘で固定する。底板は臀部へ向けて厚さを増すため、像の前後の傾きを調整する目的であてられているもので、当初は現状より上体を反らした体勢であったと思われる。像底中央には前後に墨のアタリ線が引かれる。背面中央に節の埋木が認められる。

### 〔伝来〕

石山寺法輪院持仏堂に安置。寺伝によると、近津尾神社（大津市国分）境内に

位置する幻住庵の旧本尊とされ、明治時代、神仏分離の際に近津尾神社から石山寺へ移されたという。平成一六年（二〇〇四）四月県指定。

### 〔保存状態〕

表面の古色、台座、底板、光背（光条付き頭光）、台座（蓮華座）、以上後補。

### 〔時代〕

平安時代（一〇〜一一世紀）

### 〔考察〕

岩田茂樹氏によって紹介され、知られるようになった作例である<sup>①</sup>。岩田氏は、量感が抑えられた正面観や、丸いロープ状の衣文の中に、部分的に鑄立った衣文を残す点が、正暦四年（九九三）の滋賀・善水寺薬師如来坐像に近く、卵型の面部は、正暦五年頃の京都・真正極楽寺阿弥陀如来立像や長保五年（一〇〇三）頃の京都・平等寺薬師如来立像など通じることから、制作時期として一〇世紀末〜一世紀初めを想定している。

本像は近津尾神社境内の幻住庵より移されたと伝えられるが、幻住庵は松尾芭蕉が止寓した庵であった。岩田氏は、芭蕉が幻住庵で記した『幻住庵記』には、「国分の八幡宮」の神体が阿弥陀の尊像であったとの記載があり、本像との関係が想定されるとした。また、近津尾神社の本殿に祀られていた江戸時代の神像は、誉田別命として祀られてきたこと、近津尾神社は近津尾八幡とも呼ばれてきたことなどから、『幻住庵記』に記される「国分の八幡宮」は近津尾神社であるとしている。したがって、本像は近津尾神社の本地仏であった可能性が考えられるとした。いずれも至当な見解といえる。

近津尾神社は、尊賢撰『石山要記』第二仏像部に「寺門鎮守随一」と記されるように、鎮守社として石山寺と深い関係をもった神社である。その創建については従来、『石山寺記録』に承安三年（一一七三）に後白河院が石山寺へ行幸した際に、石山寺座主公祐が、同寺鎮守社として創建したと記されていることを根拠に、承安三年の創建とされてきた。しかし、『石山寺記録』という文献は現在確認することはできず、厳密な創建年代は不明とするのが穏当であろう。ただ、石山寺校

倉聖教のうち、文治二年（一一八六）書写の「範賢灌頂記」（第八函一一号）に「近津尾明神」と記されることから、少なくとも一二世紀末には存在していたことが確かめられ、本像が造像当初より近津尾社の本地仏として安置されていた可能性もある。なお、近津尾神社には、神像三軀、獅子・狛犬一対が伝わる<sup>③</sup>。

本像で注意されるのは、善水寺像や平等寺像など、明らかに天台系に属する作例との類似が見られることである。石山寺は一〇世紀には地理的に近い醍醐寺などの影響を受け、真言密教化が進むが、一〇世紀末頃から一一世紀中頃にかけては、特定の法流に属する僧侶の石山寺における活動が認められなくなる。それに対し、この時期の石山寺は、観音信仰を核とした貴顕の厚い帰依を受けている。したがって、明らかに天台系に属する作例との共通性が認められる本像は、寺僧の主導による造像というよりむしろ、貴顕の参詣に伴う寄進などによるものと捉えるのも一案であろう。石山寺を取り巻く、神仏が一体となった宗教空間を今に伝えている点だけでなく、当該期の石山寺の状況を反映する可能性もある点でも貴重な作例といえるのではなかろうか。

(1) 岩田茂樹「石山寺の彫刻拾遺（上）」『MUSEUM』五二九、一九九五。

(2) 大津市歴史博物館編『石山寺—密教と観音の聖地—』（二〇二四）。

(3) 前掲注2参照。

（柘植）



頭頂より



像底



持国天 全身正面



持国天 頭部正面



持国天 全身右側面



持国天 全身左側面



持国天 全身背面



持国天 全身左斜め



持国天 頭部右側面



持国天 頭部左側面



持国天 頭部右斜め



持国天 頭部左斜め



増長天 全身正面



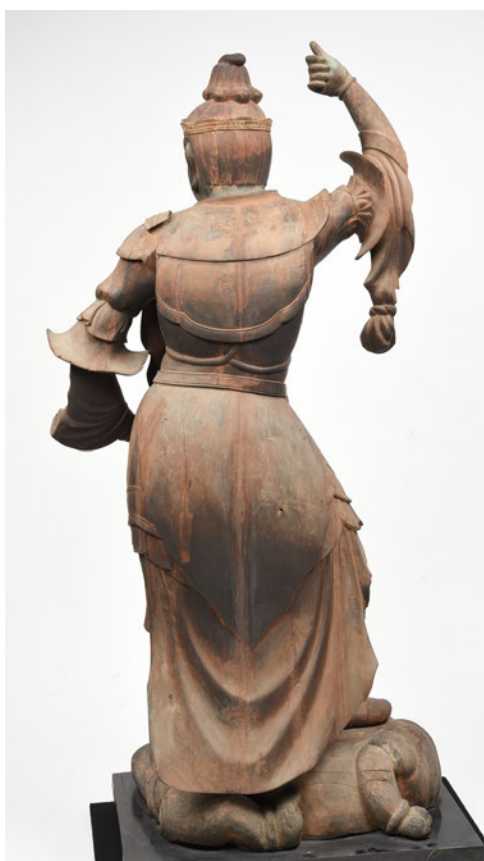
增長天 頭部正面



増長天 全身右側面



増長天 全身左側面



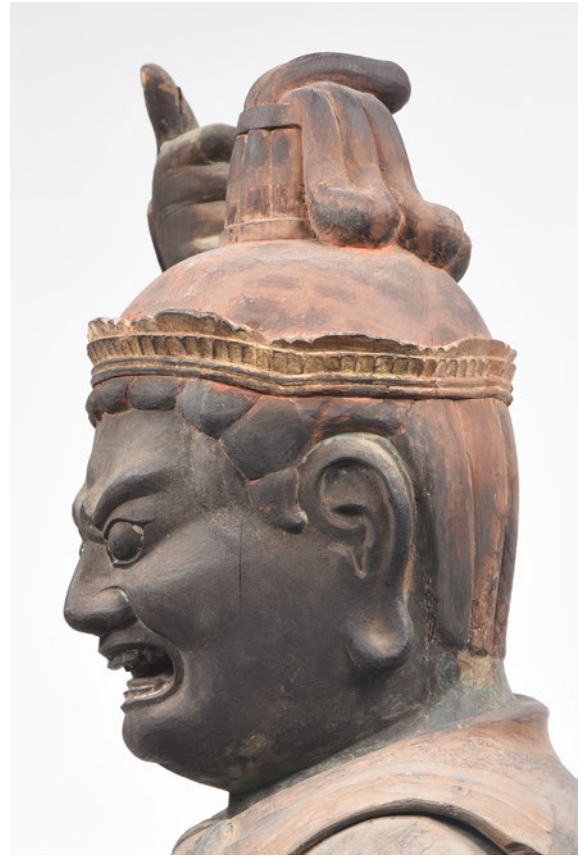
増長天 全身背面



増長天 全身右斜め



増長天 頭部右側面



増長天 頭部左側面



増長天 頭部右斜め



増長天 頭部左斜め

# 一七 ◎二天立像（解説）

## 本堂安置

木造 彩色 彫眼 二軀

### 〔法量〕

像	高 四八・九	面 幅 一〇・八	耳 張 一五・九
面	奥 一七・五	胸奥(左) 一九・二	胸奥(右) 一八・六
腹	奥 二一・八	肘 張 三四・七	膝 張 四二・五
坐	奥 三五・六	膝高(左) 九・〇	膝高(右) 七・一

### 〔形状〕

#### 一、持国天立像

垂髻。元結紐を上下に各一表す。髪束は二段とし、上段は一束を後方へ、下段は五束を側面と後方に垂らす。天冠台上は素髪とし、天冠台下の地髪は、耳より前方を束ね目入りマバラ彫り、後方を素髪とする。髻髪は耳前で後方へと巻き込む。天冠台は、下から紐二条・列弁・花型とする。瞼目。閉口。ほうれい線を表す。耳朵環状不貫。搾袖衣、大袖衣、鰯袖衣、袴、裳、領巾、天衣、下甲、胸甲、肩甲、表甲、前楯、獸皮、下前楯、籠手、脛当て、甲縮具、杵を着ける。天衣は肩から体側へ垂下し、腰帯に巻き付いて体前をU字に垂下する。表甲下縁にはフリル状の飾りを表す。前楯正面に獅噛を表す。左手を屈臂して体側上方へ掲げ、左手は臂を外側へ向けて軽く屈臂し、右腰横で剣を執る。左足先をやや外側へ開き、腰を右に出し、邪鬼上に立つ。

#### 二、増長天立像

垂髻。元結紐を上下に各一表す。髪束は二段とし、上段は一束を後方へ、下段は五束を側面と後方に垂らす。天冠台上は素髪とし、天冠台下の地髪は束ね目入りマバラ彫りとする。髻髪は耳前で後方へと巻き込む。天冠台は、下から紐二条・列弁・花型とする。瞼目。閉口し、上下歯列を見せる。ほうれい線を表す。耳朵環状不貫。搾袖衣、大袖衣、鰯袖衣、袴、裳、領巾、天衣、下甲、胸甲、肩甲、表甲、前楯、獸皮、下前楯、籠手、脛当て、甲縮具、杵を着ける。天衣は肩から体側へ垂下し、腰帯に巻き付いて体前をU字に垂下する。表甲と

下前楯の下縁にフリル状の飾りを表す。前楯正面に獅噛を表す。左手は臂を外側に向けて軽く屈臂し、掌を左腰に当てる。右手は屈臂して体側上方へ掲げる。右足を軽く曲げ、右足先をやや外側へ開き、腰を左に出し、邪鬼上に立つ。

### 〔品質構造〕

#### 一、持国天立像

針葉樹（ヒノキか）、寄木造、素地截金・彩色、彫眼。

頭体幹部は前後左右四材矧ぎとし、割首のうえ内割りを施す。髻上半を別材とする。両肩以下をそれぞれ別材とする。左腕は肩口にマチ材（幅約四センチ）、鰯袖の袖口周縁部に小材を三材、手の甲半ばより先を各矧ぐ。髻上半、右耳輪、後頭部左側の小材を各矧ぐ。両体側をそれぞれ別材とする。左体側は、大腿部半ば以下から左足中ほどを通って像底に到る一材、獸皮と裳の一部を形成する一材、裳裾を形成する数材を各矧ぐ。右体側は、腰帯下の表甲から表甲下の飾りまでを含む前後二材、裳裾を形成する一材を各矧ぐ。左足先を矧ぐ。右肩から腰にかかる天衣、持物、邪鬼、框座、各別材製。

頭部、肉身には白下地が認められる。元結紐は朱。頭髪はもとの彩色は不明で現状黒色を呈する。天冠台は白土地に朱、箔押しとする。肉身、唇は朱とし、眼の彩色は不明である。肉身をのぞく体部は素地を染めているように思われ（蘇芳染か）、その上から金銀箔によって大略以下の文様を表す。胸甲は銀截金による市松文様。下甲・下前楯は銀截金による七宝繋ぎ文。胸部甲締め具下の甲は截金による七宝繋ぎ文。表甲内区は銀截金による文様（円花文か）。表甲外区は截金による円花文帯。前楯は銀截金による二重格子文を表し、中心を銀周縁部を金とする円花文と、銀截金による連珠繋ぎ文を交互に充填する。肩甲は截金による亀甲繋ぎ文。獅噛は眼、歯を白、唇は朱とする。領巾の彩色は不明。大袖衣表の内区は四ツ目菱（銀截金）入り二重格子文（截金）とし、外区は銀截金による界線二条を表し、内側は銀截金による連珠文帯、外側は截金による団花文帯とする。鰯袖衣は截金による四ツ目菱散らし。搾褶衣は銀截金による市松文様。裳の表は大袖衣表と同様。裳の裏は内区を截金による四ツ目菱散らし、外区は銀截金の界線二条を表し、銀截金の四ツ目菱文帯とする。袴は内区を銀截金による市松文とし、外区は銀截金による界線二条を表し、截金の

四ツ目菱文帯とする。袴裏の周縁部は銀截金による連珠文帯。脛当ては截金による四ツ目菱散らし。

## 二、増長天立像

針葉樹（ヒノキか）、寄木造、素地截金・彩色、彫眼。

頭体幹部は前後左右四材矧ぎとし、割首のうえ内割りを施す。髻上半を別材とする。両肩以下をそれぞれ別材とする。左腕は鱗袖袖口の周縁部に小材を二材、手首より先を各矧ぐ。右腕は肩口にマチ材（幅約二・五センチ）、前膊半ば、親指先で各矧ぐ。髻上半に別材を矧ぐ。両体側をそれぞれ別材とする。左体側は、腰帯下の表甲から表甲下縁のフリル状の衣を形成する前後二材を各矧ぐ。右体側は、大腿部半ばより下から右足半ばを通って像底に到る一材、裳裾を形成する一材を各矧ぐ。裳裾左側の小材、両足の間垂下する裳の先端、右足先、を各矧ぐ。各所に節を埋めたとと思われる埋木がある。天衣遊離部、邪鬼、框座、各別材製。

頭髪、肉身部は白土地彩色とし、頭髪は丹、肉身部は白緑とする。その上に古色塗りを施し、さらにその上層にそれぞれ丹、白緑を施す。天冠台は白土地に黒漆、金箔とする。口内は朱とし、その上層に丹ないし砥粉を施す。唇は朱、歯は白とする、獅嚙は耳孔、鼻孔、口唇は朱、歯は白とする。眼の彩色は不明である。肉身をのぞく体部は素地を染めているように思われ（蘇芳染か）、その上から金銀箔によって大略以下の文様を表す。胸甲は銀截金による市松文。下甲は截金による亀甲繫ぎ文。甲縮具下層の甲は截金による七宝繫ぎ文。表甲外区は截金による円花文と半裁花文を交互に表し、内区は銀截金による円花文散らし。前楯は銀截金による袈裟禪文。下前楯は銀截金による市松文とする。下前楯下の花卉形の飾りは、銀截金と截金による七宝繫ぎ文を交互に表す。表甲下縁のフリル状の衣は銀截金によって衣文線を表す。肩甲には箔が見えるものの、文様の詳細は不明である。領巾の彩色は不明。大袖衣表の内区は四ツ目菱（銀截金）入り二重格子文（截金）とし、外区は銀截金による界線二条を表し、内側は銀截金による連珠文帯、外側が截金による団花文帯とする。大袖衣裏は截金による四ツ目菱散らしとし、周縁部は銀截金による四ツ目菱文帯とする。裳の表裏はそれぞれ大袖衣の表裏と同様の仕上げが認められる。鱗袖衣は截金による四ツ目菱散らしとし、周縁部は銀截金による四ツ目菱文帯とする。

袴褶衣は銀截金による亀甲文。籠手は截金による四ツ目菱散らし。袴は内区を銀截金による市松文とし、外区は銀截金による界線二条を表し、截金の四ツ目菱文帯とする。脛当ては截金による四ツ目菱散らしとする。

## 〔伝 来〕

石山寺本堂に安置。明治四三年（一九一〇）八月国指定。大正九年（一九二〇）、平成六〇八年（一九九四～一九九六）修理。

## 〔保存状態〕

### 一、持国天立像

髻上半、右耳輪、両鱗袖袖口周縁部の小材、左肩口のマチ材、右体側後方の小材、右体側の裳を形成する一材、左体側の裳裾を形成する数材、両手首先、左足先、天衣遊離部、持物、邪鬼、框座、天冠台正面の厚い白土およびその上の箔、鼻下・獅嚙の白土、以上後補。右大袖先端、天衣、以上亡失。天冠台や左大袖先端に欠失が認められる。

頭部と体部の矧ぎ目は三センチ程度ずれており、現状頭部は正面を向くものの、当初は顔をより右へ向けていた可能性が高い。

### 二、増長天立像

髻上半、右手第一指、左手首先、天衣遊離部、右足先、裳裾先の小材、左体側後半材、裳背面左側の埋木、左鱗袖袖口周縁部の小材、右肩口のマチ材、邪鬼、框座、頭髪・肉身の古色塗りおよびその上層の彩色、以上後補。左大袖先、左裳裾先、左肩甲背面の小材、右鱗袖周縁部の小材、以上亡失。両大袖、両鱗袖に欠失が認められる。木心を籠めた材、あるいは木心に近い材を用いているため、干割れが各所に認められ、ペースト状の木屎による補修が施されている。

## 〔時代〕

平安時代（一二世紀前半）

## 〔考察〕

本像は、尊賢撰『石山要記』に毘沙門天像の脇侍として記される二天像にあた

るものと考えられる。『石山要記』には、以前どこに安置されていたか詳らかではないとも記しており、江戸時代後期の時点ですでに伝来が不明となっていたことが理解される。

猪川和子氏は、永治二年・康治元年（一一四二）の滋賀・金胎寺二天像と本像との類似を指摘し、本像は、金胎寺像とさほど隔たらない時期に、同系の作者によつて造られたものとした<sup>(1)</sup>。本像と金胎寺像を比較すると、本像の方が面貌表現や衣文の彫法が穏やかであり、金胎寺像には金鎖甲が彫出される一方、本像には表されないなど、細部の表現には違いが大きい。つまり、本像と金胎寺像は同系の作者の手にかかることは想定しにくいといえる。とはいえ、プロポーシヨンの把握に通ずるところがあるため、本像が金胎寺像と近い時期に制作された可能性は高い。截金文様がやや大振りでおおらかな表現をとることも含めれば、本像の制作は一二世紀前半と考えられ、承暦火災後の復興と関連する造像であることも想定されよう。

表面仕上げを素地截金とする類例として、和歌山・高野山金剛峯寺毘沙門天立像（胎内仏）が挙げられるが、金剛峯寺像は肉身部・衣部ともに素地截金とするのに対し、本像は、肉身部にのみ彩色を施し、その他は素地截金としており、極めて珍しい仕上げであることが特筆される。

(1) 猪川和子「神将形二天彫像について(上・下)」、『美術研究』二四四・二四五、一九六六、同『日本古彫刻史論』〈講談社、一九七五〉再録。

(柘植)



増長天 像底



持国天 像底



増長天 帶喰



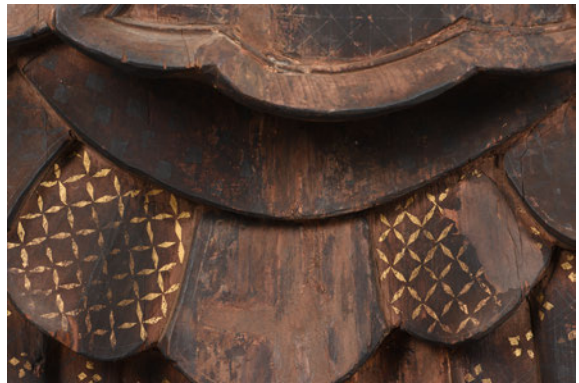
持国天 裳裏側



持国天 前楯下部



増長天 右足脛当



増長天 前楯下部・下前楯



増長天 表甲外縁



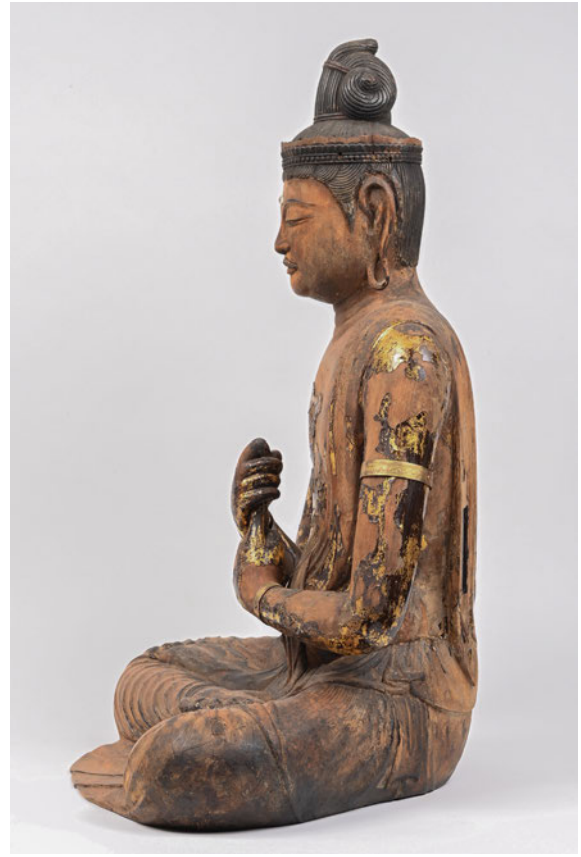
全身正面



頭部正面



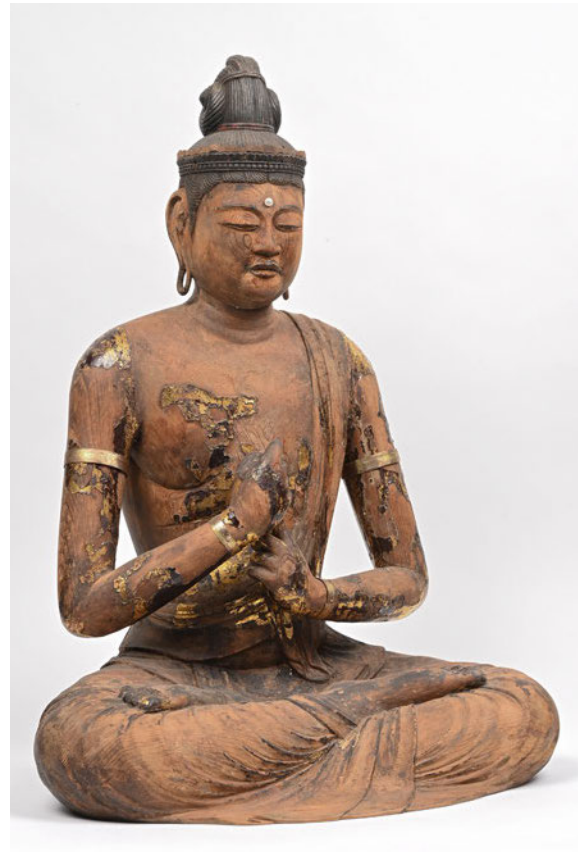
全身右側面



全身左側面



全身背面



全身右斜め



頭部右側面



頭部左側面



頭部右斜め



頭部左斜め

# 一八 大日如来坐像 (解説)

## 本堂安置

木造 彩色 彫眼 一軀

### 〔法量〕

像高	六八・〇	髮際高	六〇・〇	頂―顎	一六・〇
面長	一一・〇	面幅	一〇・九	耳張	一三・七
面奥	一三・九	胸奥(左)	一三・七	胸奥(右)	一四・三
腹奥	一七・四	肘張	三八・二	膝張	四九・一
坐奥	三四・三	膝高(左)	一〇・〇	膝高(右)	九・八
裳先奥	三七・八				

### 〔形状〕

螺髻を結う。根本を元結紐二状、上部を紐二状でそれぞれ括る。髻、地髪部ともに毛筋彫りとする。天冠台を表す。天冠台は下から紐一状・連珠文帯・紐一状・列弁文帯・花形飾りで構成されるが、最上部の花形飾りは彫刻面が削り取られる。白毫を表す。閉口。耳朵環状貫通。三道を表す。

条帛・腰布・裙・臂釧・腕釧を各つける。条帛は左肩から右脇腹にかけてつけ、正面側では左脇腹の位置で環にくぐらせ、末端を垂下させる。もう一端は左肩にかけ、末端を垂下させる。腰布は裙の上層につけ太腿から臀部の下に敷き込まれる。裙は腰布の下層につけ、左前に打ち合わせる。臂釧は上腕に、腕釧は手首にそれぞれつける。

顔は正面を向き、腹前で智拳印を結ぶ。右足を上にして結跏趺坐する。

### 〔品質構造〕

針葉樹(ヒノキ)、一木割短造、漆箔、彫眼。

頭体幹部を通して一材より彫出し、髻のやや後方を通り、左側は耳半ば、右側は耳後ろにかかる線で前後に割り離し、内割りを施す。頭部は三道下で割首する。この体幹部材に、両肩以下(左右とも肘・手首で各短く)、両脚部材、腰脇の三

角材を各短く。このほか体幹部材の右肩下背面および右腰背面の一枚、体幹部材と右腰脇三角材の間の小材、両脚部材と左右腰脇の三角材の間の小材、左右太腿下地付き部の小材、裳先材を別材とする。臂釧・腕釧、各金銅製。表面は漆地の上に漆箔とみられるが、眉および口髭を素地に墨書きする。頭髪は黒色を呈し、元結紐は朱。天冠台には漆箔が残存するか。像内は現状黒漆塗とする。

### 〔伝来〕

石山寺山内、豊浄殿に安置されているが、かつては本堂内陣の裏堂に安置されていた<sup>1)</sup>。

### 〔保存状態〕

体幹部材の右肩下背面および右腰背面の一枚、体幹部材と右腰脇三角材の間の小材、両脚部材と左右腰脇の三角材の間の小材、左右太腿下地付き部の小材、裳先材、臂釧、腕釧、各後補。肉身部を中心に残存する漆箔は当初か不明。像内の黒漆塗も後補か。

### 〔時代〕

平安時代(一二世紀)

### 〔考察〕

智拳印を結んで坐す金剛界の大日如来である。後世の修理により表面を分厚い漆箔が覆っていたが、近年の修理により取り除かれ、当初の彫刻面が姿を現した<sup>2)</sup>。

髮際高でおおよそ二尺を計る坐像で、螺髻を結い、条帛と裙、腰布をまとう姿になる。構造は頭体を通して一材より彫出し、前後に割短いで割首を施している。この体幹部材に両肩以下、両脚部、腰脇の三角材などを短く。

見開きのやや小さい目に伏し目がちな面相や、薄めの胸奥から腹部にかけての緩やかな肉付け、浅く整えられた衣文などは、平安時代後期、特に院政期の作例に広く見られるもので、本像の制作時期もおおよそ一二世紀ごろが想定される。等身大よりも一回り小さな像ながら、細部まで行き届いた表現をみせている。例

えば全体に華奢な体躯ながら、広めにとった肩幅から腰にかけて引き締まる肉体の表現や、毛筋や天冠台などにみる繊細な彫技からは、制作した仏師の確かな技量が窺われる。

前述のとおり本像は本堂内陣の裏堂に安置されていたが、『石山要記』には本像に該当するとみられる像の記述はなく、本来の安置場所は不明である。とはいえ一子院の本尊としては十分な規模の像であり、石山寺山内には廃絶したのもも含め多数の塔頭寺院が存在していたことを考えると、いずれかの本尊だった可能性も考慮されよう。

(1) 奈良国立博物館編『観音のみてら 石山寺』(二〇〇二)。

(2) 楽浪文化財修理所編『文化財修理報告書』一一(二〇一二)、楽浪文化財修理所。

(赤津)



像底



頭頂より



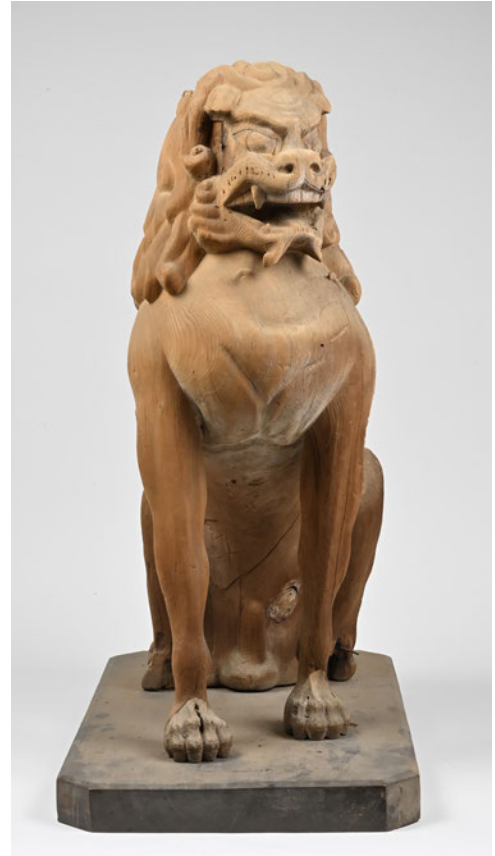
獅子 全身左斜め



獅子 頭部正面



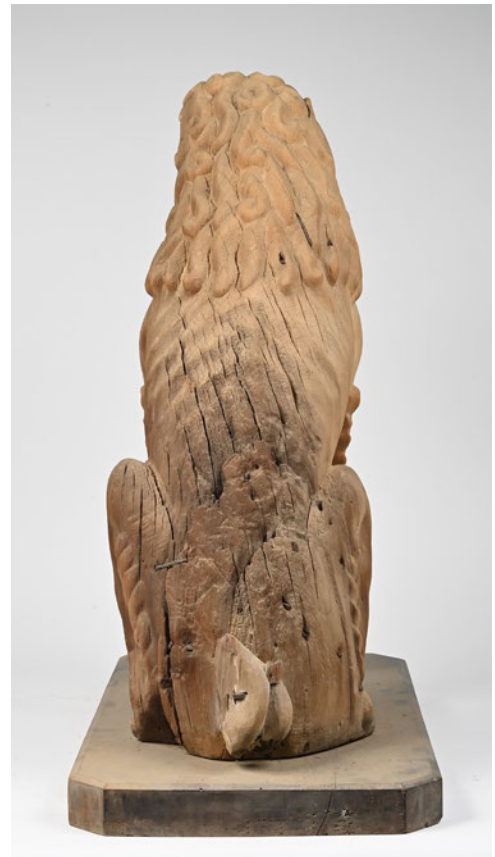
獅子 全身左側面



獅子 全身正面



獅子 全身右側面



獅子 全身背面



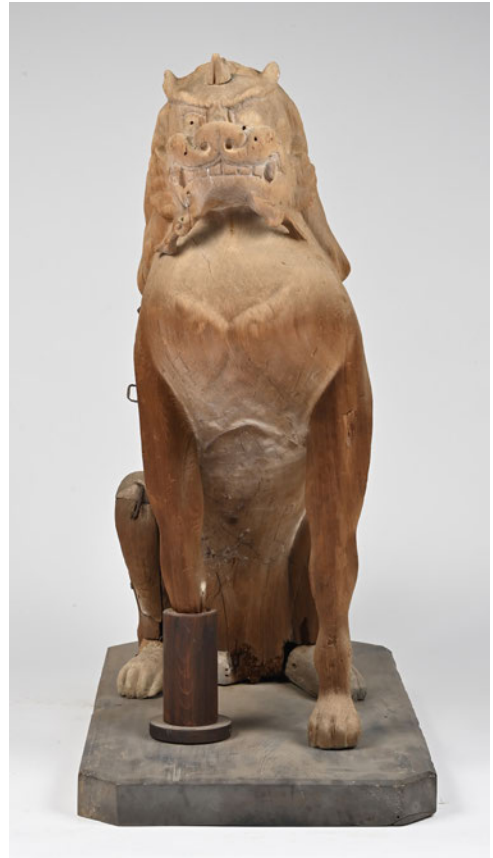
狛犬 全身右斜め



狛犬 頭部正面



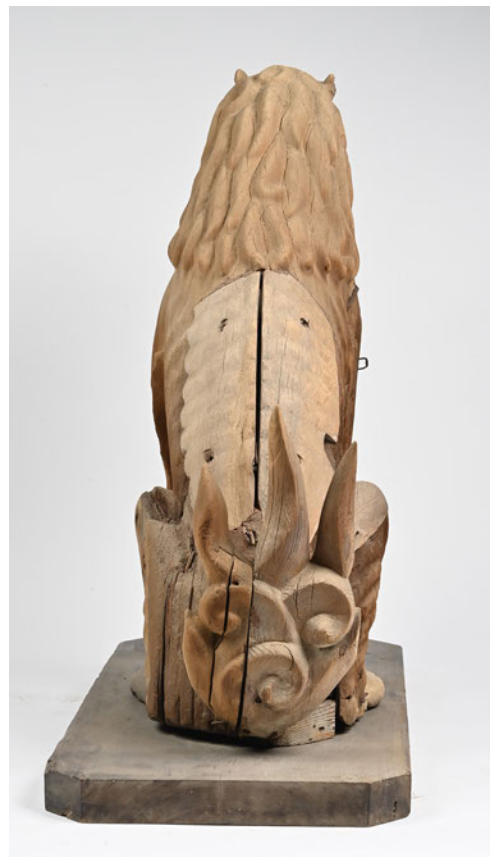
狛犬 全身左側面



狛犬 全身正面



狛犬 全身右側面



狛犬 全身背面

# 一九 獅子・狛犬（解説）

## 本堂安置

木造 彩色 彫眼 一對

### 〔法量〕

#### 一、獅子

像 高 七九・三 全 長 六三・三 体 長 五七・九

幅 二九・九

#### 二、狛犬

像 高 七九・五 全 長 六五・一 体 長 五五・五

幅 三一・五

### 〔形状〕

#### 一、獅子

瞼目、開口し、上下歯牙、舌を表す。両耳は前方へ伏せて表す。鬣は側頭部では明確な束列を形成しないが、後頭部では上下四段に垂れ、毛先を丸める。二条の顎鬚を表す。両頬横に各四条の毛を表し、毛先を丸める。胸部を前方に膨らませ、V字状の切れ込みを表す。背部から体側にかけて肋骨による凹凸を表す。前後肢後部の毛を翼状に表し、毛先を丸める。前肢を伸べ、後肢を屈し、左前肢をやや引き、頭部をやや左に向け、蹲踞する。

#### 二、狛犬

頭頂に一角を表す。瞼目、閉口し、上歯牙を表す。両耳は立てて表す。鬣の束列は上下三段とし、獅子に比して直線的に表す。二条の顎鬚を表し、半ばあたりで毛先を丸める。左頬横に三条、右頬横に四条の毛を表し、毛先を丸める。前後肢後部の毛を翼状に表し、毛先を丸める。前肢を伸べ、後肢を屈し、胴をやや右に捻り、蹲踞する。

### 〔品質構造〕

#### 一、獅子

針葉樹（ヒノキ）、一木造、彩色。

頭体幹部は一木より彫出し、内割りは施さない。両前肢先を別材とする。臀部の数材が干割れにより脱落し、鏝・鉄釘で胴部と接合する。後頭部やや右寄りに干割れを抑えるための鏝が打たれる。尾部は別材とし、鉄釘で臀部に固定する。上顎にそって植毛のためと思われる孔が連なる。

彩色は剥落が著しいが、口部周辺などに白下地が認められる。頭部に緑青が認められる。

#### 二、狛犬

針葉樹（ヒノキ）、一木造、彩色。

頭体幹部は一木より彫出し、内割りは施さない。頭頂の一角を別材とする。右後肢前面材が干割れにより脱落し、鏝・木製柄で胴部と接合する。背部、両後肢先、右後肢膝部、左後肢の小材数材、臀部左側地付きの小材を別材とし、鏝・鉄釘で固定する。右体側などに干割れを抑えるための鏝が打たれる。尾部は別材とし、鏝で臀部に固定する。上顎にそって植毛のためと思われる孔が連なる。彩色は剥落が著しいが、口部周辺などに白下地が認められる。

### 〔伝来〕

石山寺本堂に安置。もとは本堂東側の三十八所権現社に安置されていた。後述のように本像は平安時代の作とみられ、慶長七年（一六〇二）の三十八所権現社の建立を遡る。慶長七年以前の伝来は不明である。

### 〔保存状態〕

#### 一、獅子

口鬚、両後肢先、亡失。顎下の毛遊離部欠失。両前肢先、尾部、鏝、鉄釘、框座、以上後補。

#### 二、狛犬

口鬚亡失。右前肢膝以下欠失。頭頂の一角、背部、両後肢先、右後肢膝部、左後肢の小材数材、臀部左側地付きの小材、尾部、鏝、鉄釘、框座、以上後補。

### 〔時代〕

平安時代（一二世紀）

〔考察〕

本像に関する先行研究として、光谷拓実、山下立、高梨純次各氏の指摘が挙げられる。光谷氏は、奈良文化財研究所が実施した年輪年代法による調査の結果、獅子の最も外側の年輪が治暦五年・延久元年（一〇六九）、狛犬は寛治八年・嘉保元年（一〇九四）であり、一本の木材を割って一对の獅子・狛犬が制作されたと見られることを指摘した<sup>①</sup>。

次に、山下氏は、この年輪年代法の調査結果を受け、様式的な観点から本像の制作年代を考察した<sup>②</sup>。氏は、本像の造形的特徴として、小ぶりな頭部、肉付きの良い胸部、すらりと長い前肢、引き締まった下半身、細身で丈の高い体軀を挙げている。そして、こうした特徴は滋賀・大宝神社像などの平安後期から鎌倉時代に至る作品中に広く認められる傾向であるとす。また、本像の二条の顎鬚について、滋賀・御上神社像（平安時代）にも認められ、本像の制作年代を推定する手がかりになるとする<sup>③</sup>。そして、これらの諸点を踏まえ、本像を一二世紀前半に遡らせることは不可能ではないと結論している。

高梨氏は、石山寺が承暦二年（一〇七八）に焼亡し、永長元年（一〇九六）に本堂が再建供養を遂げたことを挙げ、年輪年代法の調査結果が石山寺再建の時期と符合することから、本像の制作年代について十分な議論が必要であることを提起している<sup>④</sup>。

本像の、鬣の彫りが深く立体的な点、胴体を捻りやや動きがある点などは、平安時代末から鎌倉時代にかけて顕著になる要素である。ただし、いずれの要素も仁安三年（一一六八）頃の制作にかかる広島・厳島神社獅子・狛犬にすでに見出せるものであり、本像を一二世紀に遡る先駆的な作例として位置づけることは決して不可能ではない。獅子・狛犬とも内割りの無い一木造で、二本の顎鬚を同木から彫抜いて表すなど古風が看取されることも、この推定を後押しするものである。とはいえ、年輪年代法の調査結果は、用材が伐採された年次を示すものであり、実際の制作年代は幅を取って考えるべきである。

本像の存在は尊賢撰『石山要記』などの寺誌類に見えず、伝来の項に記すように、慶長七年以前の本像の伝来は不明である。ただ、文治二年（一一八六）書写の「範賢灌頂記」（校倉聖教第八函一一号）の「布施分配」の項において「三十八所」「近津尾明神」「龍蔵」という現在まで続く石山寺の鎮守神が確認できること

は留意され、平安時代末には鎮守社が建築を伴うかたちで成立していた可能性が高いとみることができ。本堂が永長元年に再建供養を遂げたのち、周辺の諸堂が順次建立されていったと思われ、三十八所権現社も一二世紀前半に再建ないし創建されたと考えられよう。

本像の洗練された作風や獅子・狛犬として比較的大型であることからすれば、平安時代に貴顕の信仰を集めた石山寺の鎮守社のための造像として違和感はない。鎮守社の建立が行われたと見られる一二世紀前半に本像もあわせて造立され、当初より三十八所権現社に安置されていた可能性を考えるのも、あながち不当ではなからう。そして、この想定は造形や年輪年代法の調査結果とも矛盾しない。

① 光谷拓実「石山寺木造狛犬は最古級」（奈良文化財研究所編『文化財論叢』四、二〇〇二）。  
② 山下立「石山寺木造狛犬の制作時期をめぐって」（滋賀県立安土城考古博物館紀要）一四、二〇〇七）。

③ 山下氏は、同様の二条の顎鬚が、奈良・東大寺南大門石造獅子、京都・由岐神社石造獅子などのいわゆる宋風獅子に見られることを挙げ、本像のそれも大陸の獅子に淵源を持つことも指摘する。

④ M I H O M U S E U M 編『獅子と狛犬 神獣が来たはるかな道』（青幻社、二〇一四）。

⑤ 厳島神社像の制作年代については、伊東史朗「厳島神社の獅子・狛犬」（『学叢』二〇、一九九八、改題・改稿の上、同『神像の研究Ⅱ』〈思文閣出版、二〇二四〉再録）を参照した。

⑥ 大津市歴史博物館『石山寺―密教と観音の聖地―』（二〇二四）。

（柘植）

大津市歴史博物館調査報告書13

大津の彫刻2 石山寺1

編集・発行

大津市歴史博物館

〒520-0037

滋賀県大津市御陵町二番二号

電話 〇七七―五二一―二一〇〇

発行日

令和八年（二〇二六）三月七日

印刷

兼松綜合印刷株式会社